

500  
22



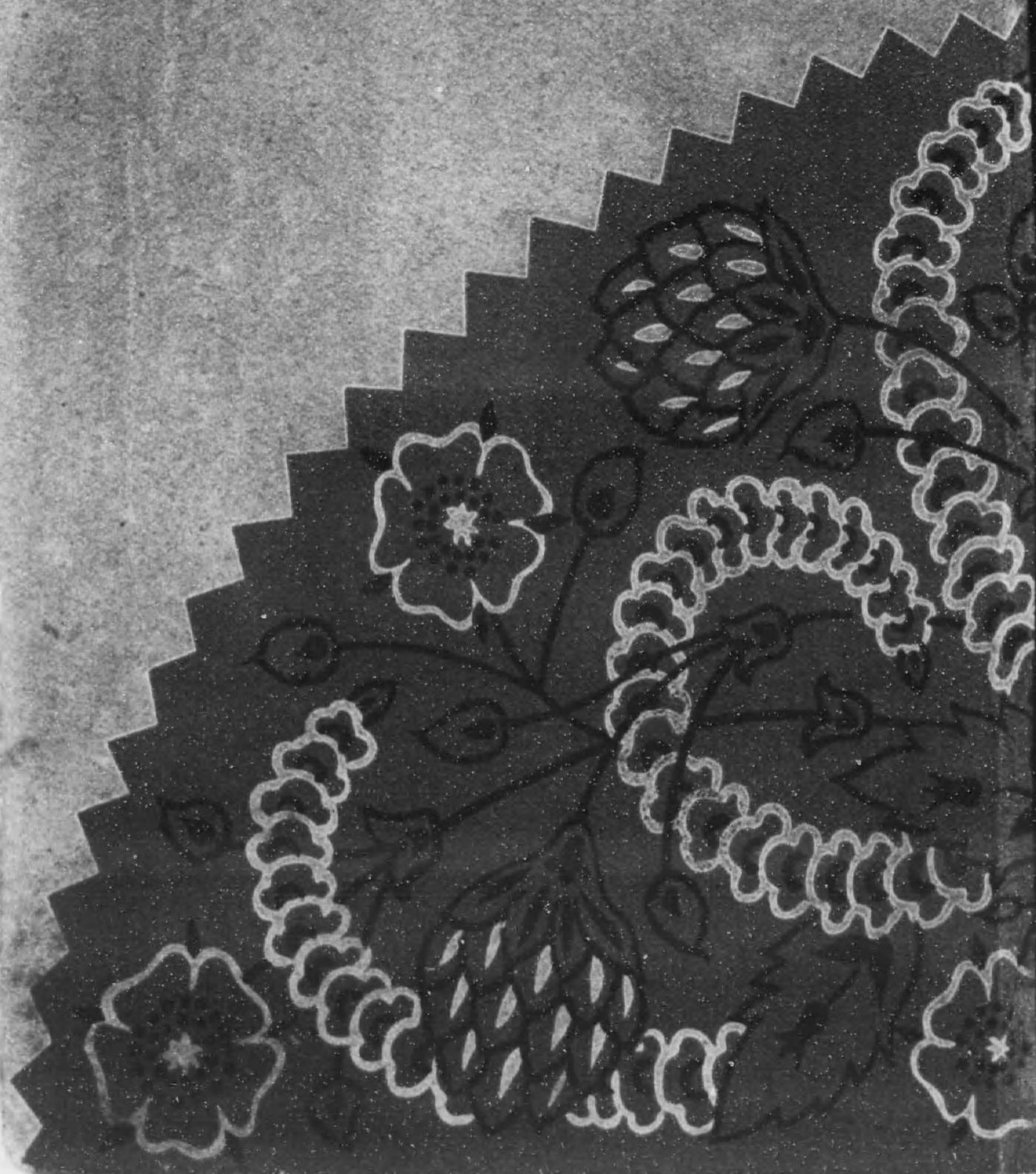
始



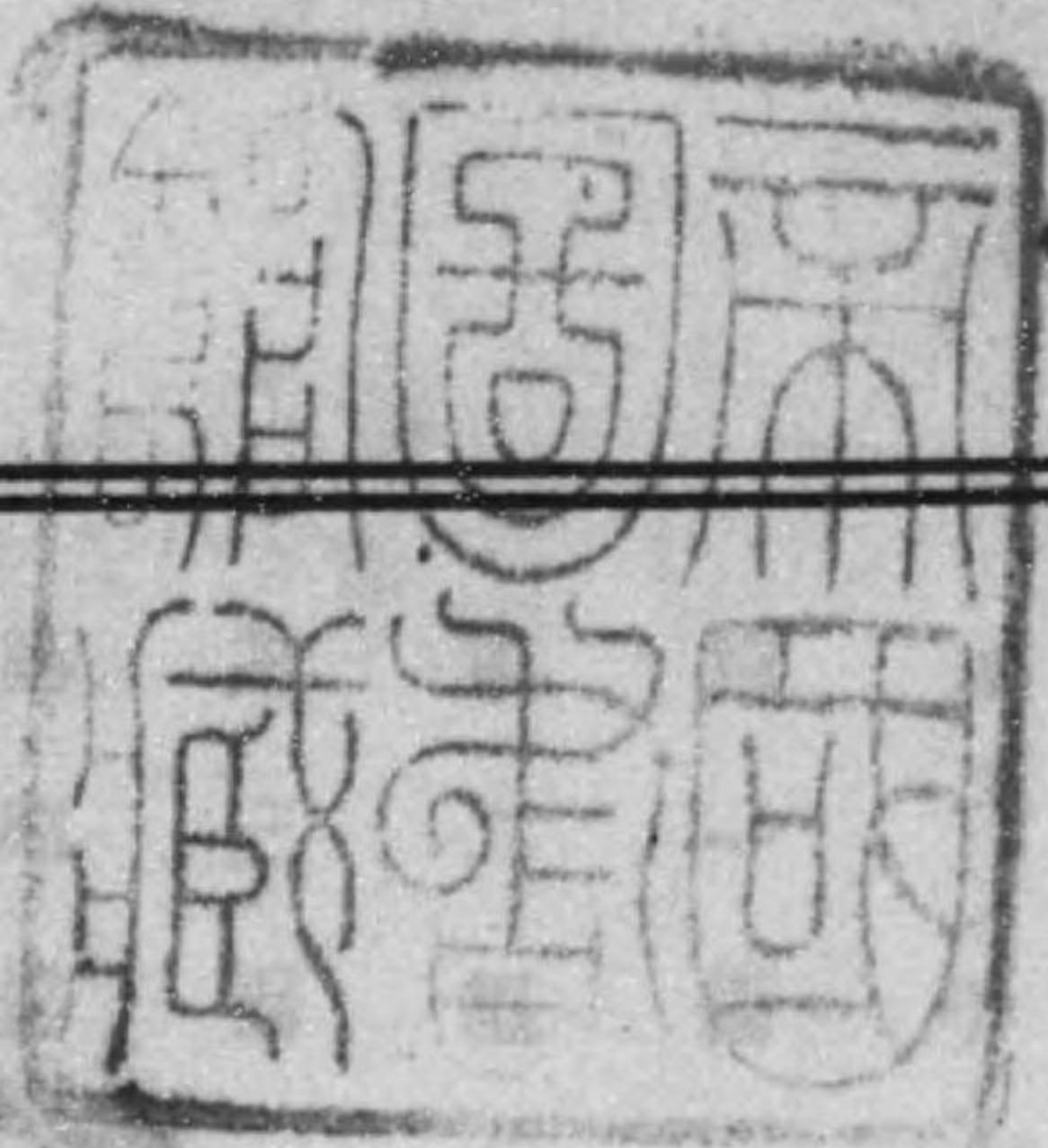
2.7.19

2.7.19

**D'ANNUNZIO**



500-22



死の勝利

ダヌンチオ全集

第二卷

三上於兔吉譯

大正  
11. 6. 20  
内交



天の御座

三上 休 吉 霸



ダヌンチオ全集

ダヌンチオ全集 第二卷目次

第一編	過去……………	一一九四
第二編	父親の家……………	九五—二〇二
第三編	隠 栖……………	二〇三—二四四
第四編	新らしき生活……………	二五—三九三
總頁數……………		一一四〇八

目次

第一編 序のしき序詞……………一頁

第二編 序……………一頁

第三編 父戀の家……………一頁

第四編 序……………一頁

第五編 やま全集 第二巻目次

過去

PM 2.205



一團の人々が胸壁に凭りかゝつて、下の街路を瞰下してゐるのを見て、イボリタは一聲叫んで立ち停まつた。

「何があつたんでせう？」

我知らず恐怖の微かな動作で女はジオルジョの腕に我が手を掛けて、彼を引さ留めた。

「誰かが、胸壁を越して身を投げたに相異なる」と、一寸の間群集を見守つた後で、ジオルジョが云つた。「戻つた方がいいの？」と彼は云ひ足した。

女は躊躇した、恐怖と好奇心との兩つに分割されて。「否」と女は應へた。「すつと行きませうよ。」

兩人は胸壁に沿つて小路の最端まで進んで行つた、見物の群に近づいて來るとイボリタは我知らず歩行を速くしながら。

それは三月の午過ぎで、ピンツイオは殆んど空寂としてゐた。間を隔いて何かの物音が物倦げな

妻

重たい大氣を通じて微かに傳へられた。

「左様だ、それなんだ」とジオルジオは云つた、「誰かゞ自殺を遣つたんだ」

兩人は群衆の列外に立ち停まつた。何の眼も下の鋪石道を見つめてゐた。彼等の大部分は仕事かのない労働者で、さまざまの顔面の一つとして憐憫が悲歎を表現してゐるものは無く、同時に彼等のさつとした凝視は彼らの眼にある牛のやうな愚昧さを添へてゐた。

一人の少年が其光景を見ようと夢中になつて駆けつけた。けれども彼が未だ凭りかゝりもしないうちに、群衆の中の誰かゞ、得意と嘲弄の云ふに云はれぬ音調で、呼ばはつた、宛も其男は他の失望を喜んでゐるかのやうに――

「遅過ぎたい、もう數んで行つちまつたんだ」

「何處へ？」

「サンタ、マリヤ、デル、ボボ」

「死んだの？」

「死んだ——死んだ。」

古びと汚穢で皺つばい衣服を着、頸の周りに大きな毛織物の襟巻をした他の一人の男は、胸壁か

らすつと乗り出て蘇りかゝつて、口から煙管を取り乍ら、

「彼處にあるのは何だらう？」と呼ばはつた。

大傷でもしたやうに拗ち曲げられ、痕痕になつたその口は、苦々しい唾液が絶えず流れて來るの  
で歪められ、その聲は何かの洞穴の奥でも軋々するやうだつた。

「向ふの方の地面の上にあるのは何だらう」

下の街路の圓壁の罫に一人の馬丁が何物かの上へ身を傾めてゐた。見物共はその答を聞き漏らす  
まいり黙り返へつて、身動きもしなかつた。彼等は鋪石の上に、黒い泥土の敷かれてゐる外には、  
何物をも識別する事が出来なかつた。

「血が小許り」と馬方が姿勢を變へずに答へた。そして洋杖の尖端で彼は泥土の中を何物か物色し  
つゞけた。

「何か他には？」と煙管の男が訊いた。

馬丁は洋杖の尖に何物かを支へながら起ち上つた、そのものゝ種類は上から見決める事が出来な  
かつた。

「頭の毛」



「何んな色！」

「艶がい！」

入聲は高い圍壁で形造られた井戸のやうな裡に怪しげに反響した。『ジョルジョさん、行きませうよ。』とイツポリタは繼んだ。

幾らか蒼褪めて、惱亂されて、彼女は愛人の腕をうち振つた。彼が其の場面の怖ろしい細説に心を奪はれて胸壁に鼻りかゝつてゐたときに。『死んだ！』と彼女が叫ぶやうな叫びが、その悲愴な場所を立去つた。兩人とも、かうした最後に依つて喚び起された滅入るやうな回想に没頭されて、その鬱屈を顔にあらはしながら。『死人といふものは幸福だ』とジョルジョがすぐに口走つた。『彼らは最う疑惑する原因がないだ！』

「真個にさうですね」

彼等の聲は言ふ可からざる悲愁に幽かになつた。

彼女は頭を垂れ、悔恨の色を帯びた、ある苛棘まで、附加へた――

「あはれた戀だわ！」

「どの戀が？」と、ジョルジョがなほも自分の思索の順序を追ひながら訊く。

「兩人の戀が」

「そんなら、貴女はそれが終焉に近づいてゐると思ふのですか？」

「私の方ぢやないけども」

「そんなら私の方がと、言ふんですか」

殆んど抑へる事の能ない激昂の感情が、彼の聲を鋭く尖らせた、彼が彼女を凝つと見つめて、繰り返した――

「そんなら、私の方がと言ふんですか――どうです」

けれども女は黙つてゐた、たゞ頭をもつて低く垂れ下げさせながら。

「貴女は答へられますまい、何故なら貴女は眞實を云つてゐない事をよく承知してゐるから」

言葉が絶れた、そのとき互に相手の心を讀まうとする壓倒するやうな慾望を感じ乍ら。

「それが戀の苦痛の始まる原因なのだ」と彼は言葉をつゞけた。『貴女は未だそれを氣が付かないが――私の方では、貴女が歸つて來てゐてから以來といふものは私は不斷に貴女を注目してゐる。そして毎日毎々新らしい徴象を發見する』

「それは毎日毎々新らしい徴象を發見する」

「何んな徴象を？」

「實に忌はしい徴象です、イツボリクさん、あゝ何といふ恐ろしい事だらう、戀をして而も一分間も施む事のない明瞭な洞察力を有つてゐると云ふ事は！」

彼女は微かな反抗的な身振りで頭を振つた、そして顔が曇つた。以前に非常に屢々起つたやうにもう一度また敵意の感情が兩人の間に突發した。雙方とも不正な疑惑に傷けられて、物憂い、默想的な憤怒で内心それに反抗し、それが屢々、冷めたい、回復し難い言葉や、本氣な譏諷や、馬鹿げた責め合ひやに發現した。克服し難い氣狂ひは彼等を襲つて互に苦しみ合はせ、互の心臓を裂き、破らせるのであつた。

イツボリクは不機嫌で無言になつて、眉を蹙め、唇をきつと結んでゐると、シオルジヨは激憤的な微笑をして彼を視つゞけた、

「左様だ、それがその事の始まる原因だ」と彼は繰返した、なほもその苛棘な微笑を買くやうな憂視とをつゞけながら、

「貴女の靈魂のど、ん底に貴女は隠るげな不安を蓄積する——貴女に抑壓する事の出来ない一種の短氣だ。貴女が私と一緒にゐる時に、貴女は一種の本能的な嫌惡を私に對して感ずる、そして貴女に

はそれを征服する力がないのだ。そのとき貴女は無口になつて了ふ——貴女は私に一言言葉を懸けるのにも絶大な努力をしなければならなくなる。貴女は私の云ふ事は何でも誤解する、そしてひとり、で、貴女の聲はほんのちよつとした答へにさへも冷酷になるのだ」

彼女は彼を一つの動作でさへも妨げなかつた。彼女の沈黙に刺されて彼は彼の辯論を再開した、彼の相手方を傷けようといふ毒々しい慾望のみならず、不斷の讀書によつて訓練され、より鋭くされた究明に對する純粹に非個人的な趣味から其事へ驅り込められて、彼は分析家の書物から學んだ所の確定と精確とを以て自個の想念を言ひ表はさうと欲した、けれども丁度彼の自家回答に於て彼が論證しようとした内的意識の扁點が彼の發想をそれに型どつた既定の様式によつて誇張された如くに、彼の會話に於ても鋭敏ならんとする無理強いは屢彼の情緒の眞實さを曖昧ならしめる事を召致し、彼をして他の人々の行爲に於て彼が発見したと自認する隱密な動機に關する誤謬に彼を導いた。心理的觀察の一斑——半分は彼自身の、半分は書物から採集した——に累はされて彼の頭腦は遂に彼自身の中と他との双方にある雜有るものを混雜し、混同して了ひ、彼の心は盡され難いほど人爲的な状態を裝つて了つた。

「私が貴女を非難してゐると、」彼は言葉をつゞけた「思つて下さるな。それは微塵も貴女の缺陷では

ない。人間の心は何れでも色戀の感情に費すべき感覺的勢力の與へられた一限量と給されてゐる時が經つに従つて、此の勢力は必然的に他のあらゆる事物のやうに消盡されなければならぬ。一たび盡されては、此の地上に戀の死滅を食止める力はない。そして、詮するところ、貴女は永い間私を愛してくれた——二年近くも、われ／＼の、第二の記念日は四月の二日に相當する。覚えておりましたか？」

女は、無いた。

「二年間」と彼は物想はしげに繰り返した。

兩人は一つの腰掛の方へ歩み寄つた。イツボリタは疲れ衰えた容子をして、其の上へ崩折れた。僧侶の大きな、黒塗の馬車が車輪の下に沙の輾る音をさせながら並木路を駆け通つた。フラミニオン通りの方から喇叭の音が微かに聞えて來たかと思ふと、沈黙が再び並木路を支配した。雨が幾滴か間を置いて落ちた。

「私達の第二の記念日は確つと悲惨でせうよ」とジョルジョは怨念深く云つた「けれども私達はそれを祝ふやうに定められてゐる——私は苦難な事物に對しては眞個に辛抱なしなんです」

イツボリタは泳えつゞけてゐる痛苦を悲げな微笑に現はした、そして思も懸けない物柔しさで彼

の方を振り向き乍ら。

「どうしてこんなに冷酷な事ばかり仰有るの？」と彼の眼を永いこと見ま入つて、彼女は導ねた。

もう一べん、兩人は互の心を讀まうとする壓倒的な慾望を感じた。彼女は愛人に乘しかゝる狂心の悲劇的な性質を知りぬいてゐた、彼女はかうしたすべての棘々しさの隠れた原因をよく知つてゐた。

「どうなすつたの？」と彼女は彼に口を利かせようと勵しつゝ、彼の重荷にすぎた心を軽くしようとして、訊いた。

「何を惱んで被入るの？云つて頂戴」

彼女の音調と動作の思ひも懸けない優しさは彼を混亂に陥らせた。彼は彼女が彼を理解し、彼を憫んでゐるのを知つた、と、自己憐憫の深い感じが彼の心中に湧き起つた。深刻な感情が彼の至心を震撼した。

「何を惱んでゐるかつて？」と彼は返した、「戀愛さ——」

突懸るやうな調子は全く彼の聲から消えた。自己の癒すべからざる創傷を斯様に曝露させて、彼は自己憐憫に壓倒されて了つた。彼の胸の中に燃えてゐた自分の傍なる女に對する漠とした怨恨は、

溶けて了つた。彼はその怨恨の不道理な事を一承認した、何故ならば彼は宿命的な必然の鍵の強制力を認められたからである。彼の煩苦は何等の人間の仕業から惹起されたものではない——それは人生そのものの眞の本質から生ずるものである。彼が怨恨を懐くべきは戀愛そのものに對してであつて、戀人に對してではなかつた。戀愛——それへ向つて彼の全人は本性から不可抗的に引寄せられるが——その戀愛は此の地上の總有る悲しい事物の中で最も傷ましいものであつた。そして彼は此の絶大な悲愁の重荷を恐らくば最終の極に至るまで負つて行く可く決罪されたのだ！

彼が口も利かず、思案に没れてゐる容子であつたので、イツポリタはまた云ひ出した、

「そんなら、私が愛してゐないとお考へなさるの、ジオルジョさん？」

「さあ——いや、愛してくれるとは思つてゐる。」と彼は答へた。「だが貴女は、暇日も——一箇月のちも——一年後も、貴女が同じやうに満足して私のものになつてゐてくれるといふ保證が何か與へられますか？ 貴女は今日のいまさへ、此の殺那さへ、貴女の全部が私のものである」と證據が見せられますか？ 貴女のどれほどを私は自分のものと云へるんでせう？」

「悉皆を」

「何一つも——でなければ、ほとんど何一つも。私は求めるところのものを獲てゐない——貴女は

實際に私にとつて未知な人です。他のあらゆる人間のやうに、貴女は貴女の内完全に完全な一箇の世界を保持してゐて、私は其の内部へ這入つて行く事が出来ない、又いかなる情熱の大きさを以てしても私の爲に扉が開かれない。貴女の感情、貴女的神情、貴女の思想に就て私は極めて僅少の部分しか知らない。言葉といふものは表現の不完全な器です。靈魂は相通する事が出来ない——貴女は靈魂を與へる事が出来ない。私達の最絶頂の大快樂の際ですらも、我々は依然分離してゐる——一人つきりだ。私は貴女の額に接吻する、けれど其の額の蔭には長らくば私の爲にはない考へが横たはつてゐる。私は貴女に話しかける、けれど私のいかなる偶然の言句が、それには私の戀が何らの場席をも分け前をも持たない他のある時の記憶を貴女に呼び喚させないとは誰が云へよう。一男子が通行し貴女を見る——それは貴女の心の中に私に捉へられない何物かを衝起させる。そして私は貴女の過去の或る記憶が何時現在の殺那を照り飾らせなからうとも決して知る事が出来ない。あゝ、貴女の、其過去の生活といふものは！それは私を絶對の恐怖で一杯にしてしまふ。私が貴女の傍にゐるらば、私は時としては單に貴女が居るといふだけの事から齎される大悦で自分の全人が滲透されてしまふのを感じる。私は抱愛し、語り、聴き、我身を全く貴女の魅惑に没却させる。突如として一つの考へが私を打撃して冷却させる、若しも私が、全然氣付がずに、彼女の記憶の中に嘗て一たび感じられたあ

る感覺の亡影が、遠く過ぎ去つた日のある纏めた幻像を喚び起したとしたら、どうだらう？ ついで私は私の苦しんでゐる事を貴女に説き聞せることが出来なかつた。私達兩人の靈魂が交通する假幻的な感じを私に與へた灼光は突如として消失せる。貴女は隔絶して、近づく事の出来ないものになり、私はたつた單り畏ろしい孤獨裡に遺棄される。十個月、廿個月の親愛も宛るでなかつたかのやうで貴女は貴女が私を愛する以前の時分と全るで同じな一箇の他人になる。私は貴女を抱愛する事を罷めるので、無言に、黙り返つて了ふ、ほんの一吋した接觸に依つてでも取り回し難い過去に依つて貴女の靈魂の奥底に推積された隠れた沈黙物を掻き亂しやしないかと恐れて。さうすると痛苦な沈黙の一小時の一つが兩人に落ちて、其間私達は物倦い惱苦の裡に各々の心を食み盡くすのだ。何を考へてゐるのかと私が聞くと、何を考へて被入ると貴女が應へる。私は貴女の考へてゐる何事をも知らず、貴女も私の事は分らない。刻一刻と兩人の間に深淵が廣がつて来る、其深淵を見るのが實に苦しいので、一種の卑怯な衝動から私はそれに背いて貴女をもつと緊りと胸に擁きしめる貴女を所有する事の喜びは何時も變らず偉いけれども、いかなる大愉快が必然的にそれに伴つて来る深い悲しみを償つてくれる事が出来ようか？」

「私はそんな風に感じてゐるとは申されませんか」とイツボリタが返した。「私はもつと全部的に私の身を任せ果ててゐます。恐らく私は貴方が愛して下さるよりももつと貴方を愛してゐませうよ」

彼女の言葉の優越的な色を帯びてゐるのが彼の狂的に鋭敏な心を復もや怒らせた。

「貴方は考へ過ぎますよ」と彼女はつゞけた「貴方は御自分の思想を嚴密に分析なさる。貴方は私といふものよりもその方にもつと面白味を見出して被入ると私は斷言します。何故なら貴方の思想は毎日新らしくて、毎も變化してゐるのに、私はもうちつとも珍らしさがありませんから。初めの頃は貴方もそんなに考へ込む方でなく、もつと自然な方でした。その頃は未だ苛酷な事などを仰有る趣味も御座いませんでした。口を利くよりも接吻する方が多忙な位だつたのですもの。貴方の仰有る通り、言葉と云ふものがそんなに不完全な表現の様式としましたならば、どうしてそれをそんなに御使用になりますの——随分殘酷な用ひ方もなるんですものね」

暫時、沈黙した後で、自分でも大袈裟な言句を用ひて見たくなつて、

「解剖は死骸を豫想してゐますのね」

「云い終らない間に、彼女は悔ひた——それが野卑に、生意氣に、浮はつて聞えたからだつた。彼女は先刻ジョルジョの心を宥めた、あの情深い優しい調子を失つた事を心底残念に思つた。斯うして再び彼女は、其友の最も忍耐強く、最も優しい看護人にならうとする決心を破つて了つた。」

「お解りでせう、貴方がみんな悪くしたのよ」と彼女は眞實後悔してゐるやうな聲音で云つた。ジオルジョも微かに頬笑んだ。兩人は此の争ひに於て自分達の戀が第一位の受難者であることを知りぬいた。

僧侶の馬車が復た通つた、尾の長い、二頭の馬は落着き拂つて跑を踏み乍ら。樹立は暮れて行く日の——霧深い大氣の中に妖怪のやうに見えた。鉛のやうな、紫色の雲はバラティノとヴァチカンの上に煙つた。硫黄の如く、劍の如く眞直な一條な光線がさいぶれすの尖つた先端の後方のモン・マリオを射つた。

「彼女は矢張り私を愛して居るのかしら」とチオルチヨは想ひ沈んだ。「如何してあんなに怒りほいだらう。私の云ふのが本當だと思ふのか、聽て其の通りになると思ふのか？ 激し易いのは確實な徴候だ。しかし私は同じやうな感情が、不斷に自分の心を嘔むのを氣付いてゐるのではないか。私自身の眞の原因はよく分つてゐる。俺は妬嫉家だ。何を？ 何物でも——彼女の眼に映する其時々の物を」

彼はイツポリタを見た。

「彼女は大へんに蒼褪めてゐる。私は彼女が毎も病的に、銷沈して見えることを望んでゐる。彼女

が其の顔色を回復したときには、私は他の者かと感じる。彼女が笑ふとき私は彼女に對して漠とした敵意の感じ、云はゞ憤怒を抑制する事が出来ない——始終ではないけれども。」

彼の想ひは、落ち来る夕影につれて迷つた。そして彼は彼を喜ばせる夕ぐれの光景と自分の傍の女の顔色との間にある緊密な交通があるのを認めて放心した。彼女の皮膚の柔らかな薄黒い色を通じて微かな紫の色が照り耀き、彼女が首の圍に着けた微妙な黄色い陰影の細いリボンはその縁の眞上に二つの小さな、茶色の飾顔布を顯示してゐた。彼女は非常に美しい。あの顔には毎も、深さの意味の、情熱のあらはれがある。其處に彼女の魅惑の秘神があるのだ。彼女の美は嘗て自分にとつては無味になつた事がない、それは常住自分に何かの幻像を暗示する。けれども、何によつて彼女の美しさは成立してゐるのか？ 私は答へに惑わざるを得ない。嚴密に云へば、彼女は寸毫も美人でない。時々、彼女を視てゐながら、私は痛いほど幻滅され、愕かされる事がある。とすれば、それは私が彼女の容貌を物質的眞理の生な光の裡に見て、それを鹽化する思想の變形させる烈情を以てしなかつた故である。とは云ふものの、彼女には三つの秀麗な美點がある、顔と眼と口と——鹽麗だ！」

彼女の笑ひが復た思ひ起された。

「昨日彼女は私に何を話してゐたか？ 何だか姉さんの事だつた——何であつたか思ひ出せないが——彼女がミラノの姉の家におた頃に起つた何かの瑣細な笑ひ事だつた。「どんなに笑つたでせう！」つて。して見ると彼女は私を遠く離れてゐるときは笑ふ事が能るんだ——面白がる事が出来るんだ——けれども私が持つてゐる彼女の手紙は、何れもどれも嘆漢と涙と絶望的な悔恨とで一杯なんだ」

彼は突き刺されたやうに感じた。何か重大な、回復し難い、然し乍ら明瞭に定限する事の出来ない事實とでも、突然顔をつき合はしたかのやうに、不思議な一種の不安が彼を吹き通つた。彼は聯想の媒介に依つて誇張された情緒の通常の現象を経験しつゝあつた。彼女が不在な間中は毎日、無邪氣な笑ひ聲は斯様にして無邪氣な歡喜に變形されるのだ。イツポリタは彼女の全く知らない凡人共に會ひ、姉婿の友や、景慕者や、ありとあらゆる下らない連中に取り巻かれて、快活に氣輕に日を過したに相異なる。そしてあの思ひ惱んだやうな彼女の手紙は皆んな嘘なのだ。彼はある一節を一語一語思ひ出した、「此處の生活は堪まりません。私達は友達に攻圍されてゐるばかりです。彼等は一時間の平穩をも與へません——ミラノの人達のどんなに欺待好きであるかは御存知です。……」急に彼はイツポリタが中流階級の實業家の群に取り巻かれて、微笑をまきちらして、

でも握手して、彼等の愚劣な會話を傾聴して、無趣味な答へをして、周圍中の野卑と身分を同化させてゐる一畫面を見た。

其の瞬間、彼が二年の永い間堪え忍んで來たところの苦痛の全重量が彼の心を壓しつけた。彼の情人が彼に捧げる事の出来ない時間を費した、彼には未知な世界での生活を考へて。「彼女は何をしてゐるか？ 彼女は誰を見るか？ 誰に彼女は口を利いてゐるか？ 其人々の生活を彼が有するこれらの人々に對して如何に行動するか？」永遠に答へられざる、永遠の疑問である。「あれらの人々の各自が彼女から何物かを取るのだ。」と彼は自己苛責をしつゝ、考へ續けた。「そしてそれ故に私の何物かをも。それらの人々がどれほど彼女に影響を與へ、いかなる感情と思想を彼女の中に起させたか、私は決して知る事が出来ない。イツポリタの美しさは誘惑に充ちてゐて、正に男子の慾望を刺戟するやうな種類の美しさなのだ。あの厭らしい連中の多くの者が彼女を慾求たに相異なる。男の慾望は眼に現はれる。目遣ひは自由だ、そして女といふものは男の眼の慾望に對して防ぐ事が出来ないのだ。自分が慾望を刺戟してゐると氣が付いたとさ、女の感銘はどんなものだらう？ 彼女は必ずそれに對して無關心でゐる事が出来ない——それは何らかの感銘を作り出し、何らかの嫌惡の感情のみにもせよ。斯様に誰でも男は、何人であらうとも、私と戀仲の女を刺

戦する力を持つてゐる。それならば、何の點に私の特別な所有權は存するのだ？」

彼は其の立論を有形の形象に依つて自から證明するのでもつと深く苦しんだ。「私はイツボリタを愛してゐる——すべての人間の愛は終局を告げなければならぬものと知らなかつたなら、到底滅却し難いものと自ら判断するやうな情熱を以て彼女を愛してゐる。私は彼女を愛してゐる、そして彼女が與へてくれるよりもつと以上の何らの法悦をも考へる事が出来ない。けれども、一度ならず、通りすがりのある女の姿が私を突然な慾望で突き刺した。一度ならず、双の眼の鳥渡した閃めが私の靈魂の上に不解な痕跡を残した。一度ならず、私の想ひは通りすがつたある女や、客間で會つたある女や——友達のある者の情人の周囲をさへもさ迷つた。彼女はどんな風に戀するだらう？ 私と思ひ廻らした——彼女の惑魅の秘密は何であらうか？そしてやゝ暫らくの間彼女の回想が、攻圍するといふ程ではないけれども、ある緩漫な執ねこで時々私を襲つて來た、時として私がイツボリタを腕に抱いてゐる時でさへも。それが左様だとすれば、如何して彼女も亦通りすがりの他人に對して突然の慾望に襲はれなかつたと云はれよう。若しも自分が彼女の靈魂を覗いて見る力を持つてゐてそれが斯うした慾望の一閃に横ぎられるのを見たならば、自分は確かに彼女が消し難い汚點で穢されたと思つて、悲嘆のために死なんとするだらう。けれども自分は嘗てその動的な

證據をつかむ事が出来なかつた、目にも見えず、手で觸れる事も出来ない彼女の靈魂は、それにも係はらず破られ易くて、實際彼女の肉體よりもつとひどい位だ。とは云へ、此の比較は十分意義を明らかにする、そしてその有り得べきは確かである。自分が知つてゐる總べてにも拘はらず、彼女は此の殺那に於て彼女の意識へ最近につけられた何か此の種の汚點を熟考して、凝視してゐるとそれが廣がつて行くのを見てゐるかも知れない。」

彼はかう考へて、打たれたやうに、ぎつくりとした。

「どうなすつて？ 何を考へて被入やるの？」とイツボリタが親切に尋ねた。

「貴女の事を」と彼が答へる。

「優しく、それとも残酷に？」

「残酷に」

彼女は溜息を吐いた、そして訊いた。

「歩きませうかね？」

「さう、行きませう。」

兩人は起ち上つて、彼等がやつて來た小路を戻つて行つた。



「ねえ、貴方」とイツボリタが、聲に涙を持たせて、柔しく云つた。「何といふ物惨しい夕方なん  
でせう—」

彼女は立ち止まつて、見廻した。暮れて行く日の悲しい最後の名残りを飲まうとでもするかのや  
うに。

周りに、ピンツイオはひつそりとして人氣もなかつた。紫の陰影が充ちて、それを通じて彫像は  
墓石のやうに白く燦めいた。彼らの足下には市街が煙の柩衣を被いで横はつた。雨が幾滴か氷い間  
を置いて落ちた。

「今晚は何處へ行らしやるの？ 何を爲さるの？」と彼女がきいた。

「私には毫も考へがありません」と男はたよりなげに答へた。

彼等が相並らんで立つたとき、彼等は自分々に苦しんでゐた。彼等を待つてゐるより鋭い痛苦を  
思つて慄いた。それは眠られぬ夜中狂的に就い想像に依つて彼等の防備のない靈現に蒙らせられる  
畏ろしい苦患である。

「宜かつたら、御一緒に居りませうか？」とイツボリタが臆病らしく云ひ出した。

チオルチヨは拗ねた怨恨の感じに一杯になつて、残忍にならうとし、復讐をしようといふ狂的な

慾望に激動されて、「否」と答へた。

けれども彼の心は抗議した——お前は彼女と離れて居る事は出来なからう——不可能なことをお  
前は知つてゐる。そしてすべてのかぶした盲目的な敵意の眞中でも、絶対不可能の明らかな意識は  
彼に一種の肉心的な戦慄を與へた。それは彼を支配してゐる壓倒するやうな情熱と相並存する小躍  
させるやうな誇りの不思議な戦慄である。心の中で彼は繰り返した——いや、自分は今夜あの女  
なしにはすこされぬ——ほんとにすこされぬ——彼は我身の物ならぬある力に支配されてゐる漢と  
した感じを持つた。悲愴な濡が彼を洗ひ去つた。

「チオルチヨさん！」とイツボリタが叫んだ、彼の手をびく／＼と握りしめながら。彼の口は

彼は自殺者の流した血痕を兩人が立ち停まつて俯瞰した場處を認めたと、戦慄した。

「怖いんですか？」と彼が訊いた。

「些とは」と彼女は答へた、猶も彼の手にかちりつきながら。街は最上暗らかつた。けれども  
彼は女を振り解いて、胸壁のところへ行つて、凭りかかつた。街上は最上暗らかつた。けれども  
彼は血痕を舗道の上に見分け得るやうに想つた、何故ならば其光景は未だ彼の記憶の中に生々とし  
てゐたから。暮光の妖しい暗示は彼の心の眼の前に死人の姿をぼんやりと現はれさせた——鏡々上

い髪れ毛の上に血のついた一人の若者の腫るげな輪廓を。それは何人か？何故彼は自殺したか？彼はその血の氣のない物影と我身と一つにさせた。急速な、断れぬな思想が彼の脳中を飛び過ぎた彼は、電光の閃めくやうに、憐れな伯父のデイメトリオを、父親の弟を見た、其人も同じく自殺を遂げたのであつた。白い枕の上に黒い面帕のかけてある一つの顔面、青白い、華奢な、けれども男らしい力に充ちた一つの手壁には三本の鎖で吊るされた小さな白銀の聖水盞がそよ風に揺り動かされては微かな響をたててゐる。——「もしも自分が身を投げたとしたら？——一飛躍で、急速な落下だ。空間を墜ちて行き乍ら人は意識を失ふものか知らず？」彼は空想の裡で自分の身體が下の石にぶち當たる音を聽いて、戦慄した。烈しい痛苦な嫌悪が頭から足まで彼を震撼した——それは不思議な喜悅のまぢつた嫌悪である。彼は來るべき夜の優しい悦樂を想像した。影像と思想とが驚くべき速さで一つ々連続した。

振り返つて彼は、目を大きく見はつてイツポリタが彼を凝めてゐるのを發見した。そして彼は其の眼の表情を讀んだと思つた。彼は歩み寄つて、彼女には慣れつこになつてゐる一寸した身振りで其の腕を彼女の腕の間へ滑りこませると、彼女はそれを自分の心臓へびつたりと緊めつけた。——  
「門を閉めますよ……門を閉めますよ！」

門番共の叫び聲が樹立の下で、ひつそりとしてゐる四邊に響いた。

「門を閉めますよ！」

その叫聲はひき續いてゐる沈黙をもつとも悲しいものにした。そして彼等には見えない男共の咽喉から投げつけられる此の二つの言葉は、實際に打たれるやうな感じを戀人同志に與へた。彼らは歩みを速めて、警告を聞いたことを示さうとした。けれども人氣のない小徑の其處此處で、人聲は執こく繰り返した——

「門を閉めますよ！」

「忌だことね！」とイツポリタは腹立たしげに身を震はして叫んで、もつと足を速めた。

トリニタ・デ・モンテの鐘は祈禱の響をたてた。ロオマは大きな灰色の雲のやうに、地上に廣るがつた形體のない一大塊のやうに見えた。彼方此方、近くの家々では、一つの窓が暮靄を通じて紅く燦めいた。

「さや、來ませうね？」とデオルヂョがきいた。

「行きますわ」

「すぐだ？」

「十一ごろ」

「外れたら、死にますよ。」

「きつと行きますわ。」

兩人は互の眼をぢつと見入つて、互に酔はせるやうな約束を讀んだ。

「貴女は宥してくれるの？」とヂオルヂョはいとしげにきいた。兩人の眼がまた出會つた。

「待つてゐますよ！」と彼が囁いた。

「左様なら！」と彼女が答へた。私が返つて來るまで、私の事を考へてゐてね——左様なら！」

グレゴリアナ通りの終端で兩人は別れた、イツポリタはデイ・カボ・レ・カアゼ通りへ曲つて行つた。彼女が街燈の光に照り耀やく濡れた舗石道を歩いて行つたとき、彼は彼女を目送し乍ら、「ああして——彼女はもう一度自分から去つて、自分が何にも知らない彼女の家へ歸つて行く。そして自分が衣裳で包むやうに彼女を包んだ理想を脱ぎすてるのだ。彼女は全く別な女になり、さらにある女のやうになるのだ。自分は此の瞬間から、彼女に就いて何にも知らない。生活の俗悪な必要が彼女を捉へて、彼女を平凡の水準まで引やり下すんだ。

董の花の匂が一軒の花屋の店から彼の面へ漂ひ出て、彼の心を突き合ふ感情で激動させた。

「あゝ、どうして我々の生活を我々の夢想と合致させることが出来ないのか——奈何して我々自身のためにのみ生活することが出来ないのか？」

## 二

翌る朝の十時頃、ヂオルヂョが未だ青年の回復的な熟睡に陥つてゐたときに、召使が起しに遣つて來た。

「俺は誰にも會はないんだ。」と彼は寢床の中で寢返りし乍ら、非常に腹立しげに叫んだ。

「打棄といてくれ。」

けれどもその煩さくねがつてゐる訪問者の聲が次の室から聴こえた——

「ヂオルヂョ君、誠に御氣の毒だがね、實際君に御話しなければならぬんだ。」

彼はその聲がアルフォンゾ・エクジイリだといふ事を知つてそのために彼の不機嫌は彌増した。

エクジイリは彼と昔の學校友達の、凡才な青年で、放蕩と賭博に身を持ち崩し、今では一種の無賴漢になつて、友達からせびり取つては生活してゐるのである。彼は不身持ちが彼の顔を荒らし

たにも係らず、若い修飾家の風采を十分保つてゐた。けれども彼の容子と身振りとは、卑劣な、屈辱的な手段方法で生活しなければならぬ人々につきもの、云ふに云はれない卑しい狡猾の風があつた。

彼は召使ひが行くや否や室へ這入つた、そして力のない様子を装つて、半分は言句を呑みこみ乍ら、「ジオルジョ君、助けると思つて、もう一ぺん君のお情けにすがらせてくれ給へ。義理の悪い借金を拂はされるんだ、助けてくれませんか。ほんの僅か計——たつた三百リイレ——實に濟まないんだが。」

「それぢや、君は、賭博の借を拂ふんだね？ いやはや、驚いたよ」とジオルジョは冷然として侮辱の言葉を彼に投げつけた。此の悪性者とすつぱり手を切るに至つてゐなかつたので、彼は、人が何かいやらしい獸物を追拂ふに洋杖を用ふるやうに、凌辱に依頼する外はなかつた。

エクジイリは微笑した。

「まあさ、辛くし給ふなよ」と彼は女のやうに泣き、やくりをした。「お金は貸してくれるんでせうね？ たつた三百リイレ。誓つて明日は返却します。」

ジオルジョは、噴飯した。さうして、ベルを鳴らして、召使をよんだ。

「小さい鍵の束を探してくれ」と男が來たときに、彼は云つた。「あの一——長椅子の上の、衣服の中にある。」

男は鍵束を發見した。

「彼處の二番目の抽斗をあけて、大きな紙入を持つて來い——ちや、行つていよ」と男は叫び、半歩召使ひが行つて了ふと、エクジイリは臆病らしく、無理に微笑し乍ら「四百にして頂けませんかね。」

「駄目だ！ さあ、上げるよ——これが君の取つて行く最終だ。歸つてくれ給へ」と男は商人さう、彼は金を手渡しせず、寐床の上へ置いた。エクジイリは復た微笑して、それを掻き集めて、衣箱へ收めた。それから彼は丁寧のやうな皮肉のやうな曖昧な調子で——

「君は見あげたお心持ちですよ」

彼は見廻して、——「其上寐室もお美事なものだ。」

彼は進んで行つて、長椅子へかけて、酒を一杯ついで、巻煙草入れを詰め足した。

「それはさうと、當時の御寵愛は誰です？ 去年のあれと同一ぢやないんですかね？」

「行つてくれよ、君、僕は睡りたいんだよ」

「あれがまた何といふ素晴らしい女だったか！あの眼はロオマ中で一番綺麗だった。未だ當地においでですか？暫らくの間お出會しない。何處かへ行つたに違ひない。ミラノに姉がゐたと思ひますが。」

彼は手酌でもう一杯注いで、一口に呻つた。多分彼は酒場を干して了ふ時間を得るために口を利いてゐたのだらう。

「未だ亭主と別れないんでせうか？經濟の方面もあまり香好くはないやうだが。それでも、毎も良装をしてゐる。二ヶ月ほど以前私はバブイイノ通りで彼の人に遭つた。君の後継ぎにならうといふ男を御存知かね？モンテといふ男だ。いゝや、多分は御存知あるまい——カムパニアの商人で、洗ひあげた綺麗な髪をしてゐる、大きな、肥つた男さ。私が云つた日に、バブイイノ通りで、其奴は女の後を逐つて行つたつけ。男が女を追かけてゐるのは、一目見りや解る。それにまた、モンテといふやつは、うんと金を持つてゐるんだ！最後の言葉は名状すべからざる音調で云はれた。半ば嫉むやうに半ば貪慾さうに、全く不愉快に。彼はそつと、三杯目をやつた。

「ジョルジョ君、ねたんですかい？」

「答はなかつた。彼は寝たふりをしてゐたが、勿論、一言も聞き漏らさなかつた。けれども彼は彼

の心臓の鼓動が掻卷越しにエタジイリに聞えはしないかと思はれたのだつた。

「ジョルジョ君」

彼は微睡んでゐたのを起されたやうには、つとめた。

「なんだ！君は未だゐたのか？未だ歸らなかつたのか？」

「いま歸りかゝつてゐる所だ」とエタジイリは答へ乍ら、寢臺へ近づいた。

「おい、見給へ、龍甲の毛髪ピンが一本落ちてゐるぜ！」

彼は屈んで、それを絨頭から拾ひとつて、念入りに調べてみて、それから敷布の上へ置いた。

「いよ、御果報ですな！」と彼は、以前の皮肉と諷ひをこつとした調子で云つた。「それちや——左様ならいゝと有難う」

「彼は手を伸ばした、けれどもジョルジョは掻卷きの下に自分の手をちつと止めてゐた。黙然家は戸口の方へ向つた。」

「お家のコニヤクはまつたく上等だ。もう一杯頂戴して行こうか」

彼はひつかけて、出て行つた、あとにゆつくりと毒物を享樂しようとするジョルジョを遺して置

SP。

三

「第二の『記念日』は四月の二日に當つた。」

「今度は私達はロオマを離れてお祝ひをしなければ、」とイツボリタが云つた。「私達は永い一週間を懸に捧げつくして——兩人きりで——ここでさへなければ、何處でも——」

「去年の、第一の記念日を覚えてゐますか？」とジオルジョが聞いた。「——覚えて居りますわ。」

「それは復活祭の日——復活祭の日曜日だつた。」

「私は朝の十時に貴方の所へ來ましたかね。」

「貴女は私が毎も大好きな、小さなイギリスのジヤケツを着て、祈禱書を携帯して。」

「あの朝ばかりは私は彌撒へ出ませんでしたの。」

「貴女は大急ぎでしたつけね」

「家から殆んど驅出して來たんです。お祭の日には、一分間の暇もないんですもの。それでも、私

は正午まで御一緒にゐられるやうにしましたの。あの日は午餐のお客様があつたんですよ」

「あれきり、終日二人は會へなかつた。それは實際悲しい記念日でした」

「ほんたうにね」

「あの日のよく晴れてゐたことは」

「貴女のお室は花が一杯で！」

「私も早く外出しました私はピアツツア・デン・スパニア中の花市を買占めて了つたのです。」

「貴方は薔薇の葉を幾掴みも私に投げつけましたね——頭の下や袖の中へも覚えて被居いますか？」

「覚えてゐます」

「あの後で、家へ歸つて着物を脱いだとき、あれがみんな出て來ましたつけ」彼女は微笑んだ。「あの日私は二度と外出しませんでした——出たくなかつたのですもの——私は心の中で午前の事ばかりを繰返して居ましたの。ほんたうに、悲しい記念日でしたのね。」

「物思はしげな沈黙が間を隔いた。」

「あなたは心の奥底で、二度目の記念日にも私達がかうして一緒にゐやうとお考へになつてゐまし

たか？」

「私は——考へなかつた。」

「私だつても。」

「それが戀の性質といふものだ」とジオルジキは沈思した。それはそれ自身の中に終結の豫感を持つてゐる。彼は彼女の良夫を考へた、けれども憎悪ではなくて、むしろ一種の優しい同情を以つて。彼女はいま自由な身であるのに、どうして自分は以前よりもつと不安なのだらうか？思ふに自分ば、彼女の良人を、一種の保證として——自分の戀人をすべての危険から護つてくれる一守護者としてゐるやうである。かう云つては悪いかも知れない——あの時分でも自分は非常に苦しんだのだつたから。けれども過去の苦痛は現在のほどよいとは決して思はれない。自分自身の思慕の順序に没頭してゐて、彼は、イツボリタが何を云つてゐるかをも聴かなかつた。

「さあ、何處へ行きませうねえ？」と彼女がきいた。「決めなきやなりませんよ。明日は朝日ですもの。私はお母さんに、近いうちに鳥渡の間家を明けけるからと話して、準備をして置きましたの。案じる事はないわ、何か尤な口實を考へ出しますから。」

彼女は快活な聲で語つて、微笑んだ。けれども其最後の言葉と共に閃めいたその微笑は何らかの

欺瞞を案出したときの、女性の本能的な満足を明らかに外的に表示したやうに彼には思はれた。

彼女の母親を購す方法をイツボリタが容易く案出した事は彼にとつて不快であつた。彼は悔恨の感とを以て彼女の良人が監視してゐる頭を回顧した。「けれども、如何して彼女が自由の身になつたのをどう怨むのか、それが自分の逸樂を助けてくれるといふ事を知つてゐながら？私はかうした固定觀念から、彼女を侮辱するところのかうした猜疑心から脱する事が出来たなり、世界をも與へよう。自分は彼女を愛してゐるのに、自分は彼女を侮辱する。自分は彼女を愛して居るのに、彼女を卑劣な行爲をなす得るものと信じてゐる。」

「けれども、あんまり速くへは行かれませんか」と彼女が云つてゐた。「何處か俗世間から少し離れてゐて、閑寂な、木立の多いやうな場所はないでせうかね？テイヴォリも駄目。フレスカアテイもいけない。」

「彼處の卓の上にあるペエデカアを持つて来て御覽」

「一緒に見ませうね。」

さう云つて彼女は赤い本を持つて来て、彼が坐つてゐる眩懸椅子の傍に膝まづいて、一幼児のやうなあどけないものとして頁を繰り始めた。ときどき、一行か二行、小聲に読みながら

彼は彼女の頸筋のすつきりした輪廓に見惚れてゐた。其處から艶々とした黒髪が頭の頂きに梳きあげられて、一種の冠のやうに巻かれてゐる彼はその天鵝絨のやうな青白い肌の上に二つの飾額布が並らんでゐて、その美しさを助けてゐるのを見た。彼は彼女が耳輪を着けてゐないのを目にとめた三四日の間彼女は青玉の鈕釦をも着けてゐなかつた。「何か據處ない家の必要であれを犠牲にさせられたのだらうか？彼女が家庭の日常生活に於て、物質的の窮迫にあふといふことはたしかにあり得べき事だ。」彼は努めて其思想を突き込んで、その苦慘な終局までそれを追ひつめて行つた。「彼女が私に倦きたときへそれも遠い事ではあるまい」彼女は彼女に安樂な生活を與へてくれるやうな最初の者の手に落ちる事だらう——其人は、彼女が與へ得るものゝ報酬に、彼女を困窮から救ふことを喜んでするだらう。それはおほかたエクジイリが話したあの男であるかも知れない。世帯苦勞の嫌ひな彼の女はほかの嫌忌などは我慢するだらう。彼女は境遇に同化して行くだらうし、多分其處には何らの煩悶もないかも知れない、何故ならば一足に墮落して行くのだらうから。」

さうして彼は彼の一友人の情婦である、アルベルテニ伯爵夫人の事を想ひ出した。良人と別れて生活の方法がなくて次第々に儲けづくの色慾に陥ちて行つたけれども、表面だけは巧手につかて保た。他の一つの實例が思ひ出されて、彼の恐れてゐる事の可能性にもつと彩色を加へた——それは

靡ろげな未來から彼の前に出現するとき、云ふに云はれない苦悶で彼の心を振る可能性であつた。

彼は彼の恐怖から脱却する事を望む事が出来なかつた。遅かれ、早かれ、彼は彼が九天の上に高めあげた女の墮落を目撃すべく通命づけられてゐた。人生はかうした失落到ちて充ちてゐるのだ。

その間、彼女は泣言云つてゐた、「私には、何にも發見らないわ——グツピオ、ウイテルポ、ルオヴエトトルヴエトオの圖面があるわ——サン・ピエトロ僧院、サン・パオロ僧院、デル・ゼス僧院、サン・ベルナデイノ僧院、サン・ルドギニコ僧院、サン・ドメニコ修道院、サン・フランチェスコ修道院、セルギ・デイマリア修道院」

彼女は祈禱書でも讀むやうに調子づいた聲で讀んだ、そして突然笑ひ出して、頭を後ろへ投げかけて、眞白な額を戀人の唇にさし出した。彼女は開放的なおとなしやかな時の氣分になつて、それが彼女の様子を小娘のやうに見せた。

「貴方はこんなに澤山の僧院や修道院を御覽になつた事がありますの？それはきつと、非常に奇異な場所ぞうね。オルヴエトオへ行きませうか？」

彼女の陽気さは新鮮な水で洗ふやうな作用を彼に及ぼした、そして彼は満足と愉快の感じでそれに没頭した。彼が彼の唇をイツポリタの前頬に押しつけたとき、彼は古い、荒れ果てたグルフ市を



想ひ出して、彼の驚嘆すべき大會堂の無言の譚嘆に全く心を吞まれてゐた。

「オルヴェトオ？ 貴女は行つた事がないんですか？ 考へて御覽なさい、憂鬱な谷間の一つの岩を、そしてその岩の頂上の一つの都市を、それは寂寞としてゐて誰も棲んでないやうな感じを與へる——窓はみんな鎖されて——沙塵のぼい、灰色の街上に草が生え——一人のフランシスカン派の托鉢僧が廣小路を横ぎる——一人の僧正が眞黒な装束をきて病院の前で閉された馬車から下りるまぼよほの老僕に扉をひらかせて——此方には雨を含んだ白雲に對して一つの塔が立ち、——彼方には一つの時計が悠るやかに時をうつてゐる、そして突然ある街路の端れに一個の奇蹟が——大會堂が！」

「何といふひつそりした事ですう！」とイツボリは夢のやうにつぶやいた、宛も眼前にその寂靜な都市の幻影を見てゐるかのやうに。

「私が始めて行つたのはある年の二月でした、天氣は今日のやうに變り易くて、定めなかつた——雨がぱらぱらと來たかと思ふと薄日が洩れる——私はまる一日居つて残り惜しくも返つたが、其處の平和と寂靜とに對する不斷の憧憬を持ち歸つて了つた。あゝ、何といふしげさ！ 私は自分の他に伴侶がなくて、私は相手がほしかつた。あゝ、一人の情人が、といふよりは最愛の、親しき戀

の妹と、此處へ來て、四月の月をまる一ヶ月の間滞在してゐたならば、——突然に射す日光と雨の柔らかい、しめやかな温暖さに充ちた四月を。多くの時を大伽藍の内や周圍で送り、修道院の園へ行つては薔薇をつみ採り、僧院で糖菓を押しかけ御馳走になり、小さな古代のエトウルリアの壺でリキユウ酒を飲み、純白なカーテンを垂れ下げた、ふつくりした寐床の中へ仆れ、伏す事が出来たなら——」

イツボリはその光景に醉はされて了つて微笑んだが、微かな無邪氣な身振りをして云つた。私はほんたうに信心深いんだから、どうぞオルヴェトオへつれて行つて頂戴！」

愛人の足許へ身を盤曲らせて、彼女は彼の兩手を自分の手で握りしめた。猛烈な幸福の感じが彼女の全身を浸透して、彼女に平和と、醇愛の色を帯びたものうい安逸の豫覺を味はせた。

「もつと其處のはなしをして頂戴な。」

彼は彼女の額をキッスした——純情に充ちた永いキッスを——そして彼は永いこと彼女の眼を見つめてゐた。「貴女の額は實に美しい」彼は微かに身を慄かせ乍ら、最後に云つた。

此の瞬間に、現實のイツボリは彼が胸に宿してゐる理想のそれと相一致した。彼は彼女が愛しく、やさしく、身のまわりに高い靈化された詩の空氣をふり撒いてゐるのを見た。彼が彼女に與へ

た標號の如くに、彼女は品があり、芳さがあつた——端嚴微妙と。

「話して頂戴な。」と彼女が囁いた。

清潔な光線が露臺の方から射した。時々窓が微かにハタハタと鳴つて、雨は窓硝子にうちつけ

た。

#### 四

「私達は最う、空想の裡で私達の快樂の最もよい部分を享樂し、私達の感覺の精妙な本質を味つて了つたのですから、私はもうそれを現實に移し代へる考へを放棄しなければならぬと思ひます。私達はオルヴェトオへは行きませう——さうして彼は他の場所を——アルブラツイアレを選んだ。

ジョルジオはアルパノをもアリチアをもネエミの湖水をも知らなかつた。子供の時分、イツポリタは、其後に死んだ伯母をアルパノへ訪ねて行つた事があつた。であるから其處は彼にとつて新奇さの魅力があらうし、イツポリタにとつては遠い昔の回想を起させるであらう。『美しい新しい場面

は人の戀を新にさせ、淨化させるやうに思はれるではありませんか？ 無垢な子供の時分の記憶は決して善い影響を失はない新鮮さと芳い香りとを残す、ものである。

二人は四月二日、正午の汽車で發つことにした。

二人は停車場の群集の中に立つた時、彼等は二人とも、其の胸の中にある不安な悦びが彼等のたましひに顫動するのを感じた。

「誰かに見附からないでせうかねえ貴方、見附かりはしなでせうか。」

と。イツポリタは半ば微笑しながら、半ば顫へながら聞いた。彼女は群集の眼が一様に彼女の上に注がれてゐるやうに想像したのである。

「汽車が出る迄に何の位い時間があるの。」

「どうしたらいいでせう。私、怖くつてしやうがないわ。」

彼等は二人限りになることを願つてゐたが、都合悪く、三人の乗客も一緒にならなければならなかつた。

「ジョルジオはある紳士と婦人とに挨拶した。『誰方なの』と、イツポリタは彼の耳に囁いた。

「後で話して上げますよ。」

彼女は熱心に其の二人の連れを注意した。紳士の方は、長い物々しげな髯と大きな黄ばんだ禿頭の老人で、その頭のまん中に何か柔らかい物に太い指で痕をつけたやうな、深い凹みがあった。貴婦人の方は、印度肩掛にくるまつて、帽子に一種の日覆をつけて、その下から瘦せた、冥想的な顔が覗いてゐるのであつた。其の衣類や風采はいつたいにイギリスの女文士の漫畫を想ひ出させた。老人の眼は、うるんでゐたが、身體にいき／＼としてゐて、えくすたいいへ入つた人々のそれのやうな内部的光明に輝やかされてゐるかと思はれた。彼は非常にやさしげな微笑で、ジオルジョ・オウリスへの叩頭に酬いた。

イツポリタは記憶の中を探したが、駄目だつた。何處であの夫婦ものに會つた事があつたらう？ たしかに何處かで會つた。彼女は此の不思議な夫婦ものが彼女の戀の歴史のある挿話の一部分をなしてゐるやうな、混乱した感情を感じた。

「誰ですの？ おはなさないよ」と彼女はまたお仲間の耳にさゝやいた。

「マアトレット夫妻、マアトレットさんと細君さ。あの人達はいゝ、仕合せをくれるでせう。私達が何處で彼の夫婦に會つたか憶えてゐますか？」

「いゝえ、けれども、私は確かに何處かしらで見かけた事があるの。」

「ベルジアーノの通りの音楽堂で四月の二日に——貴女と初めて會つた日に。」

「あゝ、左様々々、思ひ出しましたわ！」

彼女の目は輝やいた、その符合は非常な奇蹟のやうに彼女に思はれた。彼女は殆んど愛しげに老婦をふたたび見た。

「何といふいゝ、前兆だらう！」快よい憂鬱が彼女をとらへた。彼女は椅子蒲團に頭をもたせかけて、自分の思ひを過去へ溯らせた。彼女はベルジアーノ通りの小さな音楽堂が青い、神秘の暮れに漲つてゐるのを見た——露臺のやうに彎曲した台の上には若い少女の合唱の組がある——その下には絃の樂器を持つた幾人かの樂手が白い椗材の樂座の上に立ち、周圍中には、椗の木造りの坐席に、殆んどその大部分は白髪か禿頭の、小數の聴衆がゐた。指揮者が拍手を取つて、發散する薫香と蓋の花の微度な匂ひが、セバステイアン・ベツハの音楽と滑り合つた。

回復の強い快よさに壓倒されて、彼女は情人に凭りかゝつた。そして「貴女も回想していらつしやいますの？」とさゝやいた。

彼女は自分の感情を彼に傳へたいと思つた——彼女が何一つも——あの嚴かな場合の實に些細な

事さへも忘れてゐない事を彼に示したかつた。

彼は彼女の旅外套のひろい襷の下に竊つと彼女の手を捜して、それを自分の手の中へ旋りと握つた。ふたりとも靈魂の慄きを覚えて、戀の初めの頃のある微妙な感情を思ひ起した。彼等は一寸の間さうしたまゝで、考へに没して、いくらか前後不覺でゐた。しめやかな、温かな空氣と、規則正しい、絶間のない汽車の震動に宥められて、煙霧起しに秘めた緑の風景を瞥見し乍ら。すつかり曇つて了つて、雨が降つてゐた。マアトレット氏は隅の自席で微睡んでゐた、マアトレット婦人は評論雑誌・ライシウムを読み耽つてゐた、そして第三の旅客は自分の帽子を目深に引下して、ぐつすり睡こんでゐた。

ジョルジオは回想の享樂に我身を任せはててゐた。「マアトレット氏は合唱組が拍子外れになる度毎に指揮者と一緒に熱心に拍子をとつてゐた。ある節では、すべての老人が拍子を取つた、宛も音樂の精靈に依つて一齊に搬び去られたかのやうに。空氣は薰香と堇の花の匂に充ちてゐた。それよりも不思議な、それよりも詩的な戀の序曲を自分は想像し得たらうと？ それは自分自身の生涯の實際のエピソードといふよりも、ある忘られたロオマンズの一節であつたと云ひ得られるかも知れない。自分は、いまなほ、最も瑣細な事に至るまで、そのすべてをはつきりと見る事が出来る。第

一の場面の詩趣は自分の戀の全體に夢のやうな陰彩を廣がらせてゐる。半ば寢かしつけられさうになつて、ある漢として形象が一種の音樂的な執こさで、彼の心を襲つて來た——幾粒かの薰香や——堇の花束が。

「マアレットさんを御覧なさいよ。」とイッポリタがそつと云つた。「まるで子兒のやうに靜かに眠つてゐなさる。あなたもうとうとなすつたんぢやないの？」と彼女は微笑んで云ひ足した。「未で降つてゐますね。もうすつかりくたびれて了つて、とても目が開いてゐられないわ」さう云つて彼女は目を半ば閉ちて、長い睫毛の間から彼を見た。

「彼女の睫毛は最初から自分の心を惹いた。」とジョルジオは沈思してた。「彼女は音樂堂の中央に、高い背のある椅子に腰かけてゐた。彼女の横顔は雨に洗はれた窓の明りに對して輪廓を現してゐた。雲が通りすぎると、窓は急にあかるくなつた。彼女は微かに身動きした、さうしたとき自分は彼女の睫毛をすつかり見た——それは異常に長かつた。」

「未だ着くまでには、しばらくあるんですか？」とイッポリタがきいた。

「汽車が笛を鳴らして、彼等に一つの停車場へ近づい事を知らせた。」きつと乗り過して了つたんですよ」彼女が云ひつゞけた。

「そんな事はない！」

「調べて下さらうよ。」

「セエニ・バリアノ！」と喧れ聲が客車に沿つて叫んだ。

ジオルジオは頭を突出して「アルバノかえ？」ときいた。

「いゝえ、セエニバリアノで御座います。」と其男が微笑し乍ら答へた。「アルバノへ御いでなのです  
か？ それぢや、ケツキイナで御乗換へでしたつけ。」

イツポリタが大聲をたてて笑ひ出したので、マートル夫妻は吃驚して彼女を見た、そしてジオル  
ジオも彼女の面白がつてゐるのに釣こまれた。

「どうしませうかね？」

「さあ、第一に、下車した處がいゝわ。」

ジオルジオは手荷物と赤帽に渡した、イツポリタは未だその小さなやり損ひを面白がつて、その  
陽氣な、小刻な笑ひ方をつゞけてゐた。

マートル氏は此の若さと快活さとの大きな力を受けて、それが彼に陽光のバツとさしたやうに影響  
して、彼はイツポリタに叩頭して、物知らかに微笑してゐた。彼女は漠とした後悔の感で、客車

を去つた。

「可哀さうな、マートルレットさん」と彼女は、汽車が荒寥とした田園を通つて進んで行くのを見つ  
めてゐたときに、笑ふとも泣くとも付かないやうな音調で云つた。「私は、あの方とお別れするの  
ほんたうに残り惜しかつた。私が二度とふたゞび彼の方にお目にかかれるかどうか、どうしてわか  
りませう？」さう云つて、ジオルジオの方へ振向き乍ら、「さあ、それで、此の次は？」

驛長はラ・ケツキイナ行きの列車が四時半に出るといふことを彼等に告げた。

「そんなら大して不都合でもないわ。」とイツポリタが云つた。「いまは、二時半です。ぢやあ、此の  
瞬間から以後、私が此の旅の指揮官になるといふ事を布告させて下さいな貴方は供して、いらつし  
やい。坊や、しつかりくつついていゝはぐれないやうになさいよ！」

彼女は、宛るで彼が赤ん坊でもあるかのやうに云つた、そして双方とも面白くて耐らなかつ  
た。

「だけど、セエニは何處でせう？バリアノは何處なんぞでせう？」

近くには何處にも村落らしい目標はなかつた、露出しの低い阜岡の線が、陰鬱な灰色の空の下  
に伸びてゐた。つい近くには、か弱い、振ちくれた、たつた一本の小さな樹木が、濕つぽい風に彼

方此方へ揺すられてゐた。

未だ降つてゐたので、さ迷ひ人は小さな、待合室に逃げこんだ、其處には小さな暖爐があつたが、火の氣はなかつた。一方の壁には、ポロポロになつて、鉛筆の痕が皺のやうについた古地圖が懸つてゐた。もう一方の壁には、ある種の強壯劑の効能を吹聴した、四角な板目紙があつた。たつた一塊の燠の記憶さへも忘れ果てたやうな、暖爐の前には、その内味の馬の毛を、黒い、腫びき革の被覆にあいた澤山の裂目から食み出させてゐる、一脚の長椅子があつた。「まあ、ちよつと！」とベエデカを讀んでゐたイツポリタが叫んだ。「セエニには旅館があるのよ、ロカング・デン・ガエタソといふ名の！」

その大袈裟な屋號がまた新しい笑を起させた。「三時です。二年以前の、此の時間に、私は丁度音楽堂へ入りつゝあつた。」

そして、もう一度、あの偉なる日の記憶が彼等の心を呑みつくした。兩人は五六分間黙つて煙草を吸つて、雨を聴いてゐた、雨は、いまや、一層烈しくなつて來た。震んだ窓硝子越しに、あの儼然な、小さな木が烈風に吹き歪ぢられてゐるのが見えた。

「私の戀は貴女よりもつと遠い過去から始まつてゐる。」と、ジオルジオが口をきつた。「それは、あの日よりも以前から、既に生れてゐたのです。」

彼女は抗つた。

「私は貴女があゝの最初の日に私の前を通りすぎたまんまに、今でも見る事が出來ます。」と彼は言ひつゞけた、過ぎ去つて再と返らぬ頃の強い、深い魅力に惑はされ乍ら。それは消す事の出來ない感銘を私に與へた。それは日の暮れ方の燈ともし頃で、街上は青い明るみが漲つてゐた。私は、たつた一人で、アリスアリの窓の前に立つてゐた。私は繪を見てゐたが、殆んどたれと見てゐるのではなかつた、——何とも云ひやうない心もちで——何かしら物倦さと、ひどい沈鬱と、ある漠然とした理想に對する憧がれとが全心を支配してゐた。あの夕方私は、詩趣と、より高き生活と、すべて微妙にして靈的なる事物に對する望き渴仰を感じてゐた。それは豫感であつたのだらうか？」

永い間、言葉が絶れた。イツポリタは口を利かずに、彼が続けるのを待つてゐた、巻煙草の薄煙を通して彼の聲をきく精妙なよろこびを味ひながら、その煙は彼女と既に面帕で覆はれたその過去の間にもう一つのヴェールを曳くかと思はれた。

「それは二月の事であつた。いゝかえ——私は丁度オムヴェトオから歸つた所で、實際自分は自分

がたゞ聖骨匣の寫眞を手に入れようとしてアリナアリへ行つたやうに思ふ。さうすると、貴女が通りすぎたのだ！ 二、三度、たつた二三度しか、私は貴女があのとときのやうに蒼褪めてゐたの見た事がない。——あんな一種特別な蒼白さで。イツポリタ、貴女には貴女がどんなに蒼褪めてゐたかとても分らない。私はついぞそれをびつたりと直喩へるものを發見する事が出来なかつた。私はひとり考へた。どうしてあの女はあゝして立つて居る事が出来るんだらう？ 彼女は脈管の中に一滴の血も有つてゐないのだらうと。それは、まったく、超自然な蒼白さであつた、そしてあの薄暗らい、青い光の中で、それは貴女にある幽靈のやうな容子を與へた、私は貴女のお供の者には何の注意も拂はなかつた、私は貴女のとつてつける心はなかつたし、貴女も私の方を見向もしなかつた。もう一つの瑣未事を私は憶えてゐる、五六歩進んだときに貴女は立ち停まつた、それは一人の點燈夫が道を塞いだからで。さう云へば、私は今でもあの洋燈の中の小さな焰の尖を見る事が出来る、いかにそれがバット廣がつて、貴女の顔を照らしたかをも。」

イツポリタは稍々暗然として、微笑んだ、女がいつも自分が左様であつたやうな彼女自身の繪姿を見たときに、女の心を掴む悲しさで。

『左様です、』と彼女が云つた。『私は、非常に蒼褪めてゐました。私は、三個月の病氣のあとで床を上げてから一週間になるか、ならないかでした。私は、死ぬ苦しみをし通したのでした。』

突然雨がどつと窓にふきつけて、戸外の小さな木陰殆んど圓く廻はるやうに振ちられた、まるで横抜きにでもされるやうに。數分の間戀人達は此の狂暴と擾亂とを見守つてゐた、その木ば、荒涼と醜怪と、周圍の風景の怠らけた無性さとのまん中に、知覺ある生物の不思議な姿をなしてゐた。イツポリタは何かしら、憐憫のやうなものを感じた。樹木の想像された苦痛は、彼等自身の苦痛を明らかに彼等の前へ膚した。彼等は其の貧弱な、小停車場を圍む荒涼たる寥しさをしみると思つた、其間を、時々、旅客を満載した列車が通る、其の一人々は心の中に彼自身に特有な憤みと心配とを懷いてゐる。悲しい影像が彼等の心の中に急速にひきつゞいた。ほんの鳥渡前は非常に樂しげに眺めてゐた、その事物から暗示をうけて。そしてかうした幻象が消滅して、彼等の意識がそれを追求するのを止めて、彼等自身に歸つて來たときに、彼等は彼等の心の奥底に、何とも云ひやうのない、すべてを通過してゐる苦悶——失なはれて、取返し付かなくなつた日に對する悔恨を見出した。

彼等の戀はその背後に永い過去を持つてゐる、いつでもそれはその後方に死んだ事物の充滿した大きな網を引摺つて行かなければならない。

「どうなさいましたの？」とイツポリタが、聲を震はせて、きいた。

「貴女は——貴女はどうなすつた？」とジオルジオが、彼女を鋭く見ながら、返答した。

何方も相手の問ひに答へなかつた。もう一度、沈黙が来て、彼等は窓越しに眺めつづけた。空は涙の中の微笑をもらすかと思はれた。洩れかゞやく光線が一瞬間、丘の中のある一つの頂を光らせて、消えて了つた。

また他の陽光がさし洩れては、消えて了ふばかりであつた。

「イツポリタ・サンチオ」とジオルジオが、長く引張つたアクセントで云つた、その名の芳はしさを味はうとするかのやうに。それが貴女の名であるといふ事と、たうとう、発見したとき、どんなに私の心は跳つたでせう！ その名は、私には、非常に深い意味があつたのだ。私にはイツポリタといふ名の妹がありました。それで貴女の美しい名前は、以前から私には親しいものだつたのです。それは私を深く感動させました。私はすぐに思つた、自分の唇があのかい、親しい習慣を取り返す事が出来るだらうか？ と。その日いちにち、死んだ妹の追憶が私の秘密な夢想の中に離れず纏ひついて、織りこまれて行つた。私は貴女を捜し出さうとしなかつた。貴女の後をつける事も禁じた。私はどんな方法に於ても執拗くしまいと思つた、けれども私は、心の底に、遅かれ早かれ、い

つか貴女は私を知つて、私を愛してくるであらうと確く信じきつてゐた。何といふ心地よい感じであつたらう！ 私は現實の世界の以外に生きてゐた。私は音楽と幻想的な文學で、靈魂を培つた。ある日私は貴女をジオヴァンニ・ズガムバアテイの音楽會で見かけた、だがそれは貴女が室を出やうとするほんの間際にだつた。貴女は私を見ました。他の時にも貴女は私を見ました（多分、憶えてゐませうが）バブイノ通りの入口の、ピアレ書店の眞すぐ前で出會つたときに。」

「憶えて居りますわ。」

「貴女は小さな女の子を連れてゐた」

「左様よ、あれは、姪のツエチリアでした。」

「私はちつと立ち停つて、貴女を通らせた。私は、私たちの背丈が同じなのに気が付いた、貴女は此んどはひどく蒼くはなかつた。一種の誇らしい感じが心に閃めき渡つた——」

「貴女の推量は當りましたね。」

「憶えて居りますか？ それは、三月の終の頃でした。私の自信は時が経つに従つて加はつた。私は近づいた戀の歡樂を豫想しながら、日々々々と生きてゐた。私は小さな菫の花束を持つた貴女を二度見かけた。私は室内中を菫の花だらけにした。あゝ、どうしてあの春を忘れられやう！ 消なば



消ぬがの、明澄な、微妙な慾望にみちた——ある朝の夢——目は、朝光に開いて居りながら、心は現實の生活に返ることを忌んでゐる——ある寝ざめ際。私はまた、それに依つて一種の空想的な樂しみを心の中に刺戟することの出來た。ある呆らしい、一寸した方法を思い出す。ある日、四部合奏會で、ある壯んな情熱的な文句が間を隔いて繰り返される、ベエトオベンのソナタが演奏されたとき、私は貴女の名が出て來る詩の一行を繰り返す事に依つて、ほとんど、狂ほしくなるほど、自分自身を刺戟した。」

イツボリタは微笑んだ、けれども彼が、彼の戀の最初の兆候を、こんなに、明らかに撰擇して語るのをきいて、微かな怨みを感じた。過去の記憶の方が快いのであらうか？ あの頃の方が現在よりも愛しのであらうか？

「俗生活に對する私の憎惡も」とジオルジオが云ひつゞけた。「ベルチア—通りの忘れられた音樂堂より以上に、幻想的な、神秘的な隠れ家を想像させなかつたであらう。憶えてゐますか？ 階段の上の、街の方へ向いた扉は閉ぢられてゐた——長らく、幾年も開かれなかつたのであらう。出入は酒の匂のする、廣い通路を通つてした、そこには大きなコルクを上につけた赤い看板があつた——憶えてゐますか？辛うじて一人の僧侶と一人の番人を入れる事の出來る位の聖房を通つて、背後か

ら禮拜堂へ進入る。それは叡智の神の聖殿の入口であつた。あゝ、あの蝕んだ腰掛けにかけてゐた老人と老婆どもは！アレツサンドロ・メムミは一體何處から其の聴衆を獲たのだらうか？ 貴女は哲學者や音樂狂ひの集合に於て、貴女が「美」を儉表してゐる事に長らく氣が付かなかつてせう？ まづ、マアトレットがゐた、あのマアトレット氏は現在の最もすぐれた佛教學者です、そして彼の細君は音樂の哲理に就て一冊の本を著しました。貴女の隣に坐つてゐた貴夫人はマルガレエテ・トラウベ・ボルといふ有名な女醫で、視力の機能に關する亡夫の研究を繼續してゐます。長い緑色の外套を着て、爪立ちし乍ら進入つて來た魔法使ひはお醫者の、フレツシエル博士です。獨逸種の猶太人で、有名なピアノ弾きでバツハの崇拜家です。十字架の下に坐つてゐた僧侶は、無双な植物學者のカストラカアネ伯爵です。もう一人の植物學者で、細菌學者で、有名な顯微鏡家のクポオニは丁度あの人と向き合つてゐた。それから立派な生理學者で、忘れられない老人の、大きななりで子供のやうに無邪氣な、ヤコブ・モレシヨットがゐた。ヘルムホルツの音響理論研究の助手のブラゼニルナがゐた。畫家で、哲學者で、波羅門教に没溺した、ラファエル前派のダヴィエス氏がゐた……そして其他の幾人かの人達は、みんな近代科學の最も深遠な研究に身を委ねた稀な人々で人生の冷靜な探究者で、夢想到崇拜の熱心な歸依者達でした。」

彼はその心の眼の前に全光景を召喚して、言葉を杜絶させた。これらの賢人達は宗教的熱情を以て音楽に耳を傾けてゐた。或る者は感に堪えたやうな容子をなし、ある者は我知らず指揮者の身振りを真似し、ある人は合唱組の聲に自分達の聲を合せた。合唱組の男女は、ところ／＼に渡金の痕跡の残つてゐる、ペンキ塗りの木造の臺を占めてゐた。前列は少女で、顔の高さに楽譜を持つてゐた。彼らの下には、胡弓弾きの、粗末な樂座の上に、臘燭の火が濛々とした、青い空氣の裡に黄色に揺らめいた。彼處此處に金色の光が樂器の磨かれた表面へ映つたり、弾き弓の端から閃いたりした。禿頭と、短い黒髻と、金縁眼鏡の、アレツサンドロ・メムミは、何だかひどく謹直になつて、合唱組に向つて、落ついた、嚴酷な様子で拍子を取つた。各の番號の終る毎に、囁き聲が音樂堂を走り渡つて、プラツトフォームからは忍び笑ひと頁を繰る音がさらさらと聞えた。戸外の空が明るくなつて來たとき、臘燭の火が色を失つた。

ずつと高く、嘗つて行列の中で目立つてゐた、金色の葉と襪ですつかり被はれてゐる一つの十字架が、壁から輝いた。聴衆の白髪や禿頭が暗い檜の背景に對してかゞやいた。突然空がまた暗らくなつて、もう一と霞がすべての物の上にかゝつた。殆んどみとめられないほどの香の煙り——それは、薰香であつたか？ めばうきか——空間に漂つた。物さびた聖壇の上には玻璃の花瓶に半

ば、惆れてゐる二つの莖の花束が春の氣息を吐いてゐた。そしてこの二つの消えゆく香りが、音樂に依つてこれらの老哲學者の靈魂の中に喚び起された幻の詩趣を具現してゐるかと思はれた、そのとき、彼等と相並らんで、全く性質を異にした靈魂の中には、非常に異つた夢が消えゆく雪を照らす薔薇色の曙光のやうに湧いて來た。かうして彼はそれが想像の裡でもう一度蘇つたとき、其の光景を詩的な幻象に變はらせた。

「それよりも有り得べからざる、信すべからざる事があつたらうか」と彼は叫んだ、「あれほど智力の衰えたロオマの都市で、シヨオペンハウエルの哲學に關する二卷の論文を出版した一佛教學者が、その人々の令嬢を合唱組の中でうたはせてゐる、音樂狂の學者達の聴いてゐる前で、ある不可思議な音樂堂で演奏された、セバスチアン・パツハの彌撒に自分の空想を溺らさうとは？ それはホツフマンの一頁であり得るだらう。曇つてはゐても穏やかな、春の午後は、これらの年老つた哲學者達は人生の核心から秘密をひつたくらうと營々として努めてゐた研究所から出て、彼等が等しく分つてゐる一つの趣味が、熱酔の點まで享樂するために、一つの隠れた、小禮拜堂に集まる——それは彼らを現世的な事物の上に高めあげて、幻の理想界に運び入る情熱である。そして、此の賢人たちの集會の眞中に於て、やさしい、夢のやうな音樂的牧歌が大佛敎者學の從妹とその友人との

間にあらはれた。そしてその彌撒の終りに佛教學者は何の氣もなく、聖なるイツポリタ・サンチオを彼女が未來の戀人にひきあはせたのだ！」

彼は笑つて、自分の席から起上つた。「私は全く正式に紀念祭の演説をやつたやうですね。」一寸の間、イツポリタは、茫んやりと坐つてゐたが、「憶えていらつしやいますか？ それは土曜日の――復活祭前の日曜の前の晩でした。」

彼等は外へ出て、落日の光りに輝やく濡れた鋪石の上を、ぶうくと歩いて行つた。空氣はぞつと身に沁みた。速くには、大波浪のやうな丘が光線の箭に條目をつけられてゐた。其處此處には、大きな、浅い水溜りが空を仄かに反映して、群青色の所々がさざれ／＼な白雲の間に横がつてゐた。時々、ぱつと光が射して、濡れて雫を落してゐる小さな木を照らした。

「あの小さな木は私達の記憶に固着して残るでせうね」とイツポリタが立ち立つて、それを見乍ら云つた。「ほんたうに淋しさうな――ほんたうに、まあ頼りなさうな。」

鈴の鳴音が彼等に、汽車の近づいたのを知らせた。時は四時半であつた。赤帽が切符を買はうと申出た。

「何時にアルバノへ着くだらうか？」とジオルジオがきいた。

「七時頃で。御座います。」

「暗くなるでせうね。」とイツポリタが、ジオルジオの腕をとりつゝ、少し震えながら云つた。彼女は寒い夕方にある知らない旅館へ着いて、彼とさし向ひで、火の燃えてゐる前で食事をすることを楽しく豫想した。

「もう一べん、内に道入りませうかね？」とジオルジオがきいた。

「いゝえ」と女が答へた。「目が痺やいてゐます、鮮かに、ぶら／＼歩いてみませう――さうしたち、また、温かくなりませうから。」

情愛の云ふべからざる渴望に襲はれて、彼女はいとほしげに彼の腕にしがみついた。そして、聲に、目に、あらゆる動作に誘惑のあらゆる力を打ちこんで、戀人に對するあらゆる女の呪文を工風して、現在の悦樂で彼を酔はせ、眩めかせて、過去の魅力に對して彼の目を、閉させるために、彼女自身が其時あつたよりも、現在の方がもつと可愛く、好ましいといふ事を證據立てやうと努力した。彼があの時分の彼女を残り惜しく思ひ、過ぎ去つた最初のようにを思ひ悲しんで、あのとまばかり戀の最絶頂に立つてゐたと信じてゐるのではないかといふ痛ましい恐怖が彼女を襲つて來た。「昔のあの人を思ふと胸が一杯になる」と彼女はひとり思つて、殆んど涙を制へる事が出来な

つた。「たぶん、あの人もうら悲しくなつてゐるのだらう——あゝ、どんなに戀は過去の重荷を負はされるものだらう！」そしてまた、「たぶん、あの人は倦きたのだらう、恐らく意識せず、それを自分に告白する事さへもなしに、彼は自己を欺いてゐるのだ。彼はもう私に何らの興味をも見出す事が出来ないであらう、そしてもしも私が今でも彼に愛しくすれば、それは他でもない、つまり私が好ましい回想の基調になるからだ。私自身でさへも——彼の傍にゐて、純粹な幸福の一瞬間を味ふ事はどんなに稀だらう！私も苦しい——けれども私は彼を愛して、自分の苦痛を大事にする。そして私の唯一ののぞみは彼にとつて悦ばしいものでありたいといふ事で、私は彼の愛なしの生活を想像する事が出来ない。そんなら何故、もし私達が互に愛してゐるとすれば、私達はこんなに不幸な感がするのだらう？」彼女はもつと重々しく戀人の腕によりかゝつて、彼を見上げて。かうした思ひの影が彼女の愛のいとしい眼の切愛を一そう強烈にした。

「二年以前の、いま時分であつた、私達が一緒に音楽堂を出たのは。そしてあの人は私の心に徹るやうな聲で、戀には無關係な事を話した。——それは、純々な、理想的な愛撫のやうに私の靈魂に觸れて、私は震へた——頭から足まで——その時まで知らなかつた感情が心の中に生まれるのを覚えて、あゝ、その、たのしさは……今日私達は第二の記念日に到達して、私達は今なほ愛し合つ

てゐる。たつたいまあの人が話しをしてゐた時に、彼の人の聲は異つた風に私を動かしたが、その深さは以前の通りであつた。完全無缺な夜が二人の前に横はつてゐるのに——どうして、過去が去つた日を惜しく思ふのか？現在の自由さと、絶對的な親しさとは、たしかに過去の不安や躊躇と相むかふ價值がある。これらの回想こそ私達の情熱に魅力をつけ加へるであらう。私は彼を愛して我身を全く彼に献げてゐる。此の二年の間に彼の人は私を變形させて——別の女を作りだした、彼は私に、新靈魂、新感覺、新精神を與へた。私は彼の創造した、彼の手細工物である。彼の人は、彼の入自身の思ひに耽けるやうに、私に没頭する事が出来る——私は、まつた、彼の人のもの——今日も、未來も。」彼の身にすりよつて、「貴方はたのしくなつて？」と彼女がきいた。

「温かい氣息になつて彼を包むかと思はれた、彼女の聲音の熱烈さに動かされて、眞實な幸福の波が矢庭に押し寄せた。「たのしい位ではない！」と彼はこたへた。

「汽車の叫びが二人をびつくりさせた。こんどは二人だけで車室を占めた。彼らは窓を閉めて、汽車が停車場から動き出すまで待つてゐた、それから互に抱きしめて、接吻に陥ちて二個年の戀が教へたあらゆるいとしい名を矢鱈に叫び合つた。しばらくして彼らは、相双んで坐つて、脈搏の激動が次第に靜まつてくるに従つて、微から笑ひが目と唇の上に往つたり、來たりしてゐた。曇つた窓越

しに彼らは、單調な景色が紫色の薄霧の中に翔び過ぎるのを見守つてゐた。

「横になつて」とイッポリタが云つた。「お頭を私の膝にのつけないな」ジオルジオはそれに従つた。

「風でお髯がめちやくちやですな」とさう云つて彼女は指の尖で唇に被ひかゝつた幾本かの毛を撫でつけた。彼はその指をキッスした。それから彼女は、彼の頭髮を揃へた。「あなたもすいぶん長い睫毛ですな」と彼女が云つた。彼女はそれに見とれるために、彼の目を閉ぢさせた。そして彼の額から額頭のあたりを撫でまはし乍ら、彼によりかゝつて、その指をまたひとつひとつ接吻させた。上を見あげて彼は、彼女の唇がゆるやかに離れて、雪のやうに眞白な齒のあらはれるのを見た。彼女はまた閉ぢて、またそれをひらいた、徐やかに、柔しげ、一つの花の花瓣が、眞珠の花心を露出するやうに。

快よい物儘さが彼等に匍ひかゝつて來た、兩人はたのしく、時間も空間も忘れて、汽車の單調なとどろきに睡むたくされてゐた。兩人は愛慕の言葉をさゝやき、交はした。

すると、彼女がたのしげに微笑んで、云つた。「ふたりで旅行するのはこれが最初ですね。二人きりの汽車に乗つたのも最初ですね。」

彼女は彼らが新らしい事をやつてゐるのを斷言して、よろこんでゐた。ジオルジオは身を起して、彼女の頸の、ふたつの飾顔布のま上にキッスした、燃えるやうな言葉を其の耳に囁やき乍ら。

「でも貴方は、おとなしくお待ちなさらなければ」と彼女が云つた。「どんなに楽しい晩を控へてゐる事でせう」

彼女はまた、靜から、小さな旅館を、舊式な家具と白いカーテンのある室を目に見た。

「今時分アルバノには餘り客がありませんまい。」と彼女が戀人の一心をまぎらかすために云つた。

「が、らんとした旅館に二人つきりで、どんなにたのしいでせう！ 新婚の夫婦だと人が思ふでせうよ」

彼女は少し震えながら、もつとびつたり、外套にくるまつて、ジオルジオの肩に寄りかゝつた。

「今日はほんとに、寒いぢやありませんか？ 彼處へ着いたら直ぐ、どん／＼焚かせて、お茶を一杯ですね。」兩人は低い聲ではなしつゞけた、約束を取り換はして、互にある情熱を相手へ傳へつゝ。それから、無言に陥ちて、唇が會つた。彼らはその高い脈搏の外は、何物も見もせず、聴きもしなかつた。やがて、彼等の緊しい抱擁が弛んだときに、一枚のヴェールが俄かに眼の前から曳き退けられて、魔術の霧は巻きさられて、彼らの夢想の室内に火は冷めたく消え果て、人氣なき旅館の寂靜

は感覺を壓迫し、呪符は破られて了つた。イツポリタは椅子蒲團に凭れて、闇中にひろがつてゐる、廣漠とした、單調な風景を、力なげに眺めてゐた。

其間ジョルジオは、彼女の傍で、自分の不信實を考への餌食になつてゐた、脱離する事の出来ない畏ろしい幻に苦しめられてゐた、何故ならば彼はその幻を靈魂の目で——いかなる地上の力も閉ぢることの出来ない儼なき目で凝視してゐたからである。

「何を考へていらつしやるの？」とイツポリタが心をかき亂されて、きいた。

「貴女をさ！」

彼は彼女がほんたうの新婚旅行を、新郎新婦の様子を考へてゐた。「勿論彼女は、現在私と居るやうに、その夫と二人きりでゐたのだ。たぶんそのときの回想が突然彼女をあなたに、がっかりさせて了つたのだらう。」彼は二つの停車場の中間での、慌しい、人目を忍んだキッスを思つた——二人の眼が會つたときの突然な、震える心、永い夏の午過ぎの肉感的な懶さを。

彼は、びらりと跳上つた——それは、イツポリタが彼女の愛人を惱ます狂氣の徴候として、熟知してゐるものであつた。彼女は彼の手をかたく握つた。

「惱んでいらつしやるの？」と彼女がきいた、彼は左様だと點頭いて、かなしげに微笑みながら彼

女の方へ振り向いた。けれども彼女はそれ以上尋ねる勇氣が無かつた、彼が酷い、傷つけるやうな言葉が答へるのを恐れて。彼女はそれよりも彼の黙つてゐる方がましだつた。それでも彼の額におぶおぶとキッスしてやつた、彼の思想のめちやくちやくに纏らかつたのを散らかさうとして、いつも彼がするやうに。

「さよよケツキイナへ来ましたよ！」と彼女は汽車が停車場へ走り入つたときに、ほつとして叫んだ。「さあ、急いで、いそいで！ 下りなくちや！」

彼を陽気にさせるために彼女は快活を装つた。彼女は窓を開いて、頭を突き出した。

「寒いけれども、いゝ晩ですね、さう貴方、記念日ですよ、たのしくなくちやいけないわ！」

彼は彼女の澄んだ、やさしい聲をきいて、醜惡な考へを投棄した。爽やかから、冷めたい空氣は彼の心を静め蘇らせた。雨に濡れた風景が、金剛石のやうに冷めたい、透徹した天に蔽はれてゐた。落日の光が一條二條、まだ透明な空間に漂つてゐた。星は吊燭台の枝々のやう一つ一つ點火された。

「たのしくなくちやいけないわ！」ジョルジオは道づれの言葉の反響をきいて、その心が漠然として懂がれて漲つた。燈火の點された、靜かな室は、かうして純粹な、嚴そかな夜の幸福の道具と

しては、あまりに貧しいと彼に思はれた。「私達の記念日ですよ、たのしくしなくちやいけないわ！」  
何を彼はしてゐたか——何を考へてゐたか——二年前の此の時刻に？ 彼は宛もなく街中をさ迷い  
歩いたのだ。ひろくとして場所に對する本能的な欲望に驅られながら、平民共の往んでゐる街區  
の方へ心を惹かれて。其所では彼の誇りと愉快とが周圍の卑しい生活と對照して、増大するかと思  
はれ、其所では都市の喧轟が遠くからでも來るやうに、時々彼の耳へ入るのであつた。

## 五

ルドイギコ・トオニの古い旅舎は、大理石擬ひの、漆喰の壁と綠色の扉の玄關があつて、直ちに  
人をして、憎房のやうな靜寂の感を起させた。家具類は家庭的に眞面目に見えた。寢臺も、椅子  
も、長椅子もみんな、今では使用はれなくなつた、古風のものばかり。淡黄か空色に彩色された天  
井は、真ん中に襪蓋の花飾りか、又は他の——堅琴とか、炬火とか、箭筒のやうな、不定まりの意  
匠がしてあつた。壁紙や絨氈の花模様は褪めきつて了つて、殆んど見分らない。みすばらしげな白  
い窓掛けは鍍金した枠から垂れ、ロココ風の鏡は、その曇つた表面にかうして舊式の品々を反映し

て、それらに、澱んだ沼水が岸邊に興へるやうな、鬱鬱な、殆んど病的な様子を興へた。

「まあ、何ていゝ處なんでせう！」とイツポリタが、周圍の快よい靜けさに感動させられて、叫ん  
だ。そして大きな眩暈椅子に身をくぬらせながら、粗末な白毛絲細工の枕のついてゐる背へ頭を靠  
せかけた。

「私はいつまでも此處に居たいと思ひますは。」

それは彼女に自分の子供の頃や、亡くなつた伯母のジオヴァンナの事を思ひ出させた。

「可哀さうな、伯母さん！ 私は伯母さんが此所のやうな家を一軒持つてゐたのを憶えてゐます。  
家具といふ家具は、百年もの間、同じ場處に立つてゐました。私は、私が硝子の覆蓋を一つ壊した  
ときの、伯母さんの絶望を忘れられません——それは、造花にかぶせて置くやうな種類のものでし  
たが。可哀さうに、聲をたゞ泣んですもの——私は今でも伯母さんが黒いレースの帽子を冠つて、  
コロップ拔のやうな白い鬚れ毛を顔の左右に垂れてゐたのが目に見えます。」

イツポリタは、暖爐の火の光りを夢のやうに凝視めたり、時々臉の重さうな、紫色の輪の出來た  
眼でジオルジオに微笑しかけたりし乍ら、度々聲を變らせつゝ、悠つくりと話してゐた。すると街  
上は道路からの上の石工共の鎚の音が單調に、規則正しく聞えて出た。

「それからまた、二つか三つ、天窓の開いてゐる、大きな屋根裏の部屋があつて、鳩が飼つてあつたのを憶えてゐます。そこへは、勾配の急な、小さな楷子段を踏んで上つて行く、其所の壁には何時からか知れないが——十字の枠に張り渡して、兎の毛皮が吊してありました。私は毎日、鳩の餌を持つて行つてやりました。私が楷子段を上るのをきくと、みんな戸口へ集つて、開けると、すぐに飛びついて来る。私が床に坐つて、周圍中へ穀物を撒いてやると、鳩は私をとりまきまきす。皆んな眞白いのばかりで、いつもくぐくぐと、睦まじく、遊んでゐました。さると、近所の家から笛の音が聞える——横日同じ時刻に同じ音で。私はまったく恍惚として了ひました。私は毎も窓の下に立つて、口をあいたまゝ、ふり来る音楽の雨を浴びやうと耳を傾けてゐました。時々、疲れた鳩が飛びこんで来て、私の頭を羽搏き廻ぐる、髪の毛の中に羽根を落したりして。目に見えぬ笛の音は漣をたてます。今でも耳の中にあれが聞えるやうで、私は其の節を唱ふことが出来まゝ音楽に對する私の情熱は、あのときの、屋根裏の内で始まつたのでした。」

そして彼女はアルパノの昔の小笛で聞いた一節を口の中で唱つて、人妻になつてから年月を経て女が、嫁入簞笥の底から納ひ忘れた甘い菓子を見つけ出したやうな、淨い悦樂を味つた。しばらく物音が杜絶えた。靜かな旅館の何處かで鈴がチリンと鳴つた。

「それからまた、一羽の跛の鳩を伯母さんが大さう可愛がつてゐて、それが室の中を片足で跳び廻つてゐたのを憶えてゐます。ある日、小さな女の子が私と遊びに來ました、髪の毛の艶々して、クラリツユといふ子でした。伯母さんは悪寒がすると云つて臥床つてゐたので、私達は、カアネンエションの大きな鉢植を、だいなしにし乍ら、露台の上で遊んで居ましたの。すると、あの鳩が出て来て、小しも恐れずに私達を見て、一方の隅へ行つて、日光を浴びてゐました。クラリツユはすぐにそれを捕まへようととんで行きました。哀れな生物は逃げようとしてましたが、その跛をひくのが、あんまり可笑しいので、私達は可笑しくて、笑ひ止まりませんでした。クラリツユはとうとう捕まへました。あれは残酷な子でした。私達は笑ひこけてゐて、何をやつてゐるかも知りませんでした。鳩が烈しく羽搏きすると、クラリツユは羽根を一本ひんぬきました。それから（それを考へると今でもぞつとしますが）彼の子は鳩をほとんど赤裸に抜いて了つたのです、始終笑ひ乍ら、私を笑はせ乍ら、——まるで二人は氣が狂つたやうに。可哀想な鳩が、羽根を抜かれて、血を滴らし乍ら、家の内へ逃げこむと、私達はそれを追駈けたものです。けれども、丁度其時伯父さんの鈴が鳴つて、伯父さんが眩をし乍ら、寢床で呼んでゐるのが聞えました。クラリツユは楷子段を駆け下りて逃げる、私はカアネンの蔭へかくれました。鳩はその夕方死にました、そして伯さんは私がそ



の怖ろしい行ひの犯人だとみんなに告げられて私をオオマへ送り返して了ひました。私はそれつきり、伯母さんに會ひませんでした。どんなに、泣いたでせう！ いまでも私は、あの事には、後悔を覚えます。』

彼女は、低い音調で語つた、目を見張つて火光を凝視し乍ら。それは魔睡の第一期にでもゐるやうに、彼女を磁力で牽きつけるかと思はれ、街の方からは石工の規則正しい鐵槌の音が起つた。

## 六

或る日戀人達は、少し疲れて、ネエミの湖水から歸つて來た。彼らはツエザリニの山莊で、爛漫として咲いた椿の下で小午食をして、それから、全く二人きりで、最も隠された、秘密なものを人が見るときの感じに満ちきつて、『ディアナの鏡』を訪れた——それは働すんだ、蒼い水河のやうに、冷めたくて、底知れなかつた。

彼等は、毎ものやうに、茶を命じた。突然、旅囊の中を捜してゐたイツポリクが、リボンで括つた一つの包を手にして、ジョルジオの方へ振り向いた。

「御覽なさい——貴方の御手紙よ！ 私は毎も持つて歩いてゐますの。」

「みんな？ みんな取つて置いたんですか？」と、エオルジオが云つた、満足の色を明らかに見せて。

「左様よ——どれも——お端書も、電報さへも。たつた一つ、あの人に目付かりさうになつて火の中へ投りこんだのがありませんの、でもその燃えさしをしまつて置きました。まだ二三字位読めるんですよ。」

「見せて下さいな」とジョルジオが頼んだ。

けれども彼女は、嫉妬深さうに、その包をまたかくして了つて。そして、ジョルジオが微笑し乍ら彼女の方へ歩み寄つて行つたとき、次の間へ逃げこんだ。

「駄目、駄目、御目にかげられませんの——駄目ですわ！」

彼女が拒絶したのは、半分は冗談であつたけれども、半分はまた、彼女がそれを誇りと恐れとか、何か秘寶のやうに、嫉妬深く護つてゐたからであつた。そして彼女はそれを、書いた人にさへも見せる事を嫌つた。

「ねえ、御見せなさいよ——御願いだ。私は二年前にかいた手紙が讀みたくて耐らないんだ。どん

な事を云つてゐますか？」

「火のやうに燃えてゐる言葉よ」

「どうぞ——見せ給へよ？」

彼女は、たうとう承知した、戀人のすねだりと抱擁に征服されて。

「ぢや、ともかくも、お茶が来るまで待ちませうね、これから一緒に読みませうよ。」

「暖爐を焚きつけませうか？」

「いゝえ、今日ははんたうに暖かいから」

それは生白い目で、あつた——不動な大氣に顫える銀の尖針が漲つて、青白い光はカーテンを越して来るので、いよ／＼柔らかくされた。ツエザリイニの山莊で摘んで来た新しい堇の花は、その匂ひで室中を充たした。

「バンククラツハオが來ました」とイツポリタが扉を叩く音を聞いて、云つた。そして、善良な老給仕のバンククラツイオは、不斷の微笑と無盡の茶瓶とを以て這入つて來た。彼は茶盆を卓子の上へ置いて、夕飯にやはらかい鳥肉を約束して、軽い、彈機のように足取りで、出て行つた。

彼は丸で禿頭であつたが、どこか若い者の様に取残つてゐた。非常に手まめで、日本の神像など

に見るやうな、やゝ釣上つた、細長い、よく瞬く眼を持つてゐた。

「バンククラツイオは、ほんたうに、あいつのお茶よりもよつほど御馳走ですな。」とジョルジオが云つた。

まつたく、茶はちつもと甘くなかつたけれども、その附屬物に一種のチャアムがあつた。コップや砂糖鉢は、形體も容量も、見た事のないものだつた。茶瓶は圓圓の戀物語の場面を畫かれて、薄切りのレモンを盛つた皿にはまん中に黒い文字で押韻の謎がかいてあつた。

イツポリタは茶を注いで——カップは、香爐のやうに煙る——それから、包を解いた。手紙は念入りに、小さな束に分類されてゐた。

「素敵にありますね！」とジョルジオが叫んだ。

「いゝえ、そんなに澤山ぢやないわ！ みんなで二百九十四本。そして二年の間には、よう御座んすか、七百三十日あるんですもの！」

兩人は笑つて、それから相並らんで、卓子に近く卓子を引き寄せて。ジョルジオはかうした戀の證據書類を現前見て、不思議なほど心を動かされて——それは微妙さと強さを兼ねた感情である。最初の頃の手紙は異様に彼の心を掻き別した。手紙のあるものが啓示してゐる誇張された心の

状態は全く理解し得ないと思はれた。ある章句の抒情的な熱情は彼を吃驚させた。若々しい情熱の狂暴さは、此の隠れた、小さな旅館の内で彼を取巻く静寂と對照して、殆んど彼を恐怖させた。一つの手紙には、かうあつた「昨日はひとばん中、どんなに私の心は貴女のために謹息しましたか！ 名の知れぬ苦しみが私を捉へて、一寸眠りに陥る間にも宥してくれず、切めては靈魂の奥から現はれ来る妖怪の爪を免かれないと夜通し起きてゐました。たつた一つの考へが私を囚へて、たつた一つの考へが私を拷問にかける——それは貴女が私を棄て、行つて了ふかも知れぬといふ事です。その事の可能が、これほどの苦痛を、これほどの恐怖を感じさせた事はない。貴女を失ふことを思つたばかりでも白日が暗くなる——太陽は一箇の怖ろしいものになり、天地は無限地獄となつて——私は暗影の谷へ歩み入る。」

イツポリタが出發の後が書かれた、もう一つの手紙には私は、「ペンを握るのに、凄まじい努力をしなければならぬ。私にはもう何らの力の、意志の閃めきもありません。恐ろしい沮喪に征服されて了つた私は、生きてゐるといふ事に對する、堪え難い悪心の他に感ずるものがない。空は灰色で——空氣は、鉛のやうに重苦しく、窒息させる——云はゞ、殺人的な日だ。時間は頑固にのろのろと過ぎる、刻刻に私の苦悶は厳しく、怖ろしいものになる。宛るで靈魂のどん底に澱んだ水が一杯になつてゐるやうな感じがする。此の苦惱は、精神的か肉體的か？ 私は知らない。私はたゞ無

氣力に昏迷して、重荷の——押し潰すけれども殺してくれない重荷の下に横たはつてゐる。他の一つには「貴女の手紙は、たうとう、今日届きました。——四時頃に——私が絶望し果て、了つてゐたときに。私はそれを何百遍となく繰返して讀みました——行と行との間に、言ひ現し難い、——貴女が表現し得なかつたすべてのものを、靈魂の秘密を、——生命のない紙の上に書かれた言葉よりも、もつと生氣に充ちた、もつと甘美な何物かを捜し乍ら。私は貴女に恐らしい渴望を有つてゐる。私は、貴女の手や、息や、注目痕をその紙に捜したけれど——駄目だつた。私は貴女存在の一寸した證のためには、全所有を投げ出しても惜しくない。貴女が接吻した花を何か送つて下さい——貴女が唇を壓しつけた個處を紙にしるして下さい。私をして。貴女が遠い、遠い所から私に送る抱愛を、空想の裡に有たしめよ。私が貴女に接吻してから——貴女を腕に抱いて、貴方が私の熱い凝視の下に蒼褪めるのを見てから、どれほど時が経つたか？ 一年か——一百年か？ 何處へ貴女は行つて了つたか？ 如何なる世界が、いかなる海が、兩人の間に横はつてゐるか？ 私は全く身動きもせず——考へて、考へて時を過してゐる。此の私の室は教會堂の下の窓のやうに、薄暗らくて、もの悲しい。時々私は我身が屍架の上に横たはつてゐるのを見る。私は幻視の沈靜な鮮

明さを以て、ちつと身動きもせず死んでゐる自分自身の身體をつくづく眺める。そして私は、静められ、慰藉されて、その静観うら身を起すのでせう！』こつと風にならぬ文が、粗末な、飾り氣のない宿屋の卓子掛けの上におつびらかれて、唸つたり、わめいたりしてゐる傍には、田舎染みたカツプの中の、何にも知らぬ飲料が靜かに湯氣を立てゝゐた。

これらの狂ほしい感情の回想に耽つてゐたジオルジオは、自分自身の中にそれを再生させて見よう——理解しようとなつた。けれども楽しい周圍の空氣がさうした努力さするには、不適當であつた。和らげられた光線や、蒸發してゐる飲料莖や、花や、香や、イツボリタとくつき合つゐる事や——すべてのものが相待つて、彼の精神を怯懦な状態へ陥らせて了つた。『あの時分の熱は、もう冷めきつて了つたのか？』と彼は考へ耽んだ。『いや、つい先達てなども、彼女のゐない間、自分も少しも劣らず、残酷な苦しみを受けたんだ。』けれども、どんなにしても彼は、あの頃の自我を現在の自我と一致させやうといふ試みに成功する事が出来なかつた。彼は、これらの手紙に見える絶望落膽の人の中に自分自身を認める事が出来なかつた。彼はそれが現在自分が戀を表現すべき文體でないのを感じ、一見してその文句の空虚なのを認めて。これらの手紙は石塔の墓碑銘のやうなものである。墓碑銘がその記念する人物の、大ざつばな、間違つた印象を傳へるにすぎないやうに、

これらの手紙も戀人が通つて來た種々な感情の階段を再現するには全く失敗してゐる。彼は戀文を書く際に人を捉へる、驚くべき感奮興起をよく知つてゐた。そつ興奮の襲來によつて、數知れぬ感情の女波男波は相集り、奔騰馳突して一つの狂瀾怒濤となる。戀する人は自分が言ひ表はさうとする一切のものを十分に意識せず。またその目的に對する手段としての、言葉の不適當な使用に妨げられる。そこで、ある通りの情熱を記述するのぞみを斷念させられて、彼はその熱烈さを、誇張された文句に依つて、修辭學上の平凡な技巧に依頼して傳へようとする。それが、戀文といふものが、どれを見ても同じやうで、崇高を極めた情熱の言葉が謔言と大差のない所因である。

『このすべては、激烈、狂暴、過度である』とジオルジオは一人思つた。『けれども、何處に自分の靈魂の微妙な發散があるか——何處に自分の精妙は、紛糾した愁愁が——脱出する事の出来ない迷宮へでも這入つたやうに、靈魂が道に迷つて了ふあの、いりくんだ、深刻な悲哀は、何處にあるか！ 彼はこれらの手紙に於て、彼の靈魂の稀有なる性質がそれを開發するために彼が平生非常な注を拂つて意ある性質が失はれてゐるのを認めて、鋭く悔悔した。次第に彼は、讀み進んで行く中に純粹な修辭の部分をつつかりぬかして、むしろ些細な事實や、事件の細目や、重大な挿話の譬へなどを拾ふやうになつた。

例へば、一つの手紙には、「十時頃私は、私達が夕方々々出會つたモルテオ公園へ習慣に驅られて  
掛かけて行きました。あなたがいよいよ出發する瞬間の前の三十五分は、全く慘刑であつた。貴女  
は行つて了つた——行つて了つた、私は貴女と會ふ事が出来ずに——貴女の顔を最後に接吻で蔽ふ  
事も出来ずに——忘れ給ふな——忘れ給ふな。十一時頃ごろ、ある本能が私を見廻はさせた。貴女  
の良人が一人の友達と、いつもある人達と一緒になつてゐる婦人這入つて来た。癡ひもなくある  
人達は貴女を見送つた歸途である。私は烈しい苦痛に襲はれて、起ち上つて其場を去らなければなら  
なかつた。あの三人連れが目の前で、何事も起らなかつたかのやうに、常の如く、笑つたり、話  
したりしてゐるのが、私を激させて了つた。あの人達は私に、貴女が行つた了つた——呼び返せな  
い所へ行つて了つた、といふ事を、明々白々に感じさせたのです。」  
彼は、夏の夕方にイツボリタが、その良人と歩兵士官とに挟まれて、食卓に就いてゐるのを想ひ  
起して。彼女とさし向ひに、氣のきかないやうな、小柄な女がゐた。彼は三天の誰れをも知らな  
かつた、けれども、彼等の舉止や、態度や、風俗な風采などが氣に入らなかつた。さうして彼は自分  
の、精鍊された、優雅な愛人もそれに注意を集注させてゐるらしい、あの連中の談話の下らなざ加  
減を想像してみた。

今一つの手紙には、斯う書いてある。「今日は疑惑と猜疑心と——貴女に對する敵意と執拗な憤り  
とで、一杯だ。すぐさま出て行つて、海へ入るんだ。浪は強くて、快活で。左様なら！ 苦い言葉  
を書きつらぬるのもいやだから。貴女は私を愛してゐますか？ それともたゞの習慣で、愛の言葉  
を書いてくれるだけなのか？ あなたは忠實な人なんでしょうか？ 貴女は何を考へてゐますか？ 何を  
爲てゐますか？ 私は、くるしんでゐる——私はこれらの鋭い疑問を提供する權利を有つ——私は疑  
つてゐます——憚んぞゐます。」

「それは」とイツボリタが云つた、「私がリミニルにゐた時のこと、八月と九月と、——何といふ暴  
風雨の多い月だつたでせう！ 貴方が、たうとう、ドンファン丸でお着きになつたのを、臆えてい  
らうつて。」  
船中で書いた手紙があつた。「今日、二時頃、船はアンユナへ投錨した、ポルトオ・サン・ジオルジ  
オから帆走して来た。貴女の祈りと希望とは、順風をもたらしした。船路は實に素晴らしかつたが  
——それはあとで話さう。船は夜明けにまた出るんです。ドン・ファン丸は快走船の大王だ。貴女  
の旗は横に翻つてゐる——左様なら！ 多分明日まで、九月の二日まで。」  
「會ふには會つたけれども、その毎日の苦しさは？ 臆えてゐらうつしやいますか？ 始終看守され

てゐて。あゝ、私の義姉といふ人は！ 憶えて、いらつしやいますか、貴女がお立ちになる前晩に  
マラテイスティアノのお寺へ詣でたり、サンジュウリアノの會堂へ参つたりしたのを？」

「これは、ベニスから出したんだ。」

彼等は二つの心臓をドキ／＼させ乍ら、讀んだ。「私は今朝九時から、此のベニスへ来てまゐるす  
—深い悲哀をも、私は覚えるが。ベニスには驚嘆させられた。どんなに燦爛た幻想でも、海から  
生えて夢の空の下に華ひらく此の市の華麗さには、及ぶまい。私は悲哀と慾望とで息も絶え／＼だ。  
どうして貴女が此處にゐなのいか？ 此の間の言葉の通り、貴女が来てくれさへしたら！ せめて  
一時の人目を偷んで、我々の數知れぬ記憶の上に今一つの——最もうるはしい——記憶を加へる事  
が出来たであらうのに。」

二人は讀みつゞけた。「時々、妙な考へが私の心を閃めき通つては、私を深く動かす——それは狂  
妄な空想——一個の夢だ。私は貴女が突然にベニスへ——たつたひとりで、私のために私一人のた  
めに現はれるかも知れないと思ふ、その夢だ！」更にまた、「ベニスの美しさは、あなたの美しさを  
受け入るに適當して出来てゐる。あんなに豊かな、温かい貴方の顔色の青白い琥珀が黄金に溶けて  
濁んだ薔薇の色を交へた風情は——ベニスの大氣と最もよく調和すべき、理想の色だ。サイプラス

の女王、カテリケナ・コルメロオとは、どんなんであつたか知らないが、私には貴女に似てゐたや  
うに思はれて仕方がない。昨日、私はその、カナラツソオナ宏壯な宮殿の傍を通つたが、——それ  
は詩を息づいてゐるやうに思はれた。貴女はたしかに、遠い昔、あの宮殿に住んでゐたに相異なる  
——貴女はあの壯麗な露臺に轟りかゝつて、水の上に舞踊する日光を見守つてゐたでせう。左様な  
ら、イツポリタさん！ 私はカナラツソオに、尊い貴女に適はしい大理石の宮殿を有つてもゐないし、  
貴女も亦貴女の思ひのまゝになる人ではない。」

それから、更に又、「此處には、パロロ・エロネゼの名作がみんな集められてゐる。つい此のあ  
ひだ私が見た、エロネゼの一作は私に私達がリミニでサン・ジュウリアノの教會堂へ拜詣した  
事を思い出させた。あの夕方は私達はすっかり氣落さしきつてゐましたね。教會堂を出てから、河  
の岸添ひにぶら／＼と村の方へ、遠くに鬱蒼とした森へ向つて歩いて行きましたつけ。憶えておい  
ですか？ あれが私達が顔を見合つた——語り合つた、最後の時でした。あれが、最終で！ 兎  
もかくも、もしも貴女、突然、ギニ・オラからベニスへ現はれたならば？」

「そりや、貴方」とイツポリタが云つた。「始終、手のこんだ、防ぎきれないやうな誘惑をされ通し  
だつたのですよ。私がどんな目に遭つてゐたか、とても御想像がつかますまい。どうかしてみんな

に不審を起させずに、こつそり脱け出す方法はと、それを考へて夜も眠られませんでした。たうとう、奇蹟を仕了せましたの。どうしてしたか知りません。九月の朝早く、グランド・カナルのゴンドラの中で、貴方と二人きりの身分を見出した時、私はそれが眞とは思はれませんでした。憶えていらしゃいますか。私がわつと泣き出して、たつた一言も口が利けなかつたのを『さうでしたね、でも私は貴女を期待してゐた。私は貴女が、どんな犠牲を拂つても、来るに相異ないと思つてゐたよ』  
『あれが無分別の皮切りでした。』

『その通りだ』  
『でも、構はないわよ！』それが、よかつたんぢやないの？ 私の身をすつかり貴方のものにして

予そのが、よかつたんぢやないの？ 私はちつとも後悔しないわ。』  
『ジョルジオは彼女にキツスした。そして彼等は此の挿話を語り續けた』それは、畏らく彼等が回想し得る、最も忘れられぬ、最も芳美なもの、一つであらう。彼等は旅館ダニエエリで、また、二日暮らした。それは夜も日も忘れ果てた、最絶頂の歡樂の三日で、兩人は全く浮世の事を忘れて了ひ、互の外は何物をも忘れて了つたやうだつた。  
これらの日は、イツボリタに對しては、夙く既に結末の發端であつた。次ぎの手紙は彼女の最初

の困厄を物語つてゐる。『私は自分が貴方の苦惱と家庭のこたへたの第一の原因だと思ふとき、云ふに云はれない悔恨に襲はれます。どうか私の貴方に對する、壓倒するやうな情熱を察して、私の爲した事を赦して下さい。貴方はそれを理解して、それを知つて下さいませうか？ 私の戀が貴方の困厄の全部を償してゐると、さう思つて下さいませうか？ 心のどん底から、眞實にさう思つて下さいませうか？』彼の熱心は一頁から一頁と高まつて行つた。それから、永い沈黙の間が来る、四月から五月へかけて。いよいよの大破綻になつたのは、其間の事だ。イツボリタの、開放的な、頑強な反抗を征服すべく、あまりに力弱い彼女の良人は、其の仕事が減茶苦茶にして置いて、逃げ出した。そのために彼の財産の大部分はなくなされて了つた。最初イツボリタは、彼女の母と、後には一人の妹と、カロンノの田舎家に家庭を作つたが、其處で彼女は、子供の時分に憐まされたといふ恐ろしい病氣——一種の癩癩に復た罹つた。八月の目附のある手紙には、『貴方は私の襲はれてゐる恐ろしさを考へられません。私の苦しみの根本には、あの意地悪く、鮮明な幻影な精神的幻視が横はつてゐる。私には貴方が手足を踏いてるのが見えます。貴方の顔面が歪んで、蒼鬱めて行くのを見えます、泣き腫らした臉下の、絶望した貴方の目も、私は始終、貴方の傍に居るかのやうに、貴方の苦惱の畏ろしさを、みんな知つてゐる——そして、どんなにしても、この幽霊のやうな幻視

から脱却する事が出来ないのです。そして私には、貴方の呼ぶのが、貴方の聲が実際に耳に聴える——あの、救助を求めて、而も救けられる望みのない人の、かすれくすれの、悲しげな聲が。」そして三日の後には、「あゝ、憐れな、憐れな、戀よ！ 私はいつその事永い間存在の意識を全く失つて、その後かうした痛苦を全く忘れ去つて蘇る事が出来たなら。小くとも、何か鋭い肉體の苦痛が——切るのでも、刺すのでも、ひどい火傷でも——何でもいゝから、私の注意を此の靈魂の苦しみから奪つてくれたなら。あゝ、まさまざと！ 貴方の青白い手の痙攣してゐるのが見える——指の間に、かきむしられた髪の毛が少しが。」

更にまた、「貴方の御手紙には——貴方と一緒にゐるときに、此の病氣に襲はれたとしたら？」とでも——とても——私にはもう、二度とお目にはかゝれませんまい。——こんな事をかいた貴女は氣でも狂つてゐたのか？ 貴女は、一分間でも、自分が何を云つてゐるのか考へた事があるのか？ あれはまるで、私の生命を奪つて了ふやうな——私が生きてゐられないやうなものだつた。すぐに、もう一ぺん、様子をきかせて下さい。貴方がよくなるといふ事を、絶望的でないといふ事を、——私は違ひないといふ事を、きかせて下さい。貴女はせひとも回復なさい。いゝかえ、イツボリタさん、せひともだよ」更にまた、「昨晩は、月がかくれて居た。私達、一人の友人と私とは、海岸へ出て行

つた。——何といふ、心細い夜だらう——と私が云ふと、——うむ、いゝ夜といふのぢやない——と友達が答へた。さうして彼は、佇立んでゐた。犬が、遠方で吠えた。友達の言葉が私に與へた、あの不氣味な印象を、どう云つたらいゝだらう？ いゝ夜といふのぢやない！——遠くの方では何事が起つたか？ そして貴方は、どうしたらうか？ どんな不伴が、此の夜の中に用意されたらうか？ 東が白らむまで私は、夜鳥の歌ふのを聞いていました。平生は、そんなに心に留めた事はなかつたのに、昨夜はそれが一聲一聲胸を擇るやうに徹へた。」

「貴女の絶望は、取越苦勞です。昨日私は殆んど終日家に閉ぢ籠つて、貴女の場合にあてはまるやうな事を發見するために、神経病に関する論文を一つ讀んでゐました。貴女は、たしかによくありません。もう發作の来るやうな事はなく、回癒期を無事に經過して、すつかり本復するでせう。ですから、御安心なさい。貴女は私が夜どほし貴女の事を考へつゞけてゐたのがわかりましたか？ それは物悲しい、陰鬱な夜で、低く讚美歌をうたふ聲がきこえた。巡禮の一群が、聲を描へて、長い單調な讚美歌を唱ひながら、大通りを通つて行きました。」

彼女の快癒期の頃には、手紙は、優しく、いとしげになつてゐる。「私は砂の中で摘んだ一つの花を送ります——それは一種の、奇異な野生の百合で、非常に強い香氣を有つてゐるので、よく、昆



蟲などが毒の底に、蜜に酔ひ潰れ死んでゐるのを見かけます。海邊は一帶にかうした熱烈の息を吐く百合の花で蔽はれて、焼くやうな太陽の下、熱砂の上に、これらの花はまたたく間に開いては、數時間しか保たない。萎れてさへも、御覽なさい、何といふスピリチュアルな——何といふ美しい——何といふ女らしい花なんでせう？」

更に亦「今朝目が醒めたとき、私は陽に焼けた自分の身體を見ました。胸一杯に、とりわけ、貴女の頭をあかも度々のせた肩から皮が剥けて居るのです。私は指尖で、その皮をすりむきながら、考へました——この死んだ皮に貴女の頬や、貴女の痕があるんだと。私は自分の皮を、蛇のやうに脱ぎました、此の皮がどんなに多くの悦樂を感じた事でせう！」更に又「私は寢床の上から、ペンを執るのです。熱はなくなりましたけれども、左の目の上に激烈な神経痛が残つてゐます。私は未だ一向に精がない。此の三日間何にも喰へなかつたから。寢床の裡に埋もれて、痛む頭を擁へて、私は種々雑多の事を考へなければならぬ。時々、何の理由もなく、突然と疑惑が襲つて来る。そして、その悪い考をふり棄てるのが、容易の事ではないのです。昨日も終日、貴女を考へていました。私の一番上の姉のクリステイナが傍にゐて、世にもやさしく、私の額を押し拭つてくれました。目を閉ちて私は、それを貴女の手のやうに想像して見ました。私は、何とも云へぬ慰藉を感じて、心の

中で貴女の名を囁やきました。そして感謝の微笑をふくんで姉を見ました。彼女のやさしさと貴女の優しさを、ああして二瞬間、想像の裡に混同して感じたのが、淨らかな、純な、超感覺的なものやうに思はれました。私は此の感情の溫柔さと、崇高さとを言葉に表はす事が出来ません。けれども、貴女は理解してくれませぬ。左様なら。」

手紙は十一月の初旬まで、規則正しく、順々に續いた、けれども次第々にそれが酷になり、苦あるやうになつて——疑惑と猜疑と非難とに充ちて來た。「貴女は何といふ遠い處へ行つて了つたのでせう——そして私を傷けるのは、たゞに肉體上の別離の苦痛ばかりではない、私は貴女の靈魂も又私から離れて了つたやうに——私を棄てて了つたやうに、感ずる。貴女の目、貴女の聲が他の人を悦ばせてゐる。書いて下さい、貴女が今でも言葉に於ても、考へに於ても、行爲に於ても私のものであるといふ事と、貴女が私に憧れてゐるといふ事と、私と別れてゐては貴女に一分間もたのしい生活のないといふ事の證據になるものを。私は考へて——考へて——あらゆる考へが堪えられない苦痛だ。息をするといふだけの事が私には殆んど堪えられないほど疲れることで、自分の心臓の鼓動が、永久に聞くべく宣告された金鐘の音のやうに私を苛立たせる。これが戀なのでせうか！とんだ事——それはたゞ私だけが患ふ、恐ろしい病氣で——私のたつた一つのまろこびで、同時に惱みで」

「私より他には未だ如何なる人も経験した事のない(さう考へるのがうれしい)感覚なのです。」更に又、「私は衷心の平和と、衷心の安全とを、畢に感ずる事がありますまい。たつた一つの條件がありさへすれば、私は満足し得るのです。私が貴女の存在と實在とを全く吸ひこんで、貴女と一體になる事が出来たなら、私が貴女の生活を生き、貴女を思想を思ふ事が出来たなら。少くとも私は願ふすべての私から出たのでない印象を、貴女の心が受け容れないといふ事を。私は憐れな病人です。私の過す日は長い、一つの苦痛に他ならない。時々私は、今もそれを選び、求めてゐるやうに、終結に憧れたのです。太陽がまさに沈まうとしてゐる。さまざまの恐怖を以て、夜が私の上に下りて来る。室の片隅の方から、陰影が私の方へ忍び寄る。——殆んど、生物のやうな歩みを呼吸で。殆んど敵意を抱いたものゝやうな態度で——私の卓の上には、薔薇の花がたくさんある。それは、近く、その花が遠い、遠いむかしの、比翼塚から、生え出たものででもあるやうな心地がします。」更に又「昨日の午前、正午ごろ、私は死の考へに没頭してゐました。憐れた伯父デメトリオの精霊は、此の數日私の身邊に迷つてゐました。そして私の心の状態は全くやりきれなくなつて、突然、死の自由といふ觀念がまざまざと目前に現はれる。危機は過ぎ去つた、今日は多少微笑を以てそれに對する事が出来ます。が、ともかくも、私は死といふものと、可なり激しい一合戦をやつたのです。」

十一月の始めにジオルジオは又ロオマでトツポリタの返るのを待つて居た。其頃からの目附けの手紙は、ある痛ましい、面白くない挿話を物語つてゐる。——私は貴方に操を立てやうとして、ひどいくるしみをしなければなりませんでしたと書いて來ましたね。あれは何の事ですか？貴女をそんなにまで、顛倒させた、恐ろしい出来事といふのは何ですか？あゝ——貴女は、まったく變りましたね——私は云ふに云はれぬほど苦しみ、そして私の自尊心はその苦しみを反撥する、私の額には深い傷痕のやうな皺が刻まれ、其所に私のあらゆる抑壓された憤怒と苦酸な疑念とが集中して、固まつてゐる。貴女の接吻でも、それを拭ひさる事が出来ようとは、思はれない。貴女の手紙から吐き出される熱烈な惱みは、私を煩はし、惱ますばかり。私はさつとも有難いとは思はれません。此の二三日の間、私は心の中に貴女に逆らうものを有つてゐた——それが何だかは、判然しないが、それはある豫感ではないかしら？ある前置きではないか？」

ジオルジオにとつては、これらの手紙を読みつゞけて行くのは、古創を開かせられるやうであつた。イツポリタは、此上讀んで行くのを止めさせやうとした。彼女はあの晩の事を思はずにはゐられなかつた——あの晩、良人が思ひがけなく、カロンノの彼女の家へ來たのを。冷靜な言葉で、

と云へ、狂亂したものの目付で、彼女を伴れて来たと云つたのを。彼女は又、彼等が二人つきり  
で、かけ離れた室に相對してたときの事を思ひ出した。窓のカーテンが風に吹かれて、燈影がゆら  
めいて、樹立の騒ぎが下から聞えて来た。彼女は其時の激しい、無言の争闘を思ひ出した。彼は、  
いきなり跳びかゝつて、思つても耐らない——無理やり、自分のものにしてかかつたのだつた。  
『もう澤山よ、ジオルジオさん！』と彼女はジオルジオの頭を引きよせつゝ云つた。『もう止  
ませうよ。』

けれども彼は讀みつゞけたかつた、「私にはどうしても臍に落ちない。その人の再現が臍に落ちな  
い。そして私は、一部分は貴女に對して向けられる、憤怒を抑へる事が出来ない。それに對する私  
の考へは書きまします、貴女を苦しめないために。私の柔和な感情は、暫時の間、毒を飲まされて  
みるやうな感じがする。貴女は二度と、私に逢はない方がいゝでせう。貴女が無益な苦しみを避け  
ようと思ふなら、今お歸りなさらなさい。私はいま、全く無益です。私の靈魂は貴女を愛し、  
貴女にすべてを捧げてゐるが、私の考へは貴女を傷つけ、貴女を侮辱する。そしてそれは絶え間な  
く生じて来て、盡きるときのない矛盾なのです！』其次の手紙には「苦惱です、怖ろしい、耐えま  
れない、經驗した事のない。それは苦惱です！あゝ、イツポリタさん、歸つて下さい！私は貴女に

會はなければ、貴女と語らなければ、貴女を抱かなければならぬ。私は以前よりも、上層貴女を  
愛します。けれども、貴女の穢れた顔を見せないやうにして下さい。私はそれを考へると、慄然と  
して、憤らずにはゐられない。あの手が貴女の身體に残した痕跡を見ると、胸も張り裂ける思ひ  
です……怖ろしい、怖ろしい！

『もう澤山ですよ、ジオルジオさん！此の上讀むんちやありません』とイツポリタは縋んで戀人  
の頭を兩方の手で挟みつけ、目にキッスした。『お止なさいよ、お願いだから！』

たうとう彼女は彼を卓子からひき離して了つた。彼は、病人がもう療治は手後れになつて、無  
駄だとは承知してゐながら、他人ののぞみに従ふときのやうな一種不可思議の微笑を浮べた。

## 七

復活祭前の金曜日の夕方、彼等は再びロオマへ向つて出立した。

出發に先つて、五時頃に、彼等は茶を喫んだ。兩人とも、黙り返つてゐた。いよいよ終になつたの  
で、此の片田舎の小さな旅館で送つた。單純な生活は限りなく美しい好ましいものに思はれ、此の質

素な室の魅力は以前にもいや増すかと思はれた——彼等の戀と生活の斷片が又一つ裂きとられて、永却の深淵に擲げこまれて了つたのである。

「たうとう、これも済みましたね。」と最後にジオルジョが云つた。

「私はどうすることせう？」とイツポリタが云つた。「貴女の胸の上より他に、眠むられるところは何處にもないと思はれますの」

兩人は互に目と目を見合せて、互に息をつまらせて、物を云はせないやうな感情を傳へ合つた。兩人は黙つて坐つたまゝ、下の道路にゐる石工共の、几帳面な金槌の音を聽いてゐた。けれどもその單調な物音はいよいよ彼等の惱ましさを募らせるばかりで、たらとう、ジオルジョは、聽いてゐられなくなつて席から起つた。

「あいつは、我慢がしきれない」と云ひながら。

單調な叩く音の時間の飛びさるのを猛烈に感じさせて、よく、柱時計のかちかちいふのを聞くと彼を襲つて来るやうな、恐怖と心配の感覺をまた起さした。しかも、此の幾日かの間は、その同じ物音がどんなに彼を漠としたよろこびの感<sup>かん</sup>じて宥めたらう。「二三時間の中に」と彼はひとり考へた「ふたりは別れて了ふのだ。自分はこの舊の、取るに足らぬ懊惱の生活へ歸つて行く。すると自分

の古い煩ひが有無を云はさず復た掴みかかるのだ。のみならず自分は、其の源泉が毎も何物を私に齎らして来るかを知つてゐる。私は間斷なく悩むのだ、そして自分は、自分の最も慘たらしい苦惱の一つはエクジイリが何時ぞや自分の頭の中へ押しこめて行つた、あの考へであらうといふ、強い豫感をもつてゐる。もしイツポリタに自分を救はうといふ心があつたにしても、彼女に出來ようか？ 多分は、やつと一部分であらう。何故彼女は私と一緒に、何處か世離れた、寂しい場處へ來て一緒に滞在してゐないのか、——一週間でなく、永い日數を——かうして、水入らずにしてゐると、彼女は實に崇むるに耐えたもので、思慮と先見と愛嬌とに充ちみちてゐる。幾度となく彼女、戀人といふよりは妹のやうに——端巖微妙な——夢の女と思はれた。彼女が離れず<sup>に</sup>ゐて看護してくれたなら、多分私を救つてくれるかも、少くとも自分の生活をもつと明るくしてくれるかも知れないし彼はイツポリタの前に立つて、その兩手を手にとつて。「貴女は、此の幾日の間、非常にたのしく、ましたか——え？」

「これまでになかつたほど、たのしう御座いましたわ。」

その聲音の偽りなさに動かされて、ジオルジョはいよくかたく、手を締めた。「貴女はまた、平生の通りにして、日を送つて行けますか？」

「わかりませすわ」と彼女が答へた、「一分間以上の事なら、私にはもう何ののぞみもないのは、分つてゐらつしやいませう。」と云い足して、目を落とす。  
ジオルジョは彼女を熱烈に抱きしめた、「貴女は私を愛して、愛してくれますか——私ひとりをも命のぞみにして——未來も他人には目もくれずに？」

急に微笑が目に閃めいて、俯向いてゐた睫毛を上げて、「御存知のくせに」と彼女が答へた。  
「私の苦惱が分つて居りますね。」と彼は低聲で云つて、彼女の顔を胸に壓しつけた。

彼女は明らかに戀人の思ひを判断した、そして、その密語を、二人が呼吸し、鼓動してゐる一圓の周の場處の外へは少しも洩らすまいとするやうな、囁やき聲で、

「どうしたら、貴女を救ふことが出来ませう？」  
答へをする代りに、彼は彼女をひしと抱きしめた。兩人とも黙つてゐたが、其の沈黙の裡に互の

心は同一の事を考へ、料るのに使用はれてゐた。  
「どうですね」と、ジオルジョがたうとう、沈黙を破つた。「何處か人の知らない處へ出かけて行つて、春の間中——夏一杯も——出来るだけ永く……逗留してみませうか。さうしてたら貴女が救つてくれませう。」

「一分間も躊躇せず、彼女が答へた、「連れて行つて——貴方の戀人を。」  
慰さめられ、勵まされて、彼は彼女の抱擁の手を解いた。彼等はいよいよ出發の用意にかゝつた

イツポリタは花瓶から花をみんな、とり集めた、もう、大抵のは萎れて了つてゐたけれども——チ

エザリイニの山莊の莖、バルコ・キイチのアネモネ、シクラメン、雁來紅、カステル・ゴンドルフオの

野薔薇の花、「ディアナの湯殿」からの返りに手折つて來た、巴旦杏の一枝。これらの花は、如何なる

牧歌を物語つたであらうぞ！ああ、あの公園の險はしい徑を駆けくらべしたことよ、踝まで浸る

朽葉を踏んで！イツポリタは絹の靴下の目の間から薔艸に刺されて、駆けながら笑つたり、叫んだりしたので、ジオルジョは杖で草木を薙ぎ伏し乍ら彼女が無事に通れるやうに先に立つて進んで

行つた。驚くべき眞蒼な薔艸の茂みが、「ディアナの湯殿」に毛氈を敷いて、その不思議なる巖窟では

間遠に水の滴るのが反響の作用で音楽のやうに聞えた。そして彼女は其の濕つばい、暗い窟の内から

彼方の野を眺めた。それは湖の淡藍色を前に、すつかり巴旦杏と桃の花とに蔽はれて、銀と薔薇の

一團のやうだつた！花毎に追憶がある。  
「御覽なさいな」と彼女が、小さな板紙を取りあげながら云つた。「セニエ・パリアノ行きぬ切符です——納めて置ませう。」

パンクラツイオが戸を叩いた。勘定書の受取を持つて来たのであつた。御祝儀の功力で、彼はお世辭と御禮を無やみにふり撒いてゐたが、たうとうポケットから名刺を一枚ひき出して、「どうぞ御知り置きを」と願ふと云つて、差出した。彼が出て行つてから、見かけだけの、新婚の夫婦は、吹き出した。名刺の上には、墨痕淋漓として、パンクラツイオベトレルラ。……

「これも、一緒にとつて置ませう」とイツボリタが云つた。

「パンクラツイオが復た叩いた。此度は彼は大きな橙を四つ五つ、お客様へ御土産に持つて来た。彼の目は、喜ばしげな、赤ら顔に、晴れやかに輝やいてゐた。

出かける時が来た。階段を下りて行き乍ら、戀人達は悲しみの雲が、恐怖の雲まへが身を包んで此の平和な隠れ家を去つたなら、何か目に見えぬ凶變が待ち受てゝもゐるやうに感じられた。年老つた宿の主人は戸口まで見送つた。

「今晚の御馳走には、素敵な雲雀を差上げやうと存じて居りましたのに。」と彼は残り惜しさうに去つた。「近いうちまた來ますよ——近いに。」と答へたとき、ジオルジオの唇は、震へた。

彼等が停車場へ行つたとき、霧の中に朦朧と見える赤い夕陽が、海の、水平線の最端に沈んだ。ケツキイオで、雨がふり出した。そして兩人が別れたロオマの都市は、その霧深くじめじめとした、

## 父親の家

## 父 藤 の 家

四月の終頃にイッポリタは姉に呼ばれて、ミラノに行つた。姑が死んだのだつた。ジオルジオも同時に「人の知らない田舎」を捜しに出かけやうと計畫した、そして五月の中旬に再び落合ふ事にした。けれども、丁度彼が出かける支度をしてゐた處へ、ジオルジオは母親から、殆んど絶望的な情れな手紙を受取つたので、直さま、その父親の家へ行かなければならなかつた。その實際の紛転が彼を呼ぶ處へ、どうしても歸つて行かなければならないといふ事實を理解するや否や、最初の本能的な親子の情愛が次第に一種の、苛立たしい感じは覆されて行くやうな心もちになつて、その心もちは來るべき衝突の必然的な場面がいよいよ鮮やかに、いよいよ夥しい、心の目前へ見えてくるに従つて、ますます激くなり、頷な自我中心の聲は心の奥からますます執拗に聞えて來た。それは遂に彼の全心を支配して、出發に伴ふ實際上の不愉快や、イッポリタから身を離すことの苦痛などが、どうしても殺ぎへらす事が出來なかつた。

二人の別れは従前よりも、もつと酷らしく思はれた。ジョルジオはそのとき、神経が鋭く緊張して来て、それが、幸福の理想を平和の希望とを塞ぎ止めて了ふかと思はれた。イツボリタが最後の別れを告げたとき、彼はたづねた。「私達はまた逢へるでせうか？」

彼女が戸口を出かゝつて、彼が最後のキッスをその唇に與へたときに、彼はそのキッスの上へ彼女が黒い、小さな面帕を曳すつたのを氣付いた。ほんの些細な事ながら彼には、きびしい心痛を惹き起させて、彼の考へてゐる不吉の兆とびつたり、該當つたのだつた。

グアルデアグレエの父親の家へたうとう着いたとき、彼は全く弱り果て、了つて、母親の肩へつかまりながら、子供のやうに泣くのであつた。けれども、さうした涙も母のやさしい懷抱も彼の心を軽くする事が出来なかつた。彼は自分が、子供の頃をすごした家に於て、一個のあかの他人であり、一家族のものに對しては仲間外れであるやうに感じられた。友人達の眞中で彼を襲つて来た不思議な孤獨の感情が、いまや、以前よりも強く、頻りに起つて来る。いろ／＼の小さな日々の生活に對する事どもが、彼の肝癢にさはつた。食事の間に話が一寸、杜絶えて、ナイフとフォークの、かち、やかちと云ふ音しか聞えない時などは、彼は殆んど耐へきれないほど氣が苛立つ。一分間として、彼の習慣になつてゐる氣むづかしい性癖が破壊されて、痛々しい震慄を與へないといふこと

とはない。家の内に充ち満されてゐる不和の——もう少しで露はれない争闘ともなりさうな敵意の空氣は眞實に彼を息窒らせた。

彼が着いた其晩に、母親は彼を傍へ呼び寄せて、自分の心勞や屈從のそしてまた良人のいろ／＼の薄情邪堅の、永物語をして聞かせた。

「お前のお父さんは、悪人だ！」と母親は叫んだ、その聲は余りに顫へて、目には涙が充ちてゐた。母親の臉は眞赤に泣き腫らされ、兩頬はげつそり削げて、その姿は明らかに永い間苦しい目に遭つてゐたのを表はしてゐた。

「悪人だ！悪人だ！」

其後で、自分の室へ歸つて行つたとき、ジョルジオの耳にはにその聲の響きが残つてゐた。そして母親の様子が目に見え、其の血が自分の脈管の中を流れてゐる人に向つて加へられた汚辱と非難とをが聞えた。彼はもう一步も前へ足が擡べないかのやうに、心臟が破裂して了ふかのやうに感じた。けれども突然、別れて来た戀人に對する熱烈な憶れが襲つて来て、彼の思想を新らしい河床へ導き彼の心に、こんな可厭な思ひを起させた母親に對する一種の憤恨的な感情を起させた。彼はまつたく、そんな事には無關心でゐたかつた。我身を一寸ちに戀に捧げて、戀に關係のない苦しみは



知りたくなかつた。

彼は自分の室へ這入つて、扉を締めた。五月の月は露臺を一杯に照らしてゐる。夜の空氣が戀しくなつて、彼は窓を開け、欄干に凭りかゝつて、爽やかな夜氣を、深く／＼吸ひこんだ。限りない静けさが谷間一面を覆つて、雪未だ白きヲ、マオエララの峰は、その莊嚴單純な輪廓のおこそかさで空際に聳立つてゐる。ダアルディアグレエルの町は、眞に羊の一群のやうに、サンタ・マリア・マツチオレの大鐘堂を取り繞りて眠つてゐる。たつた一條の、黄色い光が、つい近くの人家の窓から射してゐた。

彼は先刻までの悲愁を忘れた。かうした夜の美しさに對して居ると、彼の考へはたつた一つの事に集中された。あゝ、かゝる夜は、戀のために費さるべき夜である。彼の心は、鐘の音が幽かに、ぢやらく／＼と鳴つた。目を轉じて、明るい窓の方を見ると、室の内に働いてゐる人達らしい幾つかの影が、明るい四角の中を横ぎつた。彼はまた、耳を傾けた、微かに扉を叩く音を聞いたやうに思はれたので。彼は、それを確めるために、行つて、扉を開いた。

伯母のジョコンダであつた。「忘れて了つたのかえ？」と彼を抱き乍ら、彼女がきいた。

彼が到着した晩に、伯母を見かけなかつたので、眞實彼は、彼女の事を忘れて了つてゐたのだつた。彼は詫びを云つて、伯母の手をとつて椅子にかけさせて、やさしげに話しかけた。

彼女は、父の一ばん上の姉で、六十歳に近かつた。跌倒で跛になつて、いくらか肥つた方だとは云へ、不快な肥り方で、弛んで色澤も悪かつた。恐ろしい信心狂ひで、彼女は家族のもの達から遠ざかつて、屋根裏にひとり住んでゐた。嫌はれて、閑却されて、半痴呆扱ひにされて、彼女の世界は、聖畫や、聖物や、標號や、表象で、出来上つてゐた。彼女の唯一の仕事は、同じ文句の祈禱を飽きもせず繰返す行動と、食ひしん棒のために加へられる殘酷な苦しみを堪えて行く事とであつた。何故ならば、彼女は甘い物が大好きで、他の食物などは見返りもせず、しかも往々にしてそれが手に入らない事があつた。それだから、ジョルジオは彼女にとつて大の氣に入りであつた。何故ならば、彼は毎朝歸省つて来る度毎に、彼女に砂糖菓をどつさり持つて来てくれない事はなかつたので。

「さうだ」と彼女は、惨めな、齒のない眼を洩らして云つた。「さうだ、歸つて来ておくれだね！歸つて来て、ね？」

彼女は恐づ／＼と彼を見た、他に何とも云ひ様を知らなげで。けれどもその目の中には明らか

期待が耀やいてゐた。ジオルジオは自分の心が痛ましいほど不憫になるのを感じた。人眼の衰退の最後の極に達した、此の憐れな生き物は、——此の惨な、甘い物好きの信心狂ひの婆さんは、如何する事も出来ない血縁で自分と繋がつてゐる——自分は彼女と同じ眼族に属するのだ、と彼は考へた。

「さうだね」と彼女にいかにも、氣づかはずに繰り返した。そしてその表情は殆んど厚かましく變つて来た。

「あゝ、伯母さん、御氣の毒でした」と彼は、やつとの思ひで答へた。「こんどは、甘い物を買つて来るのを、すつかり忘れて了つて」

御隠居の顔は、みる／＼、病氣にでも、なりかすつたやうに變つて了つた、眼の光は消えた、「なあに——いゝんだよ」と彼女は、きれ／＼に云つた。

「明日は取寄せてあげます」とジオルジオは急いで、宥めた。「わけのない事ですから——手紙を出しませう。」

伯母さんは、息を吹返した。「オルツラの修道院にあるんだけど、ねえ」と早口にて云つた。そして、一寸言葉が杜絶したが、其の間彼女は確かに、明白にたのしみの味を嘗めてゐたやうだ

つた、何故ならば、其の咽喉の中にぐうぐういふ微かな音が聞えたから、齒のぬけた口はたのしみで唾液を出してゐたに相異なる。

「ジオルジオさんや！ お前さんがゐてくれなかつたら、如何しよう！ 此の家の内の有様は、どうだい？！ これは、神様の御審判といふものだ。露臺へ行つて、鉢植の花でも御覧よ。私が——私が毎

も水をやつてゐる。そして毎もお前さんの事を考へてゐるのも、私だ。以前にはいつでもデメトリオの事だつたが、今ぢや、お前さんの事ばかりだよ。」

彼女は起さ上つて、甥の手をとつて、露臺へつれていつて、花を見せた。そして腰を屈めて、鉢の中の泥が乾いてゐるか、どうか觸つて見た。

「一寸、御待ちよ」と彼女が云つた。「何處へいらつしやるんです、伯母さんは？」

「お待ちよ」と彼女は跛を引いて行つた。そして間もなく、やつと持てるくらゐの水甕を持つて、返つて来た。

「でも伯母さん、どうしてそんな、大へんな事をなさるんですか？」「鉢に水をやらなけりや。私が氣をつけてやらなけりや、誰が構ひ手があるものかつて！」彼女は

鉢に水をやつた。年寄の胸から囁れた響をたて、出て来る、激しい呼吸は、若い者の耳には痛ましかつた。

「もう、たくさんぢないんですか？」と云つて、彼は、たうとう、水甕を手からとりあげた。

二人は露臺の上に立つてゐた。植木鉢から水が、ぼたり、ぼたりと、下の街上へ滴り落ちた。

「あつ、窓に燈のついてゐるのは、何處の家ですか？」とジオルジオが、沈黙を破つて、きいた。

「あれかえ」と伯母が答へた。「ありや、ドン、デフエンデンテ、スチオリの家さ。彼れは、死にかつてゐる。」そして、兩人は、黄色く、明るい四角形の中に動いてゐる人影を見守つてゐた。お婆さんは、夜気に震へ始めた。

「さあ、伯母さん、お寝みにしませう。」と云つて彼は、彼女を天井裏の居室へ送つて行つた。廊下の途中で彼等は、何物かと鋪瓦の床の上に遅々として匍つてゐるのに遭遇した。それは、龜であつた。

「あれは、お前さんと同年だよ——廿五だ」と彼女は、立止まつて、さう云つた。「あれは、私と同じ、跛なのだ——お前のお父さんに蹴られてね」

それは彼に、伯母ジオヴァナと、羽抜きにされた斑鳩の話を、アルバにゐたときのある場合を

思ひ出させた。

伯母の室の扉が開かれて、汚陋な室内中の、胸の悪くなるやうな、臭が流れ出した。一臺のラムプの弱々しい燈光が、聖母像と十字架とに蔽はれた壁や、裂けた衝立や、彈機や填充物の露はれてゐる一脚の椅子などを照らして示せた。

「お道入りでないかえ」

「はい、私は——お寝みなさいまし」

彼女は急いで這入つて、紙に捻つたものをもつて戸口へ引返した、そしてその中から少しばかりの砂糖を自分の掌に零した。

「御覽な、これだけつきや、残つてないんだよ！」

「明日です、明日。さあ、お休みなさい、左様なら。」

露臺へ返つて来ると、満月が中空に懸つてゐた。寂然として、氷へたやうなラ・マイエル山は、望遠鏡で窺つてみた月世界の山のやうだつた。グアルディアグレエの町は、其の麓に眠つてゐた。「イツポリタさん！—イツポリタさん！」

彼の心霊は、その苦悶の最絶頂に達した瞬間に、全く戀人の方へ走せ去つて、彼女の救いを呼ん

だ。

「イツボリクさん！」

突然、燈火のついた窓から悲鳴の聲が、夜の沈黙を裂いた——女の泣く聲である。幾つもの聲が泣き出して、それが、長く引つばつた咽び泣きの聲に變つて、リズムミカルな調子で、抑揚波瀾した臨終の苦痛は過ぎた、一個の靈魂は寂靜な、無情な夜に消え入つた。

## 二

「お前は手助けしてくれなければ、ならない」と母親が云つた。「お前がお父さんにお話しをしてよく聞いていたといっておくれ。お前は、長男だから。他にはもう、仕様がななんだよ」さう云つて

母親は良人の道ならぬ事を一々語りかかせた、その子に向つて、その父の恥辱を曝露しながら、それは斯うであつた。父親が以前に家の下女をしてゐた、下劣な、貪慾な女と一緒にゐて、その女と野合で出来たその子供らとのために身代を濫費して、他の者の云ふ事は一切顧みず、家業は放棄らかしで、金を造へるために收獲物は、購ひに來さへすれば誰にでも、價段に關はず沽り飛ばし

て了ふ。それがひどくなつて來て、此の家では、時々、其日のくらしにさへも差支へる事があつた。そして彼はジオルジオの妹に、永い間婚約の出来てゐるのに、其仕度金を出してやらうともしない家の者がその事を云ひ出せば、頭から怒鳴りつけて了ふ。時々は亂暴をさへもはたらくといふのであつた。

「お前は遠方にくらしてゐるから——私達の住んでゐる地獄はまるで分りますまい。お前には、私達が苦しんでゐることの、十分百分の一の想像も付きませぬ……でも、お前は長男なんだから——お前が話をしてくれなければ——左様だらう、ジオルジオ——いゝかえ、お前が話しておくれ」

ジオルジオは下を見つめて、こんなに荒々しく目の前にむきつけた生傷のために、自分の神経が凄まじく激發して來るのを、出来得るだけ抑制するために、無言で、全力を集中させてゐた。これが自分の、母親なのであらうか？ あんな粗野な言葉を云ふ度に、あんなに毒々しい線を見せる痙攣的に引釣た唇は、あれが母親の口なのだらうか？

悲しみと怒りとが、こんなに恐ろしい變化を來させたのだらうか？ 彼は母親の顔をうち見守つて、その顔に往日の優しさの痕跡を捜さうとした。過ぎし日の母親は、どんなに床しく、どんなに優しくあつたらう。むかし、ある時代には、何といふおとなしやかなしとやかな人であつたらう！

少年時代にも青年時代にもいかに彼は真心から母親を好いてゐた事ぞ！ ドンナ、シルズリアは背が高く、優さ形で、蒼く見えるほどの色白さに、眼は眞黒で、その風采に争はれぬ品位のある人だつた。何故ならば彼女はスピイナ家に生れたもので、その紋章はアウリスバ家のそれと共に、サンタ、マリア、マツチオレの前門に刻してある。母親の粗暴なふる舞が一々、子の心を剣刺しにした、一々の辛辣な言葉が、彼女を襲つて来る激情と憤怒の嵐が起させる急速な表情の一々の變化が彼の心を剣刺しにした。のみならず、自分の父親が、汚辱と醜行に蔽はれてゐるのを見る事は、自分を生みなしてくれた二人の人の間に、そんな畏ろしい深淵が口を開けてゐるのを知る事は、彼にとつて苦痛な事だつた。

「解つたかえ、ジオルジオ？」と母親が追究して來た。「弱腰ぢや、駄目ですよ。何時話しておくかね？ 決心をおつけよ。」

彼は聞いてゐた、けれども震慄するやうな畏ろしさが、彼の骨髓を擱んで了つて、彼は心の中に叫んでゐた。「あゝ、お母さん！ 私になんでも——どんな酷い犠牲をでも、要求して下さい。けれども、こればかりは——此の役目だけはかんにんして下さい——どうかこれだけは御免なすつて私は、惨めな、卑怯者なんです！」彼がかうして父親に對立し、斷々乎たる處置に出なければならぬ

といふ事を考へると、心のどん底から抑へきれない嫌惡の情が起つて來る。いつそ彼は腕を一本、切りとられた方が、ましだつた。けれども彼は、息の塞まるやうな聲でかう答へた。「承知致しました。話しませう。そのうちに、いゝ機會があるでせう。」

彼は母親を抱いて、その色褪せた頬にキツスした。宛も、暗黙の間に、その虚言に對する宥恕を乞ふやうに。何故ならば、彼は自分の心の中に、そんな仕事の出來さうにもないといふ事を、知りきつてゐたからだつた。兩人は窓に近く立つてゐたが、母親は窓框を押し開いた。そして互に相並らんで、露臺の欄干に身をよせた。

「やがてドン、デフエンデンス、スチオリの葬式が出るだらう。」と彼女は云つた、それから、空を見上げながら、「なんといふ、いゝお天気だらう！」

グアルディアグレエレの、石造の町は、晴やかな五月の日の光を浴びて、擦々と輝やいてゐた。サンタ、マリア、マツチオレは、麓から頂上まで、一つその小さな棘藤毎に、床しげな常春藤がまつはつて、數知れぬ、薄紫の小さな花がそれに咲き、蒼穹高く聳える此の大伽藍は、眞の花と大理石彫の花との二重の衣に蔽はれてゐるのであつた。

ジルジオは考へた——「自分はもう、あれ限り、イッポリタに逢へないやうな氣がする。これか

らさき五六日すれば、自分はわれ／＼の夢の隠栖を探しに行くのだが、しかし同時に自分は、それが無駄であらうと思ふ。何かの邪魔が入つて、成功しさうにない。此事に就て、自分の本能的の感情ほど、不思議なものはない！ 自分自身が知つてゐるのではないけれど、自分の中にある何物か、すべては終つたと自分に告げるのだ』彼は考へつゞけた、『自分が此處へ来てから、彼女はたつた二度電報をうつたばかりだ、一度はバランツアから、一度はベラチオから。これまで、こんなに遠ざかつてゐた事はない。或は此の刹那にも、誰かゞ彼女の心を占領してゐるのかも知れない。女の中のでは、戀はたつた一打撃で、ぶち倒された了はないとどうして云はれやう。其の内面の世界に於ては、あらゆる事が可能である。彼女の心は、倦んでゐる。自分はアルバノに於てあの胸に最後の愛の鼓動をさせて、そして自分は欺かれて了つたに相違ない。よく見える眼には、或る事實といふものは、其の外貌とは關はりのない、秘密の意義を其中に持つてゐる。で今、アルバノに於ける我々の生活といふものを、仔細に調べてみたならば、あれが結末であつたといふ事の、確かな、争はれぬ結論に到着せずにはゐられない。あの復活祭前の金曜日の夕方、兩人がロオマの停車場で別れて、彼女が霧と夕闇の中へ走せ去つて了つたとき、自分は自分に云つたではないか——自分も、う彼女を失つた、とり返し難く、永久に、と。これがいよ／＼の終だと、つく／＼さう思つた事では

はないか？』彼は最後のキッスをしたときにその上へ黒いゼエルを引すつたイツポリタの身振りを思ひ出した。日の光や、花や、あらゆる周囲の、微笑んでゐるものみは、たゞ彼の此の考を痛切からしめるばかりであつた——彼女なしには、生きて居られぬ！ と。

其刹那、母は欄干の上へ乗り出して、伽藍の入口の方を見ながら云つた、『いよ／＼、出るんだね。』

扉が開いた、柩夫はその役の徽章をつけて出て来る。骨肉のしるしの頭巾で顔を包んだ四人のものが、棺桶を肩に擔いだ。同じやうに頭巾を被つた人々の長い二列が、頭巾の穴越しに目を光らせ乍ら、手に手に火の點いた臘燭を捧げて、随つた。臘燭の焔は爽やかな微風に揺れて、時々、あれが消え、これが消えする。一人々の傍に、裸足の子供がついて、溶けた臘涙が掌に落ちるのを受けてゐる。

葬列が出揃ふや否や、赤い服を着て、白い鳥毛を帽子につけた、一組の樂隊が、埋葬曲を吹奏する。葬列が樂の音に歩調をそろへると、樂器が日の光に閃いた。

『死人に着せられる名譽といふものは、何と云ふ悲惨な、滑稽なものだらう？』とジオルジオは考へた。そして彼は、彼自身が柩の中の、四つの板壁の間に閉ぢこめられて、かうした覆面をつけ

た人々に擁ばれて、燭火と、真鍮の樂器の厭な音色に護送されて行くやうに思はれた。彼の心は嫌悪で一杯になつた。やがて彼の注意はあの、臘淚を手を受けてゐる、汚らしい子供らの上に向けられた。彼等は柩を曲げて揺らめく燭火を心配さうに見守り乍ら、不揃ひな歩調で、くつついて行くのであつた。

「ドン、デフエンデントも、可哀さうな事をした。」と母親は葬列が遠ざかつて行くのを見守り乍ら、嘆いた。それからまた、自分自身にでも云ふやうに、物倦げにつけ加へた。「もつとも、何が可哀さうな事だらう！ 彼の人はずもう落付く所へ落着いたのだ、後に取り残されて、此の上の憂い目を見なければならぬ私達こそ、ほんたうにみじめだわ。」

ジルジオは母親を見た。二人の眼が會つたとき、母親の顔を微笑が影の如くに横ぎつた。けれどもそれは、その悲しげな表情の一つをさへも擾す事が出来なかつた。しかしその子にとつては、それは、急にぱつと明るくなつたやうで、其の光の中に彼ははじめて、憂い、辛さが母親の顔に刻んだ、癒すべからざる蹂躪の痕をつつく／＼見た。

其の微笑の恐ろしい啓示を受けて、彼の意の中には熱い優しさの浪が高まつた。母親は、彼のいとしい母親は、今はもう、かういふ風にしてのみ微笑し得るのだ、其他の微笑はなし得ないのだ！

彼は、氣分の悪いとき、悲觀してゐるときに、いく度とも知れず、いとほしげに彼の上へ差し寄せてくれたその顔の上には、かうした悲痛の痕跡が消す事の出来ないやうに刻まれて了つた。母は、艱難のために摩りへらされて、物の用に立たなくなつて、免れ難い墓場の方へ、一步一步と近づいて行く。ところでたつた今、母親がその憂い、辛さをうち明けたとき、彼はそも／＼どうしたか？ 彼を憫ましたのは、母親の苦勞ではなくて、彼自身の自我心が傷けられたといふ不愉快である。母親の露骨な、うちあげ方によつて、緊張しきつた、彼の神経に加へられた震慄である。

「お母さん！」と云つたとき、彼は涙に咽んで、聲が出なかつた。そして母親の兩腕をとつて、室の内へと引き入れた。

「ジョルジオ、どうおしだい？ お前は、どうしたといふの？」と母親は、彼の顔を傳い落ちる涙に叱驚して、きいた。「ねえ、どうしたといふの？」

あと、あの聲だ！ 彼の胸奥に徹した、あのなつかしい、永久に忘れられない聲は。彼が如何なる心の暗い時にも耳を傾けて、あの慰藉の、宥恕の、助言の、限りなき温情の聲は！ 彼はもう一度、昔の日の、慕はしい、愛しい母親を認めたのである。

「お母さん！ お母さん！」と彼は咽び泣き乍ら、母親を両手に抱いて、煮えるやうな涙を浴びせ

かけ、頬に、目に、額に、氣でも狂つたかと思はれるやうな接吻を一めんにした。

「どうしたら、いゝでせう！」彼は母親に腰かけさせて、その前に跪いて、永い間親を凝視めた、まるで久しい事會はなかつた後で、初めて母親を見たやうに。

母の咽喉にも咽び泣きが起つた、さうして母を痙攣的に震はせ乍ら、かうきいた。

「私の云つた事が、そんなにお氣にさはつたのかえ？」

母親は其子の涙を拭つて、やさしく髪を撫で乍ら、咽び音にとぎれ、とぎれの聲で「いゝえジョルジオや、お前に心配させてはなりません。お前を苦勞させてはなりません。仕合せとお前は此の家から遠く離れてゐたんだもの。苦勞させてはなりません。お前が生れてから今日が日まで、私はいつもお前に、辛い目、悲しい目に遭はせまいと氣をつけて来たものを、此度ばかりは、どうしてまあ、黙つてゐるのを、忘れたんだらう！ 私は、話してはならなかつたのだ、何れもお前には聞かせてはならなかつたのだ。ジョルジオや、堪忍しておくれ。そんなにまでお前をくるしめるつもりはなかつたのだから。さあ、そんなに泣きでない。ね、後生だから。ジョルジオや、そんなに泣かれちゃ、私が困るぢやないか！」

母はもう、耐えかねて涙の堰をきらさうとした。

「泣きません、もう泣きません。」とジョルジオが云つた。彼は頭を母親の膝の上に置き、母親の手にやさしく撫でられて、すぐに心が静まつて来た。時々まだ、咽び泣きが彼をゆすぶつた。少年時代の速い悲しみの、漠然とした回想が、彼の心中を横ぎつた。燕のちい／＼啼く聲や、小刀磨ぎの廻轉する、鋭い響や、街の人聲などの、遠い昔の以前に聞いた、親しい物音が復た聞えて来て、今の彼の心をうつとりさせて。危機は過ぎ去つた、反動的な沈靜が彼を訪れた、其時、イツボリタの面影が再び彼の前に現はれて、もう一度混亂を惹起させたので、彼は深い深い歎息と共に、その頭を母親の膝になげ伏して了つた。

「どうしたの、其の歎息は！」と母親は、身を屈めながら、囁いた。

彼は閉ぢた目をあけずに、微笑んだ。けれども非常な沮喪が彼を支配して了つた、それは取返しの出来ない病勞の感で、望のない、無限の戦ひを止したいと云ふ、絶望的な憧れであつた。生きたいと云ふ欲みは、次第に彼を離れて行つた、丁度死體から熱がだん／＼退くやうに。先刻の感情は跡方もなくなつて、母親はまた、かゝりもなひ人となつて了つた。何を彼は母親のためにする事が出来ませうか？ 親を救ひ——心の平和をとりかへし——失はれたる幸福と健康とを取返してやる事が出来ようか？ たしかに、母親に出来た荒廢の痕は、癒され難いものである——惨害さ



れた母の生命は、恢復する事が出来ない。母親はまた、彼にとつて最早、過ぎし日に於けるが如く避難の港とすることが出来ない。母親は彼を、理解する事も、慰める事も出来ない。親子の心は、餘りに異つてゐる。親子の生活はあまりに隔絶してゐる。母は自分自身の憐れな運命を傷ましく彼に見せつけるより以外には、どうする事も出来ないのだ。

彼は起ち上つて、母親にキツスして、自分の室へ返つて、露台の上へ出た。ラ、マイエルは全山夕陽の薔薇色に染まつて、蒼穹を背にして巨きく突立つてゐる。彼方此方へ翔びちがふ、燕の鋭い啼聲は、彼の耳を聳ひさせた。彼は内へ這入つて、寢床の上へ横になつた。

「自分は、生きて、呼吸してゐるものである。」と彼は、横になり乍ら考へた。「けれども、自分の生命と云ふものは、畢竟何だらう？ 如何なる力にそれは服従してゐるものか！ 如何なる法則の支配を受けてゐるものか？ 自分は自分自身のものではない——自分の唯一終極の目的は、自分自身から脱却する事である。自分は丁度あの始終動揺してゐる地面の上に立たせられて、始終足の下の大が陥没しはしないかと感じてゐる人のやうなものである。自分は不斷に不安な状態に生きてゐる、その恐れてゐるものが何であるかははつきり分らないけれど。それは追及されてゐると思ふ亡命者の恐怖であらうか？ それとも、何時まで経つても目的地へ達する事の出来ない疾走者の不安

であらうか？ 恐らくは、その何れかに屬するものだらう。」

燕の群は、黒い箭が飛ぶやうに、窓を掠めてはとぶ、また翔ぶ。

「何が自分には、缺けてゐるのか？ 何が自分の道徳性の上の缺陷であらうか？ 何が自分の無能の原因であらうか？ 自分は、生きやうといふ、自分の全能力を規則正しく服従せしめようといふ、自分自身を完全な、調和した全人格として感じやうといふ、燃ゆるが如き慾望を持つてゐる。それにも係らず、自分は毎日に死んで行く。毎日に自分の生命の一部分は目に見えぬ無数の間隙を滑つて逃げて行く。自分は丁度、半ば充たされた膀胱のやうなもので、それは内の液體が動く度毎に、種々様々な形をとる。自分の力の全體は僅かに幾粒かの砂を、やつとの事で撒び得るに過ぎない、そしてそれを自分の空想は岩程の大きさに誇大してゐるのだ。自分の持つてゐる總ての思想は自分の心に起る不斷の衝突に依つて荒らされる。自分に缺けてゐるものは、何だらう？ 自分で意識しない、しかもそれが生存上缺くべからざるものである事を自分が本能的に感ずる意識上のある部分を支配してゐるものは誰だらう？ 或は自分のあの部分は既に死んで了つて——死のみがそれを自分に再び得せしめるのであらうか？ さうだ、これがあの深秘に對する、眞實の解釋なのだ——死は全く自分の心を惹きつけてしまふ……」

サンタ・マリア・マツチオレの鐘の音が、夕方の祈禱を告げ渡つた。それが彼の心に、葬式の行列を思ひ出させた——棺桶や、覆面をした昇ぎ人や、ゆらめく臘燭の火を見守り乍ら、臘の涙を手に受けてゐた、襤褸着物の子供らなぞを。

彼はその子供らを忘れる事が出来なかつた。其後、イツポリタへ手紙を書いたとき、彼は常に新しい印象に餓えてゐる彼の心が、その光景から臘ろげに得來つた譬喩を小々ばかり説いてみた——「その中の一人の、憐れな、病みくしい、黄疽にでもかゝつてゐるやうな小つぽつな奴が、一方の腋の下に拐杖をついて、片手に臘涙を受け乍ら、大きな握り拳で臘燭を驚掴みにしてゐる、頭巾を被つた大男の傍へくつついて行つた。私はつひに此の二人を忘れ得ない——今でも目の前にありありと見える。たぶん、あの子供に似たやうな何もものが、私の中にあるのだらう。恐らく自分の生命は、ある深秘な、不可知な存在に支配されてゐて、それが自分の生命を鐵の手で驚掴みしてゐるのであらう。生命の火は燃え盡きやうとしてゐる。そして自分はその後から重たい足を引きずつて行き乍ら、落ちてくる臘涙を受けやうとすると、臘燭のたれは一滴一滴、あはれな自分の手を燬くのである。」と。

### 三

未の娘のカミルラが花園から採つて來た、露深い五月の薔薇の、薔薇の花瓶が卓子の上に置いてあつた。卓子を取り巻いて父、母、弟のデイエゴオ、其日特に招かれたカミルラの婚約者と、娘のクリステイナ夫婦とその子供とが坐つてゐた。その子は亞麻色の髪をした、小さな子で、開きかけた百合の花のやうに青白く、脆げであつた。

ジオルジオは父と母との間に腰かけた。

クリステイナの良人の、バレアウレアの男爵、ドン、バルトロメオ、チエライアは、鐘を摩るやうな聲で、地方の政争問題を談じてゐた。五十歳近い、瘦せぎすな男で、頭の天邊が僧侶の頭を見るやうに禿げ、顔は綺麗に剃つてゐる。ほとんど横柄に近いやうな其の態度が、御出家のやうな其風采と面白い對照をなしてゐる。

「クリステイナが幸福である——此の男を愛してゐると、どうして考へられやう？」とジオルジオは彼を見守り、彼に傾聴し乍ら、考へた。「クリステイナは、突然胸がこみ上げて來て、幾度と

なく涙を落したことがある。それほどやさしい、物思はしいあのクリステイナが、こんな男に一生  
醜鎖でつながれて了ふのか——乾燥無味な、ぢぢむさい、そして田舎政治屋の權謀術數で悪すれの  
してゐるこんな男に！ 母親としても、彼女に決して安樂にはなれぬ。あの弱々しい、病身さうな  
子供の苦勞に磨りへらされて了はなければならぬ。可哀さうな事だ！」  
彼は不憫さに充ちた目で、其の同胞を見やつた。クリステイナは、毎もの癖のやうに、しとやか  
に頭を一方へ傾げながら、薔薇の花越しに、彼に微笑み返した。

彼の眼は、彼女の傍にゐる弟のディエゴオの方へ轉じた。そして彼は考へた、「あの二人が同じ家  
族に屬するときは、誰が信じられやう。クリステイナは母の優美さの多くを繼承いでゐる。母親そ  
つくりのその眼や、それにも増して、母の身振りや様子までも。しかるに、ディエゴオは——彼  
は誰しもが、自分とは一から十迄異つた奴の面前で感じるやうな、本能的の敵意を以て、弟を檢  
覈した。ディエゴオは、血から眼を離さずに、がつがつと貪り喰ひ乍ら、差當つての仕事に没頭しま  
つてゐる。年は未だ辛つと廿歳位だが、矮大して緒ら顔の、そしてもう、小肥りに肥りかゝつてゐ  
る。低い額の下の小さな灰色の眼には、何等の聰明らしい閃めきもない。黄褐色の生毛が、其頬やが  
つしりとした顎を覆つてゐる、肉感的な、厚い唇の上にかざした、その同じ生毛の見える兩手には、

汚れた爪が身嗜みをかまはない事を證據立てゝゐる。

「何といふ、けだものだ！」とジョルジオは思つた。「何でもない事で彼奴と口をきくのも、たゞ  
の、お早やうに返答へするのでさへも、自分には殆んど肉體に感ずる位の厭惡を感じなければならな  
い。彼奴は、自分と話をするとき、決して此方の顔を見た事がない。何かの機で二人の眼が會へば、  
すぐにわきへ外らして了つて、自分の前では、何の理由もなしに、始終顔を赤くしてゐる。彼の本心  
が自分をどう考へてゐるかをどうしても知りたいものだ。私を愛してゐない、といふ事は確かだが。」  
自然な推移の順序として、ジョルジオの考へと注意とは彼の父親へ向けられた、ディエゴオこそ  
その本當の相續人であつた。肥え太つて、血の氣たつぷりで、強さうで、その全身が肉感的な生活力  
の熱い息を吐き出してゐるやうであつた。がつしりとした顎で、厚唇の、突き出した口で、血走つ  
た、いくらか藪肥みらしい目で、大きな、球根植物のやうな鼻である。顔全體が猛烈と粗暴な性質  
の印象を與へ、一々の運動、一々の態度が強烈に過ぎて、宛もその巨大な軀の筋肉が、それを拘束  
するところの肉に對して、不斷の反抗をつゞけてゐるやうである。これらのものが集つて、その傍  
にゐる氣むづかしやに船量するやうな心持を起された。「以前は、十年、二十年以前には、父はあゝ  
ぢぢなかつた」とジョルジオは一人言つた。「自分はよく記憶してゐる。彼はあんなぢぢなかつた。」

此の動物らしさは潜在してゐたのだ。さうしてだんだんと發展して來たものに相異なる。そしては、  
自分は此の人の息子であるのだ！」

彼はもつとよく父親を見た。そして眼の隅に網のやうな皺が寄り、その下に紫色の水泡があるのを見付けた。彼は更にその、短い、太い、赭くて、中風病のやうな頸に目を留めて、其の髪も髯も染められた痕跡があるのを認めた。未だ肉慾の熾んな品行な人に老年が始まりかけてゐること、不品行と月日のために無惨に荒らされてゐること、歲月の手が褪せさせる痕を隠さうとして、無駄な技巧をしてゐること、頓死を氣づかつてゐること、すべてこれらの、淺猿しく痛ましい、また下らないと云へば下らないやうなもの、如何にも悲劇的な、いかにも人間らしい事どもが、激く息子の心を動かした。父親に對する同情の——むしろ憐憫の大浪さへ、心の中に湧き起つて來た。「自分は父を非難する事が出來ようか？彼も亦苦しんでゐるのだ。あの總ての肉に——あの、不愉快極まる、嘔吐を催すやうな肉の塊りの中にも、靈魂が宿つてゐる。彼とても、いかなる心の悩み、いかなる心靈の煩ひを経験してゐないものでもない——父が死に對して狂的な恐怖を有つてゐる、それだけは確な事だ」忽ち彼は、父が斷末魔に苦しんでゐる幻を見た——中氣の發作で卒倒してゐる——喘ぎ——未だ生きてはゐるが——鉛のやうな色をして——物も云へず——性根もなく、その目は死

の畏れで充ちてゐる。やがて目に見えぬ棍棒の、二度目の打撃を受けて、無愛覺な泥土の一塊となつて了ふ。母親はそれを、嘆き悲しむであらうか？

「お前は未だ何にも喰べないんだね」と母親が彼に云ひかけた。「まるで手をつけないやうだが、氣分でも悪いんぢやないのかえ？」

「はい」と彼が答へた。「今朝は何だか喰べたくないもんですから。」

何か床の上を匍ふやうな物音がしたので、ジオルジオは振り返つて見た。それはあの、老耄の龜だつた。さうして彼は伯母の言葉を思ひ出した。「私と同じに跛なのだ——お前のお父さんに蹴られてね。」

「彼がそれを見守つてゐたとき、母親はかすかな微笑を含んで、かう云つた」「それはお前と同じ年だよ、丁度お前が生まれる前に貰つたんだから。其頃はまるで透き徹るやうな甲羅をしてゐて、ほんとうに小さなものだつた——まるで、玩具のやうで。家へ來てから、あんなに大きくなつたんだよ。」

「母親は林檎の皮の一片をとつて、龜にやつて、それが皺の寄つた、蛇のやうな頭を左右へ振つてゐるのを一寸の間見守つてゐたが、夢心地にでもなつたかのやうな風をして、ジオルジオのために

種の花を刺きはじめた。

「お母さんは、昔を憶ひ出してゐる。」とジョルジオは、思ひ耽つてゐるらしい母親の眼を見乍ら、考へた。彼は母が、過ぎし日の幸福を、ありとあらゆる屈辱の後、慰めとすべきものゝ一切を奪はれた今日に追従して、云ふに云はれぬ悲哀に沈んでゐるのを判断した。「その頃は父に愛されてゐたのだ。母は年も若くて、苦勞の何たるかを知らないでゐたことだらうのだから。どんなに母の心は苦しんでゐるだらう、どんな悔恨と、どんな絶望とで、靈魂が一杯になつてゐる事だらう！」彼は母親の苦痛に同情して、母親が堪え忍んで來た苦勞を思ひ浮べてみると、遂に涙で眼が霞んで來た。彼は「一生懸命になつて、それを堪えた、そしてそれがぼたり、ぼたりと、深い心の中へ、靜かに落ちるのを感じた。」と、お母さん！ あなたが、これを御存知ならば！」

彼が頭を回らすと、クリステイナが薔薇の花を隔て、ここにしながら、此方を見てゐた。カミルラの婚約者は「それが要するにあの男の法律を知らない」と云ふ證據になるんです。苟くもそれだけの権利を……」などと辯じてゐた。男爵は此の若い法律家の意見に感服して、早飲みこみに、「成程！」とか「たしかにさうだ！」とか合鍵を打つてゐた。

彼等は市長をたたきつてゐたのである。

アルベルトミはカミルラの傍に着席してゐた。先の尖つた小さな髻を生やして、頭髮を眞中で分けて、額の推毛を丁寧に揃へて、金縁眼鏡をかけた、暇人形のやうにびかびかした、顔色の紅い男である。「こればカミルラの理想なんだらう。」とジョルジオは考へた。「兩人は永年の間愛し合つてゐる。此迄随分水い間、希望し、渴望し來つた所の、未來の幸福を信じきつてゐる。アルベルトオも戀をする人々に共通な、ローマンズの小徑を、カミルラの手を曳いて通つたに違ひない。カミルラは強壯な方ぢやない——神經質で、ヒステリカルだ。朝から晩まで、好きなピアノでノクテチユルスを弾くより外なんにもしない。兩人はやがて結婚するんだらうが、その將來はどんなものだらうか？ 空虚な頭の、現状満足の青年と、センチメンタルな、とりとめのないやうな少女とが、田舎町の偏狭な空氣に取り巻かれてゐるとしたならば——」

暫らくの間彼は、空想の裡で彼等の平凡な生活の日々を追つてゐると、自分の心が妹に對する憐憫で滯えて了ふのであつた。彼女はジョルジオと體質を同じくしてゐないでもなかつた。すらりと背が高く、つややかな栗色の髪を晴れやかな眼をもつてゐて、その眼は、緑に、青に、灰色に、絶えず色が變化してゐる。うつつすりとお化粧をしてゐるらしいので、餘計に青白く見える。胸には薔薇の花を二つ挿してゐた。

「恐らく彼女は、外貌に於てよりも精神に於て、より多く自分に似てゐるであらう。彼女自身が意識に發展せしめた、あの畏るべき胚種のあるものを、彼女はその靈魂の中に有つてゐる。彼女の心は漠然とした煩悶と、満足されない憧れとに充たされてゐるのだ。彼女は病んでゐる——けれども其病氣には、名を付ける事が出来ない」

このとき、母親は卓子から立ち上つた。父親と、ドン、バルトロメオとを残して、みんなも彼女に随つて行つた。後に残された二人は煙草を吸ひ乍ら、話してゐる。それがジオルジオの眼には以前よりも一層厭はしく見えた。片手では母親の腰をやさしく抱き、片手ではクリステイナを抱き乍ら、彼は兩人を次の室へ連れて行つた。彼の心には兩人の者に對する憐れみとやさしさとが溢れてゐたからであつた。カミルラがノクチュルノを弾き出すや否や、彼はクリステイナに言つた——「庭園へ行かうぢやないか？」

母親は婚約の兩人と共に残つてゐたが、ジオルジオとクリステイナとは、無口な小さい子を伴れて、外へ出た。

初め、二人は、話もせず、並んで歩いて行つた、ジオルジオは毎もイツボリタに對してするやうに、自分の腕を妹と組合せて。急にリクステイナは立ち止まつて、見廻した。

「荒れ放第の庭園だこと——」と彼が呟いた。「子供の時分に、此處で、何んな事をして遊んだか——憶えてゐらつしやいますか？」そしてルウカの方へふり向いて、「ルツキイノさんや、駈けて御覽少し駈け廻つて、お遊びなさい。」さう言はれても子供は母の傍を離れやうともしないで、ますく、母の手に堅く縋りつくばかりであつた。

「こうですよ」と彼女は嘆息を吐いて、兄に云つた。「此の子はいつまでも、斯うなんですよ。駈け廻りも、遊戯も、笑ひさへしないで、何時でも私にばかりくつついてゐるんです。どんな事があつても私の傍を離れない。何でも彼でも、みんな恐がつて」けれどもジオルジオは、別れて來た戀人の事を思ひ耽つてゐて、彼女の言ふことを聽いてゐなかつた。

半ば日蔭になり、半ば日向になつた庭園は、牆壁に圍まれて、牆壁の頂上にはガラスの破片が日に閃いてゐた。牆壁の一方の側に沿ふては格子牆がつゞき、他の一方には、何れも相等しい間隔を置いてサイブレへの樹の一行が、臘燭のやうに眞直ぐな、細長い幹に、槍の穂先のやうに尖つた、黒つばい葉の茂りを頂につけて、立つてゐる。南の端の、日當りの一ばんいゝ個所には、橙の木の幾列がいま、花を開いてゐる。其他の地面には、薔薇や、ライラックや、匂のいゝ草花のいろいろが生い茂り、彼方此方には、正しい間隔を置いて植えられた、桃金娘の小藪があつて、今は不

用になつた花壇との境界をなしてゐる。一方の隅には、細い樓の木があり、中央には眞圓い池があつて、一ぱいになつた潜水の中に水草が蔓つてゐる。

「ねえ、憶えていらつしやいますか！」とクリステイナが云つた。「貴方がいつか此の池の中へ墜つ落ちて、叔父さんのデメトリオさんが引き上げてくれたのを。何といふ、恐しい事だつたでせう！叔父さんが救ひ出してくれたのは、奇蹟でしたわ。」

デメトリオといふ名前を聞いて、ジョルジオは叱驚した。それは愛する名で、その名は毎も彼の心臓の鼓動を激しくさせた。そこで彼は耳を傾けて、妹の云ふ事を聞いてゐた。彼は水を凝視めた。足の長い蟲が水の上を、あちら、こちらへ駆け廻つてゐる。彼は死んだ叔父の事を話して見たい、彼の追憶をぶちまけてあひたいといふ、堪へきれないやうな慾望を感じた。けれども彼は我々がたつた一人でそれを享樂しやうために、心の中へ一箇の秘密を隠匿して置くやうな心もちから、その慾望を制へて了つた——其妹がそれを聞いて、死んだ人をなつかしがるのをよろこばないといふ、嫉妬に近い一種の感情からである。叔父を回想するのは、彼の特權であつた。彼はそれを神聖にして犯すべからざる、最も貴重なる所有物として衛つてゐた。デメトリオをこそ、彼の眞の父であり、彼の唯だ一人の親族でもあつた。

その人が再び、彼の前にたち現れた。やさしげで、考へ深げで沈鬱な、とは云へ男らしい顔をして、——額の上に垂れさがつてゐる、黒髪に交つた白髪の一房は、彼の風采を非常に異つたものにしてゐる。

「それから、憶えていらつしやいますか」とクリステイナが云ひつづけた。「夕方貴方が隠れてしまつて、一晩中戸外で明した事があつたのを？ あの時も？ すねぶん、心配させられましたわ！——どんなに私達は涙を落し乍ら、貴方の事を呼んだでせう！」

ジョルジオは微笑した。あの時身を隠したのは、單に笑談からではなくて、自分が居なくなつたと思つた時に、家の者共がどうするか見てやらうといふ、また彼等を泣かせてやらうといふ、殘忍な好奇心からであつた。靜かな、濡つぽい晩で、大勢の聲が彼を呼んでゐるのが聴えた。彼はその聲がされきつた家の内から聽えて來る物音に一々耳を澄まし、人々が自分を捜し乍ら隠れてゐる處所の前を通るときは、怖ろしさと満足とで、息を殺してゐた。暫時経つて、庭園の中を捜しても眼目だつたので、そのまま彼は邪魔されずに、其處へ殘された。と思ふと、家の窓々が明るくなつたり、暗くなつたりして、夢中になつた人達が家中をばたばた駆け廻つてゐるやうなのを見て、彼は殆んど涙滲むやうな強い感情にうたれた。そして自分が眞實に居なくなつたかのやうに、家の者の

悲嘆と自分自身の思ひとを憐むのであつた。けれども、それにも係らず、彼は片意地に其の場に踏止まつてゐた。夜が開けて、靜かな、無限の天空に光が次第に廣がつて來ると、彼の頭の中の馬鹿な忘念は吹き拂はれて、後悔の念が生じた。彼は父親の事と、彼を待つてゐる懲罰の事とを思つて、恐ろしさに、絶望した。すると、池が彼の心を魅きつけた。彼は天を映してゐる、朦んやりとした青白い池の方へ引つばられて行くのを感じた——その池の中で、數ヶ月前、彼が死にかけたその水の方へ。デメトリオが不在であつたのを、彼は想ひ出した。

「何といふ、芳い香なんぞせう！」とクリステイナが叫んだ。「少し花を摘みませうよ。」空氣は庭園中の香氣の温かさに重たく、懶げであつた。ライラック、オレンヂ、薔薇、麝香草、めばうき、マートルなぞの花が爛漫として——すべてが相集つて、一つの強い、微妙な香氣の流れをなしてゐるのであつた。

「兄さん」とクリステイナが突然きいた。「何をそんなに考へこんでいらつしやるの？」  
花の香は彼に感情の動亂を起させた、彼の戀の精熱はイツボリタに對する凄まじい要求をして起つた來て、他のあらゆる情緒を拂ひのけて了つた。そして過去の悅樂の數知れぬ記憶は、彼の感覺を忙殺させた。

クリステイナは微笑んで——躊躇して——それから、「彼の人の事を——考へていらつしやるの？」  
「あゝ、さうさ、その通り」とジオルジオが答へた、妹の寛恕するやうな、やさしい目付で見られて、急に顔を赤くしながら。そして去年の秋九月、妹と一緒に海岸に滞在してゐたとき、イツボリタの事を打明けたのを思ひ出した。

クリステイナは、なほも微笑しつゝ、口籠もり乍ら「今でも兄さんは——あの人の事を——あんなに思つて、いらつしやいますの？」  
「思つてゐるともさ。」

兩人はそれきり物を云はないで、橙の列樹の方へ歩いて行つた、二人ともそれ／＼の思ひに擾亂され乍ら。ジオルジオは妹にうち明けたので、いよ／＼名残り惜しさが増し、クリステイナは、自分の兄が戀してゐる、その知らぬ女の事を考へて、埋葬むられた思慕のかす／＼が、甦生へつてくるやうに感じた。兩人は振り返へつて、微笑みながら、互に顔を見合せた。それが少なからず、互の痛苦をやわらげた。

「まあ、何といふ、澤山な花でせう！」クリステイナは叫んで、歩を早めて、オレエンヂの木の、枝を引き撓めて、梢の花に手の届くやうにしようと、すると、花は頭から、肩から、胸の邊までと零



れて——下はいちめん都はしい雪に蔽はれた。腕をさ伸べた彼女の姿勢はチャーミングであつた、  
楕圓形の頭、細そりとした白い頸筋、頬のあたりが、力業のために潮紅して。急に、彼女は顔色を  
變へて、腕を落して、眩暈でもして來たやうに踴めいた。

「さうしたの、クリステイナ！ 氣持が悪くなつたの！」と、シオルジオは叱罵してきながら、  
仆れかゝつた妹を抱き止めた。

彼女は口が利けなかつた、たゞ、オレンヂの木から離れさせてくれといふ手眞似をした。兄に扶  
けられて、彼女がよろよろと五六歩、歩き出したとき、ルウカは肝をつぶしたやうな目付で、母を  
見守つてゐた。と、彼女は立ちどまつて、深い溜息を吐いて、だんだんと正氣づいて來た。

「御心配ぢないの——何でもありません——今丁度、身體の具合が變つてゐるもんですから、花の  
匂が、すこし強すぎたんです。もういゝんです——よくなりました。」

「家の内へ遣入らうか？」

「いえ、此所に居た方がいゝの。腰かけませうよ。」

兩人は格子塔の傍の、古い石の腰掛けへかけた。子供が生面目に、茫然としてゐるのを見て、其  
の無感覺から呼ば醒ますためにシオルジオは「ルウキイノ！」と叫んだ。

子供はたゞその重たい頭を、母親の膝に沈めるばかりであつた。彼は折れた花のやうなもので、  
頭を頸の上へ眞直ぐに立てゝゐることさへも、六ヶ敷かつた。その肌は、透きとほるやうに綺麗で  
一々の血管が青い絹糸のやうに見えてゐる、その髪は殆んど眞白いと云ひたいほどの亞麻色である、  
小羊のやうに柔らかな、濕ひのある目は、長い、綺麗な睫毛の下に、晴れもとして青かつた。裏  
れな母は彼の頭を撫で乍ら、涙を堪えやうとして堅く口を結んでゐるけれど、大きな涙が二滴、湧  
き出して、其頬を傳つて流れ落ちた。

「クリステイナ！」

情の籠つた兄の音調は、クリステイナの感情をいよいよ切なくもして、新しい涙の雨が流れる。  
「聞いて下さいな。私は是迄つひぞ我儘を云つた事はありません。どんな事でも我慢をしました。  
辛抱をしました。泣き言を云つたり、駄々を捏ねたりしたことはありません。さうでせう——それ  
なのに、またこんな目に、またこんな目に——切めては子供でなりと埋合せをと思ひましたのに——」  
絶望の涙が其の聲を塗まらせた。「ねえ——あれですもの。話もせず、笑もせず、遊びにも出す、  
他の子供がするやうなことは、ちつともしないんですもの。一體彼れはどうしたといふんでせう？  
そして私にばかりくつついてゐて、一寸の間も離れやしません。何だか、私の息で生きてゐるや

うに思はれるだけです。ねえ、兄さん、ああ、あの長い、長い、いつまでも暮れさうにもない日に、私は窓の下で仕事をしてゐます。そしてふいと目を上げて見ると、此の子がじいつと私を凝視めて凝視めて——ゐるんです。それは一つの、永い永いくるしみ——一種の殉教のやうな。私は自分の心臓の血を、一滴一滴と、搾りとられるやうに思ひます」クリステイナは口が利けなくなつた、咽び泣きに聲が止まつて。

「せめて」と涙を拭ひながら、彼女が續けた。「せめて、今度生まれる子は、他の事は措いても丈夫なやうに！ 美しくなくつたつて、構ひません——ああ、神様、どうか此の願を聞き届けて下さいますやうに！」

ジョルジンは彼女の手をとつた。一寸の間兄と妹とは黙つて並んでゐた、人生の恐ろしい事實に壓迫されて。

荒れ果てた、寥しい庭園は兩人の前に擴がつていた。サイプレス列樹は凝手として眞直ぐに、天を指して突立つてゐる、宛も結願の蠟燭の如くに。つい近くの、薔薇の茂みをもものうく吹き渡る微風は、萎れた花瓣を揺り落とす力さへない。ピアノの音が思ひ出したやうに、家の方から聞えて来る。

#### 四

「自分の強ひられてゐる役目は、どうしても免れる事が出来ないのか？ 遁路はないのか？ 自分はその黙に立ち向かはなければならないのか？」ジョルジンは氣も狂ふやうな恐怖を以て、其の瞬間を想望した。密閉しきつた室の中で彼と差向ひになつた場合を考へると、根深い、抑へるに抑へきれない嫌惡の餌食となつて了ふのであつた。

日が經つに従つて、彼の恐怖は増さつた、と同時に自分の意氣地なさに対する侮蔑も加はつた。彼は、母や妹や、すべての憐れむべき犠牲者どもが、彼ばかりを——總領に生まれた——彼ばかりを——總領に生まれた——彼ばかりを、爆発物とも、抗議とも、保護とも頼んでゐるのを感じた。それでなくて、何でこゝへ自分を呼び返へさうぞ！ それでなくて、何のために自分も歸つて來やうぞ！ なほ又、此の絶對絶命の本分を果す事なくして去る事は、出來さうにも思はれぬ。もちろん、窮策中の窮策として、黙つて逃げ出して置いて、後から手紙を寄越して、何か旨い口實で辨疏をするといふ事が出來ないものではない。恐怖の極に達して、彼はさうした卑劣な計劃をも、實際

に立ててみた。それを實行する手段方法を考へ、委細の委細を考へ、其の結果の事までも心の中で追及してみた。はれども、かうした場面を空想して見る度毎に、母親の悲しげな、困惑した顔が現れ出で、彼の心に堪え難い悔恨を起させた。彼は自分乍ら、自分の利己的な意氣地なさが厭になつた。そして、子供があせり立つやうに、自分のもつてゐる内面的氣力の痕跡を捜し出さうとした。もしそれがどんな小さなものであつたにしても、それを刺戟し、奮起せしめて、自分をあはした卑しい衝策に驅りやるところの、遂かに優勢な力と對抗せしめる事が出来るからである。しかしかうした空想的の奮發は永く續かず、彼をして何らの男らしい決心をなさしめる役に立たなかつた。そこで彼は靜かに位置境遇を檢閲して、無理な理窟を造つて瞞着しようとした。「畢竟、自分にどうする事が出来やうぞ」と彼は自らに言ふ「私が調停してみた所で、善くして行く事が出来るものを。母が私に要求する、此の痛苦は努力は、實際に於て何の利益を持ち來たしたであらうか？もし母が私に要求する、それはどんな種類の利益だらうか？」其の畏るべき仕事を遂行するに必要なだけの力量を、自個の中に發見し得なかつた彼は、正反對の方法に逃路を見出して、自分のあらゆる努力の爲すなきを論證して、自個の満足を購はうと努めた。

「そんな會見なんかして見たつて、何になるだらう？ 何にもなりやしないのは、知れきつてゐる

父が説法をきくか、怒り出すかといふ事は、其場合の父の氣分次第である。もし憤り出されたら、自分は彼の憤怒と凌辱とに對する何らの武器をも有つてゐない。また父が其の罪惡でないか、もしくは止むを得ないといふ事を辯論されたならば、同じやうに自分は降参して了はう。出来て了つた事はどうする事も出来ない。不徳もかうまで人の性質に深く根ざして了へば、抜き去る事が出来ない。父も、もう不徳の改められる、悪習の矯め得られる年ではない。あの女と、それからあの子供らとの關係は永しいものだ。私の諫めを聽いて、女なり、子供らなりを捨てるといふ事が出来る事か？ かういふ係累を打破しなければいけないといふことを、説き伏すべき機會があらうか？ 昨日自分は其の女を見た。その鷲爪をその肉にうちこんでゐる男を決して手離しさうもない女である事は、一目見ただけで分る。死ぬまで彼女は父を掴みしめてゐるだらう——どうにも、仕様がなない。それにまた、子供らには子供だけの要求がある。兎に角、かうなつてから、父と母との間を和解させる事が出来やうか？ とても駄目！ だからいくら自分が骨を折つて見た所で、無駄だと云ふのだ。そして後には——浪費とか放擲とかいふ物質上の問題が残つてゐるけども、自分のやうに、斯うして家を遠ざかつてゐるものが、それを何としやうぞ？ それは絶えず見張つてゐる事が必要で、それはデイゴオにばかり出来る事だ。これはどうしても、デイゴオに話して見なければなら

ね——彼と相談して見なければならぬ。要するに、目下適當つて解決しなければならぬのは、アルベルトの結婚費といふ問題ばかりだ。實を云ふと、それを一番騒ぎ立ててゐるのは、アルベルトである。私を一番面倒な思ひをさせるのは彼である。彼を何とかしてやるのは、たぶん、そんなに六ヶ敷い事でもあるまい。」

彼の考へは、妹の結婚費のために多額の出費をしてやらうといふのであつた。それと云ふのは、叔父の全財産を相続したので、彼は富裕で、樂に暮らしてゐたからである。此の宏量な企は、彼自身を自個の評價に於て高からしめた。彼は自分がいままなさんとしつゝある、金錢上の犠牲的貢獻に依つて、それよりもすつと厭な、一切の責任を解除されたやうに感じた。そして母親の望の方へ出かけて行つたときには、彼はすつと心が樂になつて、厭な思ひも減つてゐた。のみならず、彼はその朝、父がもつと我儘にすることの出来る、平生の往居の別莊の方へ歸つて行つた事を知つてゐた。夕飯のとき、あの一脚の椅子が空になつてゐるのだと思ふと、胸がせいせいするやうだつた。

「お、シオルジオか！ いゝところへ来ておくれたつた！」と、彼が這入るとすぐ、母親が叫んだ。其の聲のひびきに驚かされて、彼はちつと棒立ちになつた、そして彼は激情のために相恰が變つて、殆んど見分の付かないやうな母親の顔をちつと凝視めた。彼は弟のデエゴを、不機嫌さうに、黙つて突立つてゐる妹を見た。けれども、誰一人として、事情を話す者はなかつた。

「どうしたんだい？」とシオルジオは弟の方へ振り向き乍ら、辛らうして云つた。そして彼の注意は、初めて弟の顔面の上に見た、奇妙な、敵意の表情に惹きつけられた。

「銀の匣がなくなつたんです。」とデエゴは顔を燈め乍ら、眼も擧げずに、ぶつぶつ云つた。「そして、それを私が持ち出したといふんです。」

激しい言葉の急流が、母親の唇をついて出た。

「さうさ、お前さ——お前だともさ。お前はお父さんのお味方だから——お父さんの同類なんだから。まあ、何といふ惡黨なんだらう！——こんな——こんな情けない事にまで——自分の抱き擁えした子供にまで、こんな目に遭はされて！——でもまあ、あの人に似たのは、お前一人だ——有難いことには、お前一人だ——ほんとうに、有難い事です——あの人に似たのはたつた一人——たつた一人です！」

母はシオルジオの方へふり向いた。彼は依然入口の所に、啞のやうになつて、じつと、立ちすくんでゐた。母親の願は、痙攣するやうに震えた。憤怒のために身をわなゝかして、今にもそこへ、知覺を失つて仆れやしないかとシオルジオは思つた。

「私達がいま、どんな日を送つてゐるとお思ひか？　それが、おわかりか？　日毎々に新規の非道な事がやつて來ない日はない。日毎々に此の不仕合せな家の物品を掠奪されないやうに新規の戦ひをしなければならぬ。それをそ毎日——一分間の暇もなく！　さう聞いたらお前も、お前のお父さんが、もし出来る事なら、私達の寝てゐる寢臺も、口の中のパンも、取上げて了ふだらうといふ事が信じられませんか？　でもあの人は——見ておいでよ——きつとするから——きつとしまけかち——さうして母親は喘ぎ——語りつづけた。咽び泣きが句切り、句切り毎に息を室まらせて、時々あんな、か弱げな風采をしてゐる人にしては不思議なほど、荒々しい憎惡の聲を放ちながら。そして彈劾がまたもや彼女の口を突いて出た。きいて見ると、父はもはや何のたしなみもなく、何を恥ぢる心もなく、金を拵へるためには何でも彼でも、やつつける。彼は如何かしてゐる、すつかり氣が狂つてゐる、田地は荒らして了つた、木は伐り尽す、材木は——誰にでも、幾千でも關はず——どしどし賣りさばく。而して今では我子供に住んでゐる家の財物を、引割がうとしてゐる。長い事彼は、アウリスバ家重代の寶物として、今日迄大切に保存されて來た、相傳の銀の匣をねらつてゐた。それを隠さうとした母の苦心も無駄だつた。デイエゴオが父親と共謀して、二人してうまく、

あらゆる警戒を潜つて、それを盗み出して、何者の手へとも知れず渡して了つたのである。

「お前は、恥かしいとは思はないのかえ？」と母親は、デイエゴオの方へ向き乍ら言葉を續けた。デイエゴオはむら／＼と肝癢が起つて來るのを、やつと抑へつけ乍ら、聞いてゐる。「お父さんの味方になつて私をいじめめるのを、お前は恥かしいと思はないのかい？」お前の頼むことは何でもきいて上げたのに——お前のしてほしいといふ事は、いつでもして上げたのに——でも、お前は、知つておいでだ——お金が何處へ行くかは、ちやんと承知してゐる。それでゐて、恥かしいと思はないのかえ——一言も云はない——返事もしない。兄さんも來ていらつしやる——さあ、匣の所在を云ひなさい——云ひなさい——云ひなさいと云ふに。

「もう先刻から、私は知らないつて、云つてゐるぢやありませんか。匣なんぞ盗りやしません——見もしませんよ。未だ解りませんか？」デイエゴオは、もう我慢がしきれなくなつて、怒鳴り出した顔面は朱を濺いだやうに云つて、いよいよ父親に似たと思はせた。

「母は亡者のやうに眞蒼になつて、ジオルジオを見た。それがジオルジオにその顔色を移すかと思はれた。

「デイエゴオ」と兄は、思はずぶる／＼と身體を震はせ乍ら、叫んだ。「デイエゴオ——貴様は出

て行け！」

「行かうと思や、行くさ」とデイエゴオは、傲然として肩を聳かし乍ら、兄の眼を外らしつゝ、答へた。

其の刹那、ジオルジオは狂激な憤怒の情に襲はれた。それは優柔不断な人々の場合にあつては、むらむらと胸へ込み上げて来て、その感情を行爲に再現する彼等を力に失はせ、徒らに空想を通過して問罪の囚光を送らしめるのであつた。大初以來常に人間の性情に潜んでゐて、何か一寸した刺戟に遇へば直ぐに爆發しようとする——他の何物よりも猛烈な、兄弟同志の憎悪や、社會の習慣と家庭の一致とが作り出すところの、情愛の紐にも係らず、同じ一族の男子の間に必らず伏在してゐる和解し難い敵意や、またかの罪惡の實行に、もしくははその思考にさへ附隨する所の、基督信者の良心に深くも刻みつけられた、天の掟に關する遺傳的本能である恐怖や——すべてこれらの感情が相集つて、ジオルジオの胸には眩めくやうな混亂の浪が荒れ、その手は強まる衝動のまゝに、わなわなと震えた。どつしりとした、血の氣たつぶりの肉體で、赤茶けた毛髪で、牛のやうな頸で明らか

に優越した體力が、兄の威嚴を冒さうとしてゐる、デイエゴオの様子を見たばかりでも、彼の怒りはいよいよ加つた。彼は油断を見澄まして、此の動物を、有無を云はさず、やつつけてやりたいと

さへ思つた。思はず知らず彼の手を見ると——茶褐色の生毛に蔽はれた、大きな、力のありさうな手で、それは食事の際、彼奴ががつがつ貪り喰ふのを見たとき既に、胸を悪くさせた一件である。

「出ろ——すぐに行て出け」とジオルジオは甲走つた、權柄づくな聲で繰り返した。それとも、此の場でお母さんにお詫をするか。」かう云つて彼は、つかくと、デイエゴオの方へ手を伸ばし乍ら行つた、弟の腕を掴まうとするかのやうに。

「お差圖には及びません！」とデイエゴオが叫んだ。永い永い間兄に對して貯へてゐた敵意を、低い前額の下、小さな、灰色の眼に光らせ乍ら。お前人の胸へ穿たさうな、さういふ言葉の口

「何だと、氣をつけて物を言へ！」

「威張つて見たつて駄目ですよ！」

「さういふ貴方は、一體どうした人なんです？。また此の家で、何をしやうつてんです？」デイエゴオはもう逆上して、「貴方なんぞが出て来る幕ぢやない。貴方は門外漢ぢやないか——貴方の云ふことなんか眼中にない。貴方は今日までに、何かしてくれた事があるんですか？。何にも、ありやしない！」始終自分の好き勝手な眞似をしてゐたんだ。自分の身ばかり悪くいたはつて、大事がつ

てゐた——その上まだ何を怒張らうといふんです？ 貴方はやつぱりロオマにゐて、自分の懐中の

むだ費ひでもしてゐた方がいゝんだ。用もない所へ歸つて来て、餘計な口なんぞ利くものぢやない

—」

遂に彼は兄に對する、怨恨、嫉妬、憎悪、敵意の一切を爆發させた。彼の眼に映じたジョルジオ

は、實に運命の寵兒と云ふべきで、あの大都會の中に彼なぞが知らない快樂の、のん氣な生活をし

てゐて、まるで家の者のやうに他家からは全つたく離れて、數限りない享樂の特權を恣まゝにして

ゐるのであつた。

「お黙りなさいよ！」と叫んで、我を忘れて母親は兩人の間へ飛びこんだ。そしてデイエゴオの口

をおつ塞いだ。

「行つて了へ、餘計な口は利かないで、さつさとお父さんの所へ行つてお了ひよ！ もう二度とお

前の云ふ事なんかきゝたくも、見たくもないよ！」

デイエゴオは、兄が手出しをしたら、掴みかゝつてやらうと思ひ乍ら、ぶるぶると身を震はせつ

、躊躇つた。

「行つておしまひよ！」と繰り返したのが、最後の息で、母親はふらふらと仕仕ががつかつて、カミカ

の腕に抱きとめられた。

そこで、デイエゴオも出て去つた。憤怒で鉛のやうな顔色になつて、ジョルジオには聞きとれな

い事をぶつぶつ云ひ乍ら。彼の重たい足音が、幾つとなくつゞいた。人氣のない室々を通つて、消

えて行つた。其所には、黄昏の深み始めてゐるのであつた。

雨の降つてゐる晩だつた。寢臺の上に横になりながらジョルジオは、殆んど物を考へる力もない

ほど澁茶々にされて了つてゐるのを感じてゐた。その思想はふわふわと漂つてゐて、漠然としてゐ

て、更に聯絡がない。そしてほんの一寸した感覺——街中で折々聞える人聲、壁に懸つてゐる時計

のカチカチ云ふ音、遠方でチリンチリンといふ鈴の音、馬の蹄の音、汽笛の音、扉を閉める反響な

ぞが彼を苛々させて、深い鬱悶の思ひを増さしめた。彼は數へきれぬ時間の深淵に依つて、過ぎし

日の生活から隔てられ、世界のあらゆる人達から遠ざけられて、たつた一人になつて了つたやうな

心持がした。臆ろげに、ぼんやりと彼はまた、イツボリタが最後の接吻に黒いペエルを引きすつた

ときの身振りを想ひ出した。拐杖を挟んで、膿涙を受けてゐる子供の姿も復た見えて来た。

「もう死ぬより外に、仕様がな」と彼は考へた。何らのこれといふ理由もなしに、彼の精神の苦悶は突然耐らないほどになつて来た。悪い夢にでも魔された時のやうに、他の心臓は激しく鼓動しだした。寢臺から跳び下りて、目が眩みながら、ふらふらと、苦悶の重さに耐えかねて、室の内を歩き廻つた。その聲音が自分の胸の中に反響するかと思はれた。

「誰だらう？ 誰か私の名を呼んだ！」彼はたしかに人の聲を聞いたやうに思つた。耳を澄ました。何にも聞えない。扉を開けて、廊下へ出た。あたりはひっそりとして、たゞ彼の伯母の室の扉だけが開いてゐて、室の中に燈影があかあかと點つてゐる。そのとき、あの年を老つた、死骸のやうな顔が、ひよこりと覗きやしないかといふ、不思議な恐怖にぞつとした。ふと彼は思つた、もし伯母が死んでゐたならば——椅子にかけたまゝ、その額を胸に埋めて——死んでゐたならば？

此の幻は、正物のやうにありありと見えて、彼を畏ろしさに凍らせた。彼は筋肉一つ動かしもせず其所から根が生えたやうに突立つてゐた。そして頭には鐵の輪が嵌められて、それが動脈の脈搏につれて、伸びたり、縮んだりするやうに思はれた。彼の神経が遂に彼を支配して、混亂した過渡の印象を受けさせた。

お婆さんが咳をしたので、彼は吃驚した。瓜立ちして、そつと、自分の室へ退いた。「今夜は一體どうしたといふんだらう？」もうとても此の室に一人ではゐられない——下へ降りて行かう！けれども、彼は、あのいやな午後的一幕のあとで、とても母親の、對きこんだ顔を見るには耐えられまいと思ひやつた。だが、外へ出なければならぬ。彼はクリステイナの所へ行かうと思つた。あのやさしい妹と一緒に庭園の中で過した、いみじき、物思ひの時間を思ひ出して、訪ねる氣にもなつたのだ。

雨の降る晩だつた。街上にはほとんど人影も絶えて、疎らな、數の少ない瓦斯燈が、ぼんやりとした光を投げてゐる。戸を卸した麵麴焼場からは、仕事をしてゐる職人の聲が聞えて、出来たてのパンの匂がした。酒場では六絃琴の音がして、田舎唄の合唱も聞えた。野良犬の群が細い路地を向うへ、一さんに駆けぬけて、見えなくなつて了つた。方々の時計が時をうつてゐる。戸外の空氣の中を歩いたので、次第に昂奮した神経も静まり、狂氣染みた動亂も治まつた。彼はその見たり、聴いたりした事に、もう一へん注意を集中するだけの餘裕が出来た。彼は立ち停まつて、六絃琴を聴き、ぼんやりとパンの匂を嗅がうとした。その時向ひ側の軒下をすりぬけるやうにして一人の男を、たしかにデイエゴオだと彼は思つた。それが多小彼の心を擾したが、格別の憎み



は起らなかつた。すべての荒々しさと敵愾心とは、彼を去つてゐた。彼は弟の云つた事を思ひ出さずにはゐられなかつた。『つまり、彼奴の云ふ通りぢないか』と彼は思つた。『俺はこれまで誰のためにも盡力してやつた事もない。俺はいつも、自分自身のために、生きて来た。全くの所、自分は父親の家では、關御の他人と同様だ。他の者もみんな同じやうに、さう考へてゐるだらう。お母さんも自分に云つたではないか——お前には、私達がどんな日々を送らなければならなかつたかお解りか？』つて——『あゝ、あゝ、自分はお母さんが涙を海と流すのを見ながらも、お母さんを救ふだけの力がないのだ。』

考へ、彼はチエライア御殿の門まで来た。中庭を横ぎつたとき、彼は目を舉げて高い窓々を見た——窓の一つにも、燈のついてゐるのはなかつた。藁の腐るやうな臭がして、圍壁の角になつた暗い處に、小さな噴水が水を滴してゐる。玄關先には、微かに揺らめく洋燈の光に照らされた聖母の像が、格子の内に安置されて、造花の番藪の大きな花束が脚下にあげてある。大きな石段の段階は、古い社などに見るやうに真中の所が永の年月に凹んで、磨かれたやうになつてゐる。ドン、バルトロメオが、年既に頹齡に及んでから、若い妻を引き入れて、世繼の子を産ませたといふ、その古い世襲の館には、憂愁の氣が重々とすべての物に覆ひかぶさつてゐる。

石段を登り乍らジオルジオは、あの愁はしげな、若い母親と、蒼褪めたその子供とを心の中に視た——夢のやうな通景の遠い最端に。宛も、自分の眼の届かない深く奥まつた室の内にもゐるやうに。一瞬間彼は、引返さうか知らと思つて、舊びきつた、大きな石段の中程に立ち止まつて、感つた。彼は奇妙な、何とも説明の出来ない心の状態にゐた。もう一度彼は周圍に對する現實の感じを喪つて、たつた今、家の廊下で、扉口が二ばに開いてゐるのを見て襲はれたやうな、漠然とした恐怖に捉まつて了つた。とは云へ、忽ち彼は人聲を聞いた——誰か、何ものかを追拂つてゐるらしいと思ふと、汚らしげな雜種の、灰色の瘦犬が、餓えきつて、家の内へ忍びこんだのだらう。彼の傍を駆けぬけた。すると、一人の下男が裏直に返つて来て、石段の上へ現はれた。『どうしたんだい！』とジオルジオはびつくりしたやうにきいた。『いえ、なに、格別の事でも御座いませぬ！』あの犬を追拂ひましたんで。あの野良犬の畜生が毎晩々々、化物のやうに忍びこんで来やがるんで。此の下男の言葉と共に、此のつまらない事實が、彼をして名状すべからざる不安の念を——何か凶い事が起りかゝつてゐるといふ感じを抱かせた、そしてそれが其次の質問を起させた。

「ルツキイノさんは達者か？」

「はい、旦那様、御丈夫で！」

「もう、寝ましたか？」

「いいえ、まだ起きておいでです。」

下男の後について、彼は廣い室々を通りすぎた、その室々は、古風なスタイルの家財道具が、きちんと置き並べてあるにも係らず、半分は空室のやうだつた。其處には人の住んでゐる形跡はなかつた——さうした室々は、つひぞ開かれた事がないかも知れぬ。そしてジョルジオは自分に言つた——クリステイナが自分の靈の優美さをそれて吹込まなかつたところを見れば、彼女は此の家を愛し得なかつたのだらうと。大部分は、その若き妻が婚禮の當日此の家へ這入つて要たときのまゝになつてゐる——いや、チエライア家の、故の女主人が遺して置いたまゝになつてゐる。たつた一人ぼつちでゐて、丁度子供を寝かしつけようとしてゐたクリステイナは、時ならぬ兄の來訪をよろこんだ。

「まあ、いらつしやい！ほんとによく來て下さいましたね！」と叫んで、眞實なよろこびを漏らし乍ら、首のまわりへ手をなげかけて、彼に接吻した。そのやさしい抱愛で、兄の荒れきつた胸をなぐさめながら。

「ルツキイノや、伯父さんが被入しつたよ！何とか申上げないかい？ さあ、キツスをさしてあげなさい。」

微かな微笑が一瞬間子供の唇の上に耀いて、長い睫毛の影が、彼が頭を下げたとき、蒼白い頬の上に震えた。ジョルジオ双腕に彼を抱き上げて、その細そりとして、脆さうな身體の内に、小さな可哀い、心臓が弱々しく動悸をうつてゐるのに心を動かされた。彼は手で壓したばかりでも、この弱々しい生を潰して了ひやしないかと危んだ——子供の時彼が——羽はたきをする小禽を手の中に握つた、丁度其ときのやうな心もちである。

「羽根みたいに軽いね！」と彼が云つた、その聲の中に震えた感情を、妹は聴き逃さなかつた。彼は子供を膝の上に乗せて、胸の毛をやさしく撫でた。「ルツキイノ、お前は伯父さんが好きかい？」ときいたとき、常ならぬやさしさで胸が一杯になつた。彼はどうかして此の子を微笑してみたかつた、たゞの一度でも頬を染みさせてみたかつた、あの透き通るやうな眞白な皮膚を、こればかりでも紅味ささして見たかつた。

「お前此處をどうしたの？」と、繻帯してゐる一つの指を指し乍らきく。子の顔が、驚きまじり、「此のあひだ、切つたんですよ」とクリステイナが云つた。兄の一舉一動を注意深い眼で追つてゐ

たのだ。ほんのかすり傷ですけれど、なかま、癒りませんの。」

「私に見せておくれ」と病的な好奇心に驅られて、その伯父が云つた。その子供にも微笑ませやうとして笑ひかけながら、「私が吹いて上げやう、さうすると癒るから」

びくびくもので、子供は繻帯をとかせた。ジョルジオは妹の氣遣はしげな目の下で、氣を付けた上にも氣を付けて、繻帯をといた。繻帯の端が小さな傷口にくついてゐる。それをひのけなす勇氣はない。しかし繻帯の縁から心もち喰み出してゐる。凝つた牛乳の一滴のやうな、白い小さな點を認めた。彼の唇は震いた。彼を擧げて、妹を見ると、妹は傷ましうに顔を凝め乍ら、兄の一舉一動を目で追掛けてゐる。そして、此の一刹那、哀れな彼女の靈魂は、彼が掴んでゐるその小さな掌に全く集中されてゐることを彼は直覺的に感じた。

「大した事はない。」と強ひて微笑し乍ら、ジョルジオは云つた、そして子供を満足させるためにこの部分を吹き始めた。子供は熱心に奇蹟の現はれるのを待つてゐる。それからジョルジオは再び氣をつけて、繻帯を巻いてやつた。彼は石段の上で腰はれた、不思議な神経的な恐怖を掌中野良犬の事や、下男の言葉や、迷信的な恐怖に驅られて、自分がきいた質問や、すべてこれからの、根據のない胸騒ぎの事を考へてゐた。

「何を考へていらつしやるの？」とクリステイナがきいた、兄の考へこんでゐるのが氣遣はしさをに。

「なに、何でもないんだ。そして、口から出まかせに、ねむつたさうな子供の注意を呼び起さうとするより外には何の動機もなく、云つた。あのね、石段の所に大がわつたよ。」

「子供はその目を大きくみひらいた。」「ありや、毎晩来るんだつてね。」「ええ、さうですつて、ジョヴァンニから聞きました。と話しかけて、急に言葉を止めた。長ろしさに見張つてゐる子供の目に涙が一杯になつてゐるのを見たからである。」「いゝえ、うそなんですよ。」とジョルジオの膝から子供を受取つて、抱き締める乍ら。「うそですよ、ルツキイソや、伯父さんは笑話を云つていらつしやるのよ。」「うん、うそだつたよ、うそなんだよ。」とジョルジオは、起り上り乍ら、繰り返した。他の子供とは似ても付かない、その泣き聲に度を失い乍ら。そのあはれな、小さきものは、咽び泣きのため

に息が絶えて了ひはせぬかと思はれた。

彼女は次の室へ這入つて、泣きじやくりしてゐる子供を抱き締めながら、だました。

「兄さん、貴方もいらつしやいませんか？」

ジョルジオは、彼女が子供の着物を脱がしてゐるのを、ちつと見てゐた。彼女はそれを嫌はして、了いやせぬかと危むやうに、注意の上にも注意を加へて、徐々と着物を脱がせてゐる。その所作の一つ一つが、既に不治の尙癩病に罹つてゐるらしい、小さな手足の脆弱さを證明するのであつた。頭は凋んだ花の梗莖のやうに細長ひ。胸骨、肋骨、肩胛骨は殆んど皮膚を透通つて見えるやうで、その下に出来てゐる深い窪みの陰影によつて、いよいよ目立つ。膝の關節は節瘤立つてゐる。そして寝衣を着せてもらはうと思つて母の方へ手を述べたとき、僅かそれ位の運動をして、絶えず、この果敢ない生の烟を滅しかかつてゐる、畏ろしい衰弱を追拂ふのにも、非常な努力を必要とするのを見て、ジョルジオは可哀さうで涙一杯になつた。

「キツスしてやつて下さいな」と言つてクリステイナは、子供を床へ入れる前に、ジョルジオの方へ差しのぞけた。それから子供の手をとつて、繻帯をした指で、額から胸へ、又右の肩から左の肩へと、十字を畫かせて、それから手を組ませて「アマメン」と云つた。

葬式のやうな陰森の氣が其の場に漲つた。長い、白い床衣を着せられた子供は、小さな屍骸では

ないかと思はれた。

「さあ、お休みなさいよ、私達も傍にゐてあげるから。」

兄妹はまたもや同じ悲しみに沈み乍ら、小さな床の兩側に黙つて腰かけてゐた。藥瓶が一ぱいのつてゐる、床の傍の卓子から、藥劑の香がしてゐる。一匹の蠅が喧しくぶん／＼云ひながら洋燈を廻つてゐたが、やがて卓子かけの上に止まつた。何かの道具がひつそりとした家の内で、壊れた音がした。

「ねたね」とジョルジオが靜かに云つた。

彼らは兩人とも、死の幻を暗示した子供の睡りを見守つてゐた、ふたりともそれから、考へを轉じる事が出来なかつた。

やゝ時が経つた。突然、子供は金切り聲をたて、眠をばつたりあいて、恐ろしい夢にでも襲はれたやうに、枕から頭を擡げた。

「母さん！ 母さん！」

「どうしたの、――どうしたの、坊は？」

「母さん！」

「あゝ、此處にゐますよ。どうしたの？」  
「あれ、迷つて下さり——迷つて下さり——」

六

晚餐のとき(其の時からデイエゴオは姿を見せなかつた)カミラが、露骨でない云ひやうながら、  
「目で見たものは、胸を痛めないんだわ」と言つたのは、彈刻の繰り返しではなかつたらうか  
? 母親の言葉もまた——窓の傍でいろ／＼と話し合つて、泣きもし、泣かせもした事を、母はどう  
してあんなに速く忘れて了つたのだらう——母親の言葉さへ、往々にして非難の意味を表してゐる  
やうに思はれた。

「皆が同じやうに自分を裁く」とシルジオは傷ましく思に入つて、「元來彼等は自分が總領に生まれ  
た權利を放棄したことを、又は、叔父のデメトリオを相續した事を宥さないのである。自分は家に  
止まつて、父や弟を監督し、他の者の家庭的幸福を守つてやるべきだつた。彼らに言はせると、一  
切のかうした事柄は、自分さへ家にゐたならば、必ず起らずに済んだのださうだ。それ故に、その

本當の犯罪人は私なのだ、そしてそれが自分の罪滅しなのだ。

敵手の、それに対して無理やりに嫉しかけられる敵手の控へこんでゐる、別荘に近くなればなる  
ほど、當惑や、懊惱や、不法な壓制のために惹き起された憤懣の念がいよ／＼加はつて来る。彼は自  
分を、自分の苦惱に對して何の思ひやりもない、殘酷無慈悲な人達の犠牲であると思つた。さうして  
母親の言葉や、二人で葬列を見守つた日の回想は、いよ／＼彼の傷ましさを増し、彼の皮肉を鋭く  
尖らせるばかりであつた。

「いゝえ、シオルジオや、お前さんに心配させてはなりません。お前さんに苦勞させてはなりません  
ん……お前には、何にも聞かせないで置くべきだつた……そんなにお泣きでない……そんなに泣か  
れちゃ、私が困るぢやないか!」——斯う言つて貰つたものゝ彼は其日以来、たゞ一つの苦痛をも  
じなくされたわけぢやない! あの一幕はシオルジオに對する母親の態度を卵の毛ほども變へさせ  
るに足りなかつた。其後母親は、ひきつゞいて憤懣の情を漏らし、父に對する古いのや、新らしい  
非難と共に、幾千百のいやな話を繰り返して拜聴させた。いはゞ、苦勞がその顔に刻んだ痕跡を數  
へて見よと彼に迫つたのだ。彼女は斯うまで云つた。「御覽よ、此の泣き爛れた目を、此の頬に刻ま  
れた深い皺を、此の眞白になつた毛を——あゝそして、私の心臓が見せて上げられるものならば!」

して見ると、その時の立派な感動は何の爲めだったか？で、母はジョルジオに対する憐憫に動かされる前に、彼の涙の流れるのを見る事が必要であつたのだ？彼女は自分が子の上に強ひてゐる犠牲の残酷を忘れて了つたのか？あゝ、沈黙の中に苦しみ、微笑を以て身を捧げ得る人の、いかに稀なることぞ！

彼はつい先頃自分もお仲間入りをした、いざ、ざざざ事だ厭になりきつて了つてゐたし、これから取りかゝらうといふ大詰の場が忌々しくたまらなくもあるしして、母親の苦勞の仕方を非難したいやな心にさへなつてゐた。

行く途中も——（自由に道のりを延ばせるやうにと、いよ／＼の間際になつてから引返したり、村落の方へうつり行つたりして、わざと馬車には乗らないで来た）——その道々も、だん／＼恐怖の念が大きくなつて来て、すべての他の情緒を呑みつくし、すべての他の思想も拭ひ去つて了つた。彼は間もなく来るべき場面を描きはじめた——いかなる態度をとるべきかと考へ、切り出しの文句を用意し、途方もない假定の中へ迷ひこんだりし乍ら。彼はその少年、青年時代の回想を辿つて、自分が過去に於て、父に對して、いかなる態度をとりつゞけたかを吟味し始めた。けれども、これといふ出發點がないために、子としての情愛を、はつきりとした形に纏める事が出来なかつた。

彼はいゝ加減に誤魔化してばかりゐて、意識のその部分を本氣に吟味した事がないのである。物心ついて以來、父と直接にかゝり合ふ度毎に、心のどん底に感じた本能的の憎悪を彼はついぞ檢べてみやうとは企てなかつた。

「恐らく自分は、父を愛した事がなかつた」と彼は考へた。さうして實際に彼は、二人の間に、信じ合ふとか、思ひ合ふとか云ふたやうな場合を只一つも思ひ起す事が出来なかつた。一方では、總ての彼の記憶を通じて、極々幼少であつた時分まで溯つて、絶え間なき恐怖の線が——肉體上の懲罰、荒々しい言葉と、その次に来る打擲の恐怖が見出された。さうだ、自分は父を愛した事がないのだ。デメトリオこそ彼の眞の父であり、彼の唯一の眞の親族でもあつた。

またもや彼は、あの靜かな、思慮深さうな人の、沈鬱な、とは云へ男らしい顔を思ひ浮べた。額の上に垂れ下つてゐる、黒い毛に交つた白髪の一房は、その風采を非常に變つたものにしてゐる。

叔父の姿を思ひ浮べる度毎に感ずるやうに、彼は忽ち蘇生へつたやうに感じて、今までその心を占めてゐた惱ましい思ひは取り去られて了つた。荒浪は靜まり、あらしは過ぎて、新らしい平和の感じが前の反感と入れ代つた。彼は何を恐れる事があらうか？とりわけ、それが到底避け得られないと決まつてゐるのに、自分を待ち設けてゐる責苦を想像の裡で誇張する必要があらうか？又

もや彼は、あの叔父が墓場の下から及ぼしてゐる影響によつて、一種の孤立してゐるやうな雰囲気  
に包まれるのを覺えた——すべての現世的の關係はみんな其意義を喪つて、彼にとつてほんの一時  
的の價値しか持つてゐないやうに感じられて来る。蓋しそれは、運命にある苛責を受くべく定めら  
れた一個の人？ その靈魂が既に已に明らかに豫見してゐる救済に到達する事が出来るであらうと  
思ふ諦念である。

此の精神的苦患の間を、彼の方で骨を折つて得たでもない、此の不思議な休息を、彼は別段怪  
しみもせず、目をあけて、自分を取り繞いてゐる、廣漠とした寂しい風物を眺め渡した。

午後であつた。目の届く限り、澄みきつた空の透明な光りを浴びて、それがあらゆる物質的事物  
に滲通して、それを變化するかと思はれた。近くで見ればはつきりとわかる、植物の種々な形體も、  
遠くなれば、ごちやん、に融けあつて、次第にその輪廓を失つて、一つの大きな全體となり、それが  
たつた一つの整つた呼吸で限なく生々してゐるかと思はれる。丘の裾は緩漫にひろがつて、谷底は  
一つの溝になり、その静かな胸に天を映してゐる。その溝から大きな山の形體が突き立つて、澄みき  
つた空間に堅固な輪廓を鮮えさせ、ほとんど超自然な光りを放つ眞白な雲を輝やかせてゐる。

七

對頭彼は別荘が樹立の間に見える處まで來た。二つの大きな望臺があつて、石の欄干を廻らし、  
帝王や女王の胸像を象つたテラコッタの裝飾瓶で飾られてゐる。それらの帝王女王の頭の上には、  
先の尖つた産會が植物の冕冠を被せてゐる。

これらの粗末に刻まれた、さまざまの顔を見ると、直ぐにジオルジオは往昔の少年の日を、田舎の  
物祭りの混亂した記憶を、賭事や勝負事などを思ひ出した。そして、その陶器の胸の中には植物が  
執着の根を下ろしてゐる、是等の沈黙不動の君主達に就いて、自分で一人ぎめに作つた物語をも思  
ひ出した。彼は水い間、女王の中の一人を——常春藤の葉を垂れさがる葉の毛にして、春は小さな  
金色の花を星章にした一人を、とりわけ慕しく思つた事を憶えてゐた。彼の目は熱心にそのひとを  
捜した。そしてすぐにそれを一方の隅に見出して、昔の友でも逢つたやうな微笑を湛らした。そして  
一瞬の間彼の靈魂は全く、とり返し難い過去の方へつれ返された、たのしみの伴なつてゐる感情で。  
けれども門の近くで聞えた人聲が、そのテラコッタをぶち壊してやつた。彼は惶惶しく目前の現實

へ引き戻された、そして差當つての役目に對する嫌惡の情が非常な激しさで戻つて來た。あたりはまことに閑かであつた——籠の中のカナリヤが開け放した窓口で金切り聲に啼いてゐた。「自分が來やうとは思つてゐないんだ」と彼は臆病に考へた、「あの女がもし一緒にゐたら、どうしやう！」

門のすぐ内に二人の子供が遊んでゐた、彼はすぐに、自分の腹異ひの弟であらうと推察した。彼が近いたので、二人は振り返つて彼を見た。驚きはしたが、人見知りはしなかつた。子供らの圓々とした、赭い頬邊が血の氣に燃えて、隠されぬ素性の極印が押ししてある。ジオルジオには堪えられなかつた——彼は恐怖と周章とに襲はれた——たゞ、をかく、したい——穴あらばすぐにも這入りたいやうな心持であつた。彼は目を舉げて、窓口を見た。其の窓掛けの間から父親の顔がのぞくか、或はつねづねあんなにまでその賤劣さと貪慾さとを聞かされてゐる、あの女が覗くかとびく／＼もので。

「や、これは、若旦那様で御座いますか？」

それは出會ひ頭に彼と行き遭つた下男の聲であつた。同時に父親も窓から呼びかけた。

「ジオルジオかい？　これは珍らしい！」

彼は元氣を取り直して、強ひて微笑し乍ら、平氣な風を装はうと宣掛へた。彼は例のわざとらしい、ほとんど講式的な關係が、自分と父との間に復たもや成立するのを感じた。それは二人が顔を合せる度毎に、きまつて經驗するところの當惑さをかくすために、一寸の間それに依頼しなければならなかつたのだ。のみならず彼は意志の力が全くなくなつて、此の突然の訪問が何のためであるかを、打ちあける事さへ出来ないやうに思つた。

「上つて來ないか？」と父が窓から呼んだ。

「え、——参ります」

彼は二人の子供に氣が付かないやうな風をして、望台の一つに通ふ、廣い上り段を登つて行つた。父は彼を出迎へた。兩人は抱き合つた。親愛の情を装ふてゐるのがあり／＼と見えた。

「たうとう來る氣になつてくれたんだね！」

「散歩に出たのですが、つひ足が此方へ向いて了ひました。久しい事來て見ませんでしたが一みんな舊のまゝですね。」

彼はあたりを見廻して、胸像を一つ／＼、非常な興味で眺めた。

「貴方は大抵こちらにいらしゃいますんでせうか？」とジオルジオがきいた。單に何事かを云ふた



めに、そして、永のいきのしまうな、例の不愉快な沈黙を破るために。

「うむ、いまではちよちよちよちよつて来る」と父親が答へた。その沮喪した調子が寧ろ其子を叱咤させた。この空気がいゝやうなんだ——心臓を思つてからな」

「心臓がお悪いんですつて？」とジオルジオは意外な事をきかされて、心から動かされて、叫んだ。「どうなすつた——いつ頃からですか——ちつとも存じませんでした——誰も一言も云はなかつたものですから」

傾きかけた午後の太陽の強い光で、父親の顔を見たので、彼は、致命の病氣の徴候を發見したやうに思つた。傷ましい憐憫の情を以てその深い皺を、血走つた眼を、剃刀をあてた事のない頬や顎に逆立つてゐる眞白な毛を——染められた髪や髭は緑がかった、暗紫色を呈してゐたが——喘ぐやうな呼吸をする厚い唇を、短かい、色の變つてゐる頭を見た。

「何時頃からですか？」とジオルジオは、惱ましさを隠さずに、きいた。此の人は死刑の宣告を受けてゐるのだと思つたとき、其の反感が消えて行くやうに感じられた。

「何時からといふことも出来ないんだが」と父が答へた。子の明らかかな、本氣の心痛を見て、その同情を持續させ、増加させるために、病氣を誇張して云つた。其の同情を利用出来るかも知れない

と思つたからである。「こんなやうな病氣は幾年間も潜在してゐて、時が来るとだしぬけに出て来る奴だ。出て来たと分つた時には、もう手遅れなんだ。諦めるより仕方がない——いつ、やられて了ふか、わからないんだ」

彼が震え聲でかう言つたとき、彼は頗るその嚴酷と粗暴とを失つて、もう老人らしく、もつと弱々しく、もつと意久地になつたらしく見えた、宛も彼の全身が突然虚衰症に罹つたやうに。けれどもそれはやり過ぎされた。何となくわざとらしく芝居がゝつたところがあるのを、ジオルジオも流石に氣付いた。彼はふと、假面をかけたなり脱したりするやうに、舞臺の上で、一分間の間に顔をすつかり變つてみせる俳優を思ひ出した。そして直覺的に、次に起るべき事を知つた。勿論父は此の突然の訪問の理由をすつかり推察しきつてゐる。それで、あゝして病氣を見せつけて、何かの便宜を獲やうとしたのだ。何か一定の目論見を有つてゐるに相異なるのだ。何だらう？ ジオルジオは何らの憤怒をも激昂をも感じなかつた。また自分の心の中に彼に對する何らの警戒をも用意しようとはしないで——反對にその幻が明らかになればなるほど、ますます彼は冷靜になつて来た。彼はただその喜劇の進行するまゝにして、場合の變化毎に身を任せてゐる。

「屋内へ入らないかい？」と父がきく。

「さうですね」

「ちや、遣入らうよ。お前に見せたい書類なんぞもあるんだ。」

父親は一つの室の中へ彼を案内して行つた——その室から、カナリヤの聲が家中へ響きわたつてゐる。ジオルジオは眞直ぐ前を見ながら、彼について行つた。彼は父親がその歩行ぶりを變へて、非常に疲れきつたやうな風をして歩いてゐるのを認めた。さうして、間もなく彼が目撃者にもなり、犠牲者にもならなければならぬ、陋劣な瞞着に考へ及ぶと、脱勢と悲哀とで一杯になつた。例の女が家にゐるやうにも思はれた。きつと何處かの室に隠れてゐて、二人の話を立聴きしてゐると思はれた。

「書類といふのは何だらう？」と彼は考へた——

「私からは何を誤魔化さうといふのだらう？ 勿論、金だ。私が考へてもゐないのに乗じて……」母親の酷しい誹謗の聲が耳の中に響いた。彼は母親からきいた、殆んど信じられないやうな、いろ／＼の事を思ひ浮べた。自分はどうしたらいいか？ どういふ返答をしたらいいか？

カナリヤは朗らかに唄ひつゞけてゐる。白い窓掛は風をうけて帆のやうに膨らんで隙間から蒼空を覗かせてゐる。風が卓の上の書類をさらさらと鳴らせて、卦算に使はれてゐる水晶の枠の中に、

淫猥な寫眞が入れてあるのをジオルジオは見た。

「ああつ！ どうして今日は斯うなんだらう」と父親は囁いて、刺しい動悸のために苦しんでゐるやうな様子を見せて、滅入り込むやうに椅子へかけ、目を冥つて、横になつて、軀をかくやうな息を吐いてゐる。

「お悪いんですか？」とジオルジオが、ためらひ乍ら云つた。この苦しみのどれだけが眞實で、どれだけが見せかけだかを知らず、また如何なる態度に出てよいかはつきりとは解らないで。

「うむ——だが直ぐ癒るんだ。ほんの一寸した興奮とか、些細な面倒とかがあると、つい來るんでね。で、なるべく靜かに、休息してゐなくちやいけのだが、それ所か、どうも……」

彼は復た力なげな、訴へるやうな調子になつた。それが、ジオルジオに、伯母のチオコンダが砂糖菓子かきれたと云つてねだつた時の聲を思ひ出させた。然し乍ら、現在矯飾は全くのところ、厚顔に過ぎ陋劣に過ぎた。それでも、改め難い不徳を満足させるために、かうした手段にまで訴へなければならなくなつた人の有様は、随分と憐憫に値したもので、その老獪な顔に表はれた、何とも云はれない悲惨さはジオルジオをして、其の過去の半生のいかなる葛團煩悶の中にも、此の場合の恐るべき苦痛に比ぶべきものはないやうに思はしめた。

「それ所か、どうなんです？」と彼は訊ねた。父親を鼓舞して、続けさせやうとするかのやうに、また自分自身の憐ましさに範圍を限らうとするかのやうに。

「いや、それ所か、悪い時にはわるいもので、近頃の不運つゞきと云つたらお話にならないだ。

どうも大損つゞきでな。三年つゞいての凶年——葡萄牙の蟲害——家畜は死ぬし——地代が半分に下がつて、税金が無暗と上がる。……いや、これだ、これなんだよ、お前に見て貰いたいと思ふのは、彼は卓上から書類の一束をとつて、息子の前におつぱらいて、數ヶ月溜つてゐる地租金に就いて非常に煩雜つた事を亂脈に説明し始めた。

彼の言ふ所を聞けば、直ぐにもどうかしななければ大變な事になるといふ。もふ既に、差押への脅威を受けてゐるので——競賣にでもされないと云へない。要する彼が悪かつたからといふのではない、此の當面の難關はどうして切りぬけやう？ 問題の金額はなかなか小さなものではない——どうしたものだらう？

父親がその腫れたやうな、膨らんだ指で——その馬鹿に蒼白い色が、眞緒になつた顔色と妙な對照をなしてゐる——引繰り返してゐる書類を、ジオルジオはぢつと見ながら黙つてゐた。時々父の言ふ事を聞くのを止めて見たけれど、なほその耳には父親の單調な聲の響きが、カナリヤの鋭い啼

聲や、庭に遊んでゐる子供らの時々叫ぶ聲などの、バツワララウツツとして残つてゐた。窓掛は風がその襷を膨らませたり、落ちたりする度毎に、窓口に翻つた。すべてこれらの音響や動作は、何とも云い表すべからざる悲哀の感を、無言である訪問者に與へた。彼がぼんやりとして、書類の上の四角張つた、書記風の手蹟や、抜針を刺した小さな痕の數へきれないほどある、血の氣のなま、腫れたやうな父親の手を凝視してゐたときに。

彼の少年時代の一つの光景が、驚くべき明瞭さを以て彼の前に現はれた——父親が非常に沈鬱な顔をして、窓の近くに坐つてゐる。シャツの袖をぐつと捲くしあげて、其腕を金盞の上に差伸べてゐる。水は切られた脈管から流れ出す鮮血で赤くなつてゐる。其の傍には、外科醫が用意の繻帯を持ちながら、血の流れるのを見守つてゐる。一つの幻が他の幻を誘ひ出した——緑色の革鞘の中に光つてゐる抜針が見える、血のなみ／＼とした金盞を搬んで行く女中が見える、父の腕が、幅の廣い巾へかけて、黒絹の吊綱帯で纏帯されてゐるのが見える。

「お前は聴いてゐるのかい？」父は、彼の考へ込んでゐるのを見て云つた。

「聴いてゐます——聴いてゐます。」

父は恐らくジオルジオの方から、自發的に云ひ出すのを豫期してゐたのだ。これに失望して、少

時の間彼は言葉を止めた。それから、其の當惑を包み隠し乍ら云つた。「バルトロメオがどうかしてくれないこともないのだが」彼は口籠もつた——其の顔には、何とも云ひやうのない表情が浮んだ。それを其の子は、彼の羞恥の情と、どうしてもかうしても目的を達しやうといふ、どうする事も出来ない慾望との、最後のつかみ合ひであると解釋した。

「一札入れさへすれば、すぐに拵へてくれるんだがね。……たゞその、お前の署名を、望むだらうと思ふんだが」

係蹄は遂にかけられた。

「えー！ 私の署名ですつて？」とジョルジオは吃つて、此の要求に依つて驚かされるよりも、寧ろ彼の妹婿に就いて母の云つた言葉を——たゞこのアウリスバ家の残りの身代を搾り盡さうとばかりしてゐる奴だときいた、その言葉を思ひ出して、どきりとした。

彼がどうしてよいか分らず、感亂してゐたときに、父親は、拒絶されるのを恐れて、すべての控え目を打ち棄て、露骨にその要求を持ちこんで来た。父に言はせると、それが競賣を免れる唯一の方法である——もし、競賣にされれば、他の債権者もみんな集つて来て、彼をやつつける事だらう。さうなれば、破産は避け難い。父の子たる者が、父の破産するのを平氣で見つてゐられるか？

ジョルジオが此の事件に關係するのは、やがて彼自身の利益を保護することになる——即ち、近々の中に弟と二人へ譲り渡さるべき財産を保護するのであるといふ事が、彼には理解されないのか？ 「いや、ぐづん、しちやゐられない——」一日か二日のうちに始まりさうなんだ——明日にもどうなるか知れない。彼は再び自分の病氣の話をしはじめた。いつ萬一の事があるか知れないと思ふのが恐ろしい、いろいろの苦勞心配がその最後を早くするといふのであつた。

此のとて耐らないやうな聲と顔付とは、心をかきむしられて了つたが、他の迫害者達——彼をこゝへ來させて、今も彼からのめざましい報告を待ち兼ねてゐる人々の事を考へて、ジョルジオは心を取り直しながら、

「でも、此の金は——仰有る通りの目的に、ほんたうにお使ひになるんでせうか？」

「え、つ——お前まで、お前までが！」と父親は、父として恥かしめられたやうな感情を装つて、憤激の發作を僅かに制し乍ら、叫んだ「ちや、奴らは、何時も、何處へでも觸れまわる俺の悪口をお前にも聞かせたんだな。俺が恥知らずの怪物だ——どんな罪惡でもやつつける——大悪黨だつて！ それをお前は、眞にうけるのか？……それにしても、彼らがかうまだ俺を悪くむのは、どうしたわけだ？俺を死ねがしに云ふのは、どうしたわけだ？いや、お前は、お母さんが俺を悪くむわかを知

らないんだな！すぐにお母さんの所へ行つて、俺が今息をひきとりかかつてゐると云つて見るがい  
。お母さんはお前を抱き寄せて、「そりやまあ、何といふ芽出度い事だらう！」と、ぬかすだらう！  
いやはや、お前は知らないんだな！」

彼は遂に我を忘れて、到頭、その残忍な野獸性を残らず曝露した。それを見るとその子は、以前  
の憎悪が矢庭にはげしくまた起つて来るのを感じた、さうして父を黙らせて、その面前から逃げ出  
さうといふ一念に襲はれて、何を反省する暇もなく、痙攣的に口を出した——

「さうです、私は何事も知りません。私がどうすればいいか、それだけ仰有つて下さい——何へ署  
名するんですか？」胸が苦しいので、彼は椅子から起つて窓際へ行つて、それからふり向いて、父  
親を見た。父親は、わなわなと震へる手で、焦れつたさうに、卓子の上へぬき出した抽斗の中を、  
何か捜してゐた。一枚の手形用紙であつた。

「此處へ、お前の名を此處のところへ書きこんでくれ、ばい、んだ」と言ひ乍ら、偏べつたい爪が  
肉の中へ隠れて了ひさうな、太い人差指で、其場處を示した。

腰も下さずに、自分のしてゐることを半ば気が付かずに、ジョルジオはペンを執りあげて、忙は  
しく署名した。彼の唯一の考へは、此の室を出て、たつた一人で、出来るだけ遠く野外へ出て行かう

といふのであつた。けれども、彼の父がその書類を取り上げて、署名をあらためて、砂製の吸ひ取  
りでインキを乾かして、要心深くそれを抽斗に納ふのを見たときには——自分乍ら、一杯食はされ  
たたと考へて見た時には——また家に待受けてゐる連中の拷問苛責に思ひ及んだ時は、其の時は遂  
ひに自分のやつた事に對する甲斐なき悔恨が彼を壓倒して、極度の憤激を發するがまゝに發せしめ、  
彼自身を、家族達を、母と妹の侵害された権利を守らんがために、彼は決然として此の惡漢に立ち  
向はうとしたのである。

ああ、さうして見れば、それは本當であつたのだ、母親の云つた事は、みんな本當であつたのだ。  
此の人はもう、何らの反省をも、何らの羞恥をも知らないのだ。金を拵へるためには何人にも、何  
物にも遠慮しないのだ……金を獲るためには、如何なる手段をも辭さないのだ。……そして、復た  
ジョルジオは、飽くことを知らぬ貧慾の女が、てつきり何處か近くの室に隠れて、立ち聴きしてゐ  
て、掠奪の分け前に心待ちしてゐるのを感じた。

「約束して下さい」とジョルジオは、戰慄を禁め得ずして云つた。約束して下さい、此の金を——  
決して他の事には費はないといふことを」

「そりやもう、勿論の事だ」と父親が、駄目押しをされて、苛らうとするのを隠さうともせず答

へた。既に目的を達して了つたので、最う下手に出て泣きつく必要がなくなつたので、その容子をすつかり變へて。

「どうぞ願ひますよ、——私の方にちやんと解りますから。」とジョルジはは眞蒼になつて、憤激の情を必死に抑へながらさう云つた。父親がだん／＼明らさまに忌はしい體を顯はして来て、自分が遣つた輕卒な行爲の結果がすつかり心に感じられたから。

「よう御座んすか、私は貴方に手を貸して、お母さんを苦しめるのは御免ですから」

「何を——何をお前は云ふのだ？」と父親が、かうした疑ひを受けて感情を害したやうな風を大袈裟に見せて、一生懸命になつて、父親の顔を眞正面に見やうとしてゐるジョルジを脅さうと矢庭に大聲を揚げて。「何をお前は云つてゐるんだ？ 何時あの毒蛇のやうな、お前らの阿母は、俺に毒を唾きかけるのを止すことだらう？ 俺を追拂つて了はなければあの口を、永久に閉ぢやうとしなうのか？ いゝとも、俺もそのうちにやつけてやる。何といふぬだ！ 十五年——さうだ——十五年の永い間、彼女は俺を一分間もほつとさせた事がないんだ。彼女は俺の生涯を毒殺した、俺を——インチづゝ切り刻んだのだ。もし俺がいま、仕様のない人間であるとすれば、それはあいつの——あいつ一人の罪なんだ。おい、よくきけよ、彼女のせいなんだ！」

「黙んなさい！」とジョルジは、憤激に我を忘れて叫んだ、死人のやうに眞蒼になつて、手足を慄かせ乍ら。「お黙んなさい！」お母さんの事を仰有るな、貴方はお母さんの足にキツスすることも出来ない身分です。私はそれを言ひに来たのです。それなのに、思ひ通り、貴方に狂言をかゝせてしまつた。貴方の良にかゝつてしまつた！ 貴方の要求は、貴方の妻のために私から何かを搾らうといふのであつた。そしてうまうまと成巧した——どうしたらばいいか……要するに貴方はお母さんを凌辱する氣なのだ！」

其の聲はとぎれ／＼になつて、言葉が咽喉に貼りつき、眼が霞み、膝がわな／＼と震えて、やつと立つてゐられるばかりであつた。「左様なら。もう行きませう。貴方は貴方の存分になさるがい——私はもう、貴方の子ぢやありません。二度と御目にもかゝるまいし、二ど、用事もありません。私はお母さんを伴れて、出来るだけ貴方から遠い處へ行きませう。左様なら」

彼は目が昏みながら室から躊躇き出た。望臺まで行きつかないうちに、裳裾のすれる音と、烈しく扉を立てる音がした。誰か見付からないやうに急いでかくれたらしかつた。たうとう、戸外へ出て門を潜つたとき彼は、泣きたい、聲をたて、泣きたい、氣が狂つたやうに野原を駆けぬけて、岩へ頭をぶつけるか、絶壁から身を投げて了ひたい——何かで——何かでその結末をつけて了ひた

くて耐らなくなつた。一つ一つの神経が、はり断れるばかりに、緊張しまつて、彼は、かきくれてゆく夕暗がいよいよ暮らせ恐怖を以て考へた、「何處へ自分は行かうか？ 如何して自分で、今夜彼處へ歸られやうぞ！」自分の家は涯知らぬ遠くへ引き退りて了ひ、その道程の遠さは到底辿り盡せないかと思はれて——此の堪うべからざる苦痛をすぐさまとり除いてくれさうにもない物は、みんな有すべからざるものと思はれた。

八

翌る朝、惱ましい睡りから目醒めたとき、彼にはたゞ前日の出来事に對する混亂した記憶があるばかりであつた。荒寥としたカムベニアに於ける悲壯な落日、幼覺の作用に依つて、月の中で限りなく引き延された晩鐘の嚴かな響、窓々に燈火が點いて、人影がそれを横ぎつて行つたり來たりしてゐる。我家が見え出したとき、彼を掴んだ苦悶、母や妹の質問に答へたときの狂的な興奮、父に加へた罵詈のいかに烈しく、争論のいかにすさまじかつた事を誇張して話したこと、實際の事實と、聯絡のない妄想とを一緒くたにして、大袈裟に話したいといふ狂氣じみた慾望、父親の默的な態度と

彼の力を籠めた反對とをかはるく述べたとき母親が、或は侮蔑の、或は温愛の言葉を挿んだこと、突然に聲が噎れて、耐えられぬほどこめかみが脈搏し出して、床に横たはつたときの猛烈な硬直と、其夜の怖ろしい幻と——かうしたすべてがごつちやになつて心へ歸つて來て脱れ難いその昏迷をいよいよ加へた。さうして彼はもつと完全な絶滅の状態に入りたい——無然無知覺な死にさへ入りたいと希つた。

何等かのやり方で死ななければならぬといふ觀念は、毎も同じやうな力強さで彼を壓迫してゐたけれども、その計劃を實行するためには、彼はどうしてもその無氣力を振り棄てなければならず、いろいろの面倒臭い手續を踏まなければならぬと思ふと、それは、到底堪えられた事ではなかつた。何處で自殺をするか？ 如何いふ方法で？ 此の家でか？ 然も今日只今？ 短銃か、毒藥か？ 彼は何等のはつきりした計劃を立て得なかつた。彼の意氣地なしと口の中に感じる苦味とは、彼の心を魔酔藥の方へ傾けさせた。さうして必要な服藥分量を獲來るべき實際的の手段を考へる暇なく、彼はぼんやりと其の結果を空想の上に描き始めた。その繪は次第々々に増加し、分裂して來て、いよいよ明確になり、遂に相集つて、鮮やかな場合を形作つた。彼の空想は、他自らの苦痛な死に關聯せる個人的の感覺よりも、寧ろそのカラストロオフが母親や弟妹たちに知れたときの有

様を内容にしてゐた。彼は彼らの態度や、言葉や、身振りや、すべての愁傷の有様を残らず想像して見やうと努めた。次第々々に此の空想的な好奇心は生き残る者の上に擴げられて、極近い骨肉のみならず、すべての親類に——友達にまで——イツポリタにまで——あんなに遠ざかつてゐて、ほとんど調伽の他人のやうに思はれるイツポリタにまでもひろげられて行つた。

「ジオルジオー！」と母親が扉を叩いて、呼んだ。

「お母さんですか、お這入んなさい！」母は這入つて来て、やさしげに案じつゝ寢臺に近づいた。そしてのぞきこみながら彼の額に片手をあて、きいた。「どんな鹽梅だね？少しは快いの？」

「いくらか、いくらか未だ目まひがします。口の中が苦くて仕方ない、何か飲んでみたいんですが」

「カミルラに牛乳を持つて來させようよ。窓をもう少し開けやうかね？」

「え、どうぞ」

彼は震へ聲で云つた、家族の者の愁嘆を心に描いて（いかに速やかにそれが描かれる事ぞ！）胸に起つて起きた自己憐憫の情が、母の居る事に依つて、一層強められたからである。彼は空想の上で、母親がいま實際に窓を開けてるところを、悲しい出來事の後で、母親がそれを發見するに至るとき

の動作として見た、そして彼の目は、自分自身に對する、またそんな惨たらしいショックを彼が與へやうとしてゐる、此の不幸な婦人に對する憐憫の泪で一杯になつた。悲劇の場は、驚くべき鮮やかさで、眼の前に現はれた。——母親は、外光を入れた後で、ふり返つて、もう一べん呼びかける。そしてもう一ど、戦慄し乍ら寢臺に近づいて、彼を揺すぶつてみると、もう硬直して、冷めたくなつてゐるので、あつと叫んで、氣絶して、——畏らく死んで——その上へ身を投げ伏せる、そんな激動を受けては其場で死んで了ふ事だらう。彼の内面的動搖はいよいよ激しくなつた、さうして今の此の瞬間が、何かしら挽回し難い、最終のものゝやうな嚴肅さに見えて、ある特殊な意義と價值とを有するものゝやうに思はれる母親の顔や、一々の言葉みぶりを、彼は殆んど氣遣はしげなほどの注意を以て見守つてゐた。突然心的昏睡から揺り起されて、彼の感覺はいづれも皆異常に鋭くなるやうに思はれた——それは屢々、彼の驚嘆と興味とを起させた、稀らしくない現象のあらはれである。それは意識の二つの状態から他の状態へ移つる瞬間的の過渡期であつて、前の状態と後の状態との間には、睡眠中と覚醒中との間に存すると同様の差別がある。それは彼に、脚光が突然廻轉されてばつと光りを放つたときの劇場を聯想させた。

かうして、母子がああ那列を見てゐた月のやうに、子は突烈母親を悟る目を開いて、怪しくも透



徹した視力を以て母をみた。彼は此の婦人の生命が彼自身の生命に近づいて来て、絡みつくやうな感じがし、血族の不思議な同情の念に依つて、互ひを待ち設けてゐる悲しい運命を悟つた。母親が来て、枕頭に腰をかけたとき、彼は杖杖して身を起して母の手を執つた、その煩悶と苦痛とを隠さうとして微笑しながら。そして指輪の一つに嵌まつてゐる寶石を検査するやうな風を装ひ乍ら、か細い、よは／＼しげな、非常に表情的な母の手を、その手の觸るゝ心地に比ぶべきものは此の世界に又とないその母の手を凝視めてゐた。「自分が死んだ時に」と、彼はたつたいま喚起した陰惨な影像になほも包まれ乍ら、考へた、「自分が死んで、母が氷のやうな自分の手に觸れたならば——」彼は自分が屍骸に觸つたときの嫌な心地を思ひ出して、身震ひした。

「どうしました？」と母親がきく。

「なアに——ほんの神経的な震ひです。」

「いゝえ、お前はきつと、気分がよくないんだよ！」と母親は頭を振つて、云ひつゞけた、「どんな氣持なの？」

「格別何ともないんです……勿論まだ、少々ばかり氣が落ちつかないでゐるにはおますけれど、けれども緊張した子の顔相を母親は見逃さなかつた。「ほんとにまあ、お前をあそこへ行かせなけり

やよかつた！」と母親は叫んだ、「お前を彼處へ行かせるなんて！」

「そんな事を仰有るな、お母さん。遅かれ、早かれ、しなければならなかつたんです。」

此の一刹那、今度は少しも混乱せず、彼はまたあの忌はしい時刻を想ひ起した、父親の聲を聴き、身振りを見、到底有り得ようとは信じられなかつたほどの荒々しい言葉を發音する自分の聲をも聴いた。彼は宛も、ある見も知らぬ人があゝした振舞ひをし、あゝした言葉を口にしたやうな感じがした、而も心の底には、漠然とした悔恨を、ある限界を踏み越したといふ、恕すべからざる違法をやつたといふ、ある人間的にして神聖なる何ものかを足下に蹂躪したといふ、本能的な意識を感じた。何故彼は、廣漠たる無言のカムバニアの原のまん中でデメトリオの幻が目の前に現はれたとき、それが驚感せしめた大靜寂を、そんなに遠く離れて了つたのか？ たゞ遠くから憐憫の眼を以て父親の陋劣無智を見てゐるといふだけの態度を、何故に彼は續けなかつたか？ その脈管の中に父親の血を亨けてゐる彼は、如何してその不徳の原子の何ものをも持合せないと云へようか？ 彼とても生存をつゞけて行つたなら、たしかに同様の卑劣な状態に陥らないと云へようか？ 人生は不汚の、煮えかへる塊りに過ぎない。彼は自分の中に、曖昧な、そして破壊する事の出来ない、たくさんの作用を有つてゐるのを感じる。その作用の避くべからざる、漸次的な展開が、彼の過去の

生活を作りあげたのであつたし、またもしも、彼が此の場合に於て、さうした作用の中の一つに聽従して、ある極端な方法でその全部に終結を與へなければ、彼の未來の生活をも形造つてゆく事であらう。

「つまるどころ、何故昨日やつた事を後悔するのか？ あゝせずそれがすまされた事か？」  
「さうです、仕なければならなかつたんです。」と彼は一人言のやうに、新しい意味をもたせて繰り返した。そして彼はなほ残されたる。生涯の短時刻の間に於ける此の上の發展を、靜かに、心を止めて待つてゐた。

## 九

母親と妹が行つて了つてから、彼は尙ほ暫時の間、如何なる動作に對しても肉體的に全く嫌悪を感じて了つて、寢臺の中にゐた。起きて洋服を着るといふだけでも、殆んど超人的な努力を要するやうに思はれた。一時間も経たないうちに永遠の安息を得て横たはるべきいま、彼は寢返りをうつさへ面倒なほど疲勞してゐるやうに思はれた。彼は再び魔藥の事を考へた、「目を閉ちて、眠

りを待てよ！」五月の朝の、處女のやうな眞新らしさや、窓の硝子に映つた清らかな空や、床を斜めにひろがつた大幅な日の光や、街から來る物音や人聲や、——かうした種々さまざまな生活のしるしは、彼の所へ襲ひ入つて來て、彼を生活へひきずり戻すかと思はれて、彼は憤怒をまぢへた恐怖の情に充たされた。彼は母親が窓扉をあけてゐて、カミルラが彼の寢臺の足の方に立つてゐる幻へ復歸した。彼はもつ一度、毎も一人の人の事を——即ち父の事を語つてゐる彼等の言葉をきいた。母親の一つの残酷な叫びが特に彼の記憶に残つた、さうして彼はそれをあの望臺の上で、午後の方陽の烈しい光の中で見た父親の顔の（其時彼が命に關する病氣の徴候を發見したと思つた）様子と聯絡して考へた。

「それが本當だつたらば！」と母親は彼やカミルラの前で、夢中になつて叫んだ——  
「どうか本當であつてほしいものだ！」そしてこれが、嘗つては彼にとつて、すべてのやさしいなつかしいものの中の理想であつた人の最後の印象で、それを彼は彼の世界へ持つて行かなければならないのであつた。

彼は奮然として、寢臺から跳び出した、いよいよ其の行爲に移らうと決心したので、「今晚までにやつつけよう——だが、何處で？」彼はデメトリオの閉めきりの室を思つた。けれども未だ、彼は

何らの確定した計画をも持つてゐなかつた、けれども心の中では、次ぎの數時間内にその死に方が突如として、それに彼が服従しなければならぬ、ある深秘な聲で暗示されると信じてゐた。

彼は粉粧をして行きながら、埋葬するために身體を飾つてゐるやうな考へに襲はれた——それは死刑囚や自殺者などに往々現はれる、一種の虚榮心である。彼はまた、こんな名も知れない、小さな田舎町で死ななければならぬ事を——友人達も久しい間自分の死を知らないでゐるだらうと思はれる位、彼等から遠く離れて死ななければならぬのを残念に思つた。もし此れがロオマで行はれたならば、彼の顔が十分廣まつてゐるあの大都會で行はれたならば、友人達もすいぶん泣いてくれやうし、またきつと、此の不可思議な悲劇を詩の後光で飾つてもくれる事だらう。そして彼はもう一度、彼の死につゞく光景を想像してみた——寢臺の上の姿勢、峻嚴なる安息に全く入つてゐる屍骸を見て、あの年若い同胞達が起す深刻な感動、蠟燭の森嚴な灯影の傍で通夜する人達の語り合ふさま、花輪で覆はれた棺が無言の若い人々の群に送られて行くさま、二人の詩人——ステファノ・ボンデイに依つて墓地で爲される永別の言葉、「彼はその生活を自分の夢と一致させる事が出来なかつた爲に死んだのである。」といふ言葉、さてそれから、イツポリタの——悲嘆と、絶望と發狂と。

イツポリタ！ 其人は其處にゐるか？ 何を考へてゐるか？ 何をしてゐるか？

「嗚呼！ 自分の豫覺は違ひなかつた！」と彼は考へた、さうして彼女が最後のキッスの上に黒いヴェールを引すつた時の身振りを想ひ出し、更にその最初の小さな出来事を残らず思ひ浮べてみた。けれどもなほ、彼の満足に説明し得ない一事があつた——それは、一度は彼のあらゆる夢、あらゆる熱愛の對象であつた彼の女を、放棄して了ふことを必然的に含んでゐる此の行爲に對して、全く同意して居られた事である。初めの頃の有頂天と狂熱とが過ぎてから、だんだんと希望が彼を捨てたのは何故か？ どんなに努力して見ても、あんなに死んで了つた、あんなに遠く離れて了つた、最大なる貴きもの、即ち兩人の戀を復活させる事が出来まいといふ、慘憺たる決定に到達して了つたのは、何故か？ 此の最近の頃、かうした新なる惱みの間に於て、それが彼の意識を動かした事は滅多にないといふ位過去といふものが完全に彼を離れ去つて了つたのは何故であらうか？

イツポリタ！ 何處に彼女はゐるか？ 何をしてゐるか？ いかなる場面に彼女の眼は注がれてゐるか？ 誰と一緒にゐて、誰と話してゐる事が彼女を動かしてゐるか？ 過ぐる二週間のあひだ彼女は、それぞれ別の處から四五通の電報をうつて寄越した以上に親しく文通する暇をも見出し得なかつたとは、一體どうした事だらう？

「たぶん彼女はもう誰か他の男に従つて了つたのだらう——例へば、彼女がいつもよく話してゐた、姉婿などに……」非難と猜疑との年來の習慣の結果なる、此の怖ろしい考は、過去の最も暗黒な時々に於けるが如く彼を囚へた。辛酸な記憶の洪水が彼に押し寄せて来て、彼は最初の晩に愛人の名を呼び求めた、その同じ露臺に凭れ乍ら、一分間のあひだに二箇年の間のあらゆる疑惑と苦悶とを繰り返へした。さうして、麗らかな五月の朝に、彼の知らぬ競争者の新らしい幸福が滿ち溢れて、自分の處まで來るかと思はれた。

## 十

彼が將に這入らうとしてゐる神秘にもつと深く自分を浸して置かうといふ欲求は、ジオルジオをして、デメトリオが最終の時刻を過した、寥びれた室を訪はしめた。

叔父の財産と共に、彼はこれらの室をも相続した。然も彼は神殿にでも對するやうに、此これらの室を神聖犯すべからざるものとして保存して來た。それは家の最上層に位して、花園を見下して、南向になつてゐる。

彼は鍵をとつて、こつそりと階段を登つて行つた、何所へ行くかを誰にも問ひかけられなくなつたからである。けれども廊下を横ぎるときに、どうしても伯母ジオリョの戸口を通らなければならなかつた。氣付かれずに通りすぎたいと思つて、彼は息を殺して、爪先立ちで通つた。彼はお婆さんが咳をしてゐるのを聽いて、その聲に建音を誤魔化して了はうと思つて急いだ。

「誰だい？」と室内から、暖れ聲がきいた。

「私ですよ、伯母さん」

「あゝ、お前さんか、ジオリョかい。さあお通り！」伯母は戸口に現はれて（その黄色い顔は日蔭では死骸のやうだ）何か持つて來たかどうか、と顔へ行くよりも先づ手の方へ行く、あの特々な穿鑿の眼付で、甥を見た。

「私は——むかうの室へ行くのです。」とジオリョは、室内から流れ出る忌はしい人間の臭氣に胸を悪くして、引き留めてもらひたくないといふ様子を明らかに示し乍ら、云つた。

「あの室へ少し風を入れなくちやならないんですから」  
さう云つて彼は廊下を横ぎつて、他の戸口へ行つた。けれども鍵穴に鍵を挿しこんだとき、跋をひいて來る伯母の建音が背後に聞えた。